マタイ福音書の学び（後半）15 章~28 章

篠崎キリスト教会

32. マタイ 15：1-20、人を汚すものは何か

1. 人を汚すものは何か

・マタイ 15 章はイエスとユダヤ教指導者たちの衝突で始まる。ファリサイ派の人々と律法学者たちは新興勢力のイエスの活動を監視するため、エルサレムの本部から派遣された。彼らは、イエスの弟子たちが食前に手を洗わないと非難した。

ーマタイ　15:1-2「そのころ、ファリサイ派の人々と律法学者たちがエルサレムからイエスのもとへ来て言った『なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人の言い伝えを破るのですか。彼らは食事の前に手を洗いません』」。

・当時のユダヤは、念入りに手を洗ってからでないと食事をしない。市場から帰った後も沐浴して身を清めてでなければ食事をしない。ユダヤ人の律法は不浄なものに触れることを禁じ、一定の食物については汚れているから食べるなと命じる。ファリサイ人らは規定を厳格に守り、守らない人々を不信仰=罪人と批判していた。食事の前に手を洗うことは、単なる衛生上の問題ではなく、宗教的な儀式であり、イエスと弟子たちは宗教的戒めを破ったとして非難されている。

ーマタイ 15:3-6「そこで、イエスはお答えになった。「なぜ、あなたたちも自分の言い伝えのために、神の掟を破っているのか。神は、『父と母を敬え』と言い、『父または母をののしる者は死刑に処せられるべきである』とも言っておられる。それなのに、あなたたちは言っている。『父または母に向かって、あなたに差し上げるべきものは、神への供え物にすると言う者は、父を敬わなくてもよい』と。こうして、あなたたちは、自分の言い伝えのために神の言葉を無にしている」。

・当時は「食事の前には手を洗いなさい」という掟だけではなく、どういう順序で、どうやって洗うかまで細かく規定されていた。ファリサイ派はそういう口伝をも律法の一部として守るように強要していた。「衛生に気をつけて暮らしなさい」とい本来の神の教えが、いつの間にか、「食前に手を洗わないものは罪人だ」と言う人間の戒律になっていた。イエスはファリサイ人の偽善を鋭く指摘された。

ーマタイ 15:7-9「偽善者たちよ、イザヤはあなたたちのことを見事に預言したものだ。『この民は口先では私を敬うが、その心は私から遠く離れている。人間の戒めを教えとして教え、むなしく私をあがめている。』」

・「ファリサイ」とは、「分離する」と言う意味である。彼らは「汚れた民衆から分離した者」、あるいは「罪や汚れから分離した者」と自分たちを考えていた。当時のファリサイ人や律法学者たちは風紀取締官、歩く律法のようになっていて、少しでも律法を破るものがいればそれを非難し、自分たちは律法や儀式を厳格に守ることで神に奉仕していると信じ込んでいた。イエスは彼らを鋭く批判される。

ーマタイ 23：13「律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。人々の前で天の国を閉ざすからだ。自分が入らないばかりか、入ろうとする人をも入らせない」。

2. 人を本当に汚すものは何か

・イエスは群集を呼び寄せて言われる「外から人の体に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出て来るものが、人を汚す」。

ーマタイ 15：10－11 それから、イエスは群衆を呼び寄せて言われた。『聞いて悟りなさい。口に入るものは人を汚さず、口から出るものが人を汚すのである。』」

・話の意味が弟子たちには理解できない。そのためイエスは弟子たちに言葉の解説をされる。

ーマタイ 15：15－18「するとペトロが、『その譬えを説明してください』と言った。イエスは言われた。『あなたがたも、まだ悟らないのか。すべて口に入るものは、腹を通って外に出されるのが分からないのか。しかし、口から出て来るものは、心から出て来るので、これこそ人を汚す』」。

・「外から体に入るものが人を汚す」と当時の人びとは考えていた。私たちは食べると宗教的に汚れてしまうような食物があるとは思わない。それにもかかわらず、この物語は私たちに迫る。「人の中から出て来るもの」、言葉の害を知っているからだ。その言葉の元になっているのは悪い思いだ。言葉と思いが人を汚す。汚れや罪は、元々私たちの内側にあり、その内側にある汚れ、罪が、思いとなり言葉となり行動となって外に現れてくる、そのようにして私たちは汚れた者、罪ある者となるのだとイエスは言っておられる。

ーマタイ 15：18-20「しかし、口から出て来るものは、心から出て来るので、これこそ人を汚す。悪意、殺意、姦淫、みだらな行い、盗み、偽証、悪口などは、心から出て来るからである。これが人を汚す。しかし、

手を洗わずに食事をしても、そのことは人を汚すものではない」。
・私たちも自分の汚れや罪、醜さが自分の内側から生じていることを認めないで、それを外側のせいにする。社会が悪い、景気が悪い、境遇が悪い、だから自分は過ちを犯したと人は弁解する。汚れは自分の外にある、外にある汚れが自分にふりかかってくる、自分は被害者だと思ってしまい、実は汚れは自分自身の中にあるのだということがわからない。
・「外から入ってくるものは人を汚さない」、何故ならば「それは人の心の中に入るのではなく、腹の中に入り、そして外に出される」からだ。食物は口から入り、消化器官を通ってやがて排出されていく。その間に消化がなされ、栄養分が体に吸収される。食物、つまり外から入ってくるものは、体を通ってまた外に出ていく。それは私たちの中を通過していくだけで、私たちの人間としての本質に関わるものではない。
・それでは、人間の本質は何か。「人間の心から、悪い思いが出て来る」という言葉がそれを示す。「心」こそ、人間の本質であり、神は人間を「心」を持ったものとして造られた。人間の汚れ、罪、それは体ではなくて心に宿る。汚れ、罪が心に宿るということは、私たちの外側の問題ではなく、内側の問題だということだ。汚れや罪は私たちの内側に、心の中に生れ、それが外に現れてくる。

**3. この物語を私たちはどう聞くか**
・この記事は元々イエスの弟子たちが手を洗わないで食事をしたことを、ユダヤ教指導者が非難したことから始まった。イエスが神の戒めを根本に戻って解釈されたのに、ユダヤ教指導者は手洗いの儀式のような外面的、形式的な儀式にこだわった。この事件はさらに。その後のイエスと彼らとの対立の遠因となる。イエスが並べ立てて指摘した、人の心から出て人を汚す悪意、殺意、姦淫、淫らな行い、盗み、偽証、悪口などは、イエスの時代を越えて、現代になってもなお、人を損ない、人を汚し続けている。ヤコブ書も「舌を制御できない人間の罪」を語る。
ーヤコブ 3：8-10「舌を制御できる人は一人もいません。舌は、疲れを知らない悪で、死をもたらす毒に満ちています。私たちは舌で、父である主を賛美し、また、舌で、神にかたどって造られた人間を呪います。同じ口から賛美と呪いが出て来るのです。私の兄弟たち、このようなことがあってはなりません」。
・私たちは「汚れる」ことを極度に恐れるユダヤ人をおかしいと笑うが、私たちも「汚れる」ことを恐れて暮らしている。学校でも職場でも家庭でも私たちは人の言葉に傷つけられた経験があるから、今度は傷つけられまいと防御して暮らしている。人の口から出るもの、言葉が人を傷つけるのは、言葉が心にあるものを反映しているからだ。「心にもないことを言う」という言葉は真実ではない。人は心にあふれてくることを語る。そして、人の心の中にあるのは悪い思いだ。誰かを妬ましく思うとき、その思いは言葉となって相手を攻撃する。誰かを嫌いだと思うとき、その思いが言葉となって相手を傷つける。そして私たちは「言葉、舌」を制御できない存在なのだ。
ーヤコブ 3：5-7「舌は小さな器官ですが、大言壮語するのです。御覧なさい。どんなに小さな火でも大きい森を燃やしてしまう。舌は火です。舌は不義の世界です。私たちの体の器官の一つで、全身を汚し、移り変わる人生を焼き尽くし、自らも地獄の火によって燃やされます」。
・イエスは外からの汚れを心配するユダヤ人に言われた「人の中から出て来るものが人を汚す」。内側の汚れは水でいくら洗っても、清くならない。「これは汚れているから食べない」と努力しても、汚れを気にして、家に清めの水がめを置いても問題は解決しない。イエスの弟子たちは、旧約の食物規定を捨てた。異邦人を教会に迎えるためには、ユダヤ人の慣習を押し付けてはいけないと思ったからだ。こうして、新しい交わりが生まれた。私たちも思い切って捨てる、これまでと変わる必要がある。人間関係を良くしようといくら努力しても、人間関係は改善しない。汚れは私たちの外にあるのではなく、私たちの心の中にあるからだ。私たちの心が変えられること、復活のイエスとの出会いを通して新しく生まれる、そこにしか救いはない。

**33. マタイ 15：21－39、異邦の地での奇跡物語**
**1. カナンの女の信仰**
・「イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた」（マタイ 4：23）。人々は次から次へ病人をイエスの許に連れて来た。イエスは彼らを癒されたが、癒してもらった人々はイエスの許を去った。イエスは人々の姿に失望された。癒しだけを求め、満たされると去って行く。イエスはユダヤの人びとに失望して異邦人の地、ツロとシドンの地に行かれた。そこはバアル礼拝に象徴される偶像礼拝の盛んな地であった。
ーマタイ 15：21「イエスはガリラヤを立ち、ティルスとシドンの地方に行かれた」

・「立ち」という言葉は直訳すると「退く」と言う意味だ。イエスはガリラヤでの宣教に疲れられて、休息を求めて、異邦人の土地に退かれた。しかし、そこにも人々が押しかけてきた。その中に、娘が悪霊につかれて苦しんでいる女が、イエスの評判を聞き、治して欲しいと求めて来た。
ーマタイ 15:22「すると、この地に生まれたカナンの女が出て来て、『主よ、ダビデの子よ、私を憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています』と叫んだ」。
・「悪霊に苦しめられている」、重い精神障害を病んでいたのであろう。医者や祈祷師の所に行ったが、誰も治せなかった。女はわらにもすがる思いでイエスのところに来た。「叫んだ」、原文では「わめく、大声で叫ぶ」の意味だ。髪を振り乱し、金切り声を上げて、娘の癒しをイエスに訴えた。しかし、イエスは何もお答えにならなかった。弟子たちはたまりかねてイエスに言った「この女を追い払ってください。叫びながらついて来ますので」。
ーマタイ 15:23「しかし、イエスは何もお答えにならなかった。そこで、弟子たちが近寄って来て願った。『この女を追い払ってください。叫びながらついて来ますので』」。
・弟子たちはこの母子に対して何の同情も寄せない。異邦人への差別意識と女性蔑視があったのだろうか。イエスは女に対して言われた「私はイスラエルの家の羊のところにしか遣わされていない」。
ーマタイ 15 : 24「イエスは『私は、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない』とお答えになった」。
・「私はイスラエルを救うために、父から派遣されてきた」、「まずイスラエルの民を」というのがイエスのお考えだった。しかし、女はあきらめなかった「主よ、助けてください。あなた以外に頼る人はいないのです、誰も治せなかった、あなたが見捨てたら、私たち親子は死ぬしかないのです」と女は訴えた。
ーマタイ 15:25「しかし、女は来て、イエスの前にひれ伏し、『主よ、どうかお助けください』と言った」。
・女は必死だった。彼女はイエスの前にひれ伏した。土下座して、イエスの救いを求めた。その女にイエスは言われた「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」。しかし女はくじけなかった。
ーマタイ 15:26-27「イエスが、『子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない』とお答えになると、女は言った。『主よ、ごもっともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです』」。
・犬は異邦人を指す。イエスは言われた「私はイスラエルの子供たちを救うために来た。異邦人の救いは、私ではない誰かが行うであろう」。女はくじけない。「その通りです、私たちは選ばれた民ではありません。まずイスラエルの子供もたちが食べるべきです。しかし、神は私たち異邦人にも恵みを拒否される方ではありません」。イエスは女に言われた「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願い通りになるように」。「あなたの信仰はイスラエル人より大きい。彼らは当然の権利のごとくに私の癒しを要求したが、あなたは神の憐れみを求めた。父はあなたを憐れんでくださる」。イエスはこれまでの伝道方針を破って、異邦人の娘を癒された。
ーマタイ 15:28「そこで、イエスはお答えになった。『婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように』。そのとき、娘の病気はいやされた」。

**2. この物語が示すもの**
・イエスは女の求めを三度拒絶された。最初は女の叫びを無視され、二度目は「異邦人を癒すことは私の使命ではない」と言われ、三度目は「神の力を異邦人に用いることは私には許されていない」と言われた。このような拒絶の体験を私たちもする。病や苦しみが与えられた時、私たちは必死になって祈る「主よ、どうか憐れんでください」。しかし、何の答えもない。その時、私たちは祈りが拒絶されたと怒り、祈りを止める。この教会にも過去に多くの人が、御自分の、あるいはお子さんの癒しを求めて来られた。そして癒されないと知ると、失望して去って行かれた。カナンの女は必死に求めた。無視され、拒絶されても、求めた。他にあてが無かったからだ。この熱心さがイエスの心を動かした。
・しかし、同時に、私たちはもう一つの現実を知る必要がある。それは、どんなに求めても癒されない病があり、どんなに求めても取り除かれない苦しみがあるという事実だ。心の病に苦しむ娘を持った母親はこう書いている。
ーある母親の手記から「聖書にイエス様が病人や悪霊に取りつかれている人たちをおいやしになった事が出てきます。その度に思うのは娘のことです。9歳の一人娘は知的障害で自閉症です。もしその当時、私が『イエスと言う救い主が現れて病人を治している』と聞けば、娘を連れてどんなに遠くても行ったことでしょう。『何とか治してほしい。どうぞ治してください』と祈っていると、時々虚しくなります。障害の重さばかり目に付いてしまい、絶望的になります」。

・心の病を持つ子がいる家族の苦悩は重い。全国精神障害者家族会「心の病ー家族の体験」という本を読むと、多くの苦しみの言葉がある。ある母親は、精神分裂病で入院した娘から「私の人生を返せ」と言われて泣き崩れた。夫から「娘がこうなったのはお前のせいだ」といわれて、子を殺して自分も死のうと考えた人もいる。しかし、多くの経験者は言う「何故ですかと叫び続ける時、苦しみの大きさに押し潰されてしまう。解決が見えないからだ。しかし、何をすべきかと考えた時に、この状態を受入れられるようになる」。カナンの女も思っただろう「私は何故こんなに苦しまなければいけないのか」。彼女はイエスと対話するうちに、神は私たちの不幸を願っておられるのではなく、幸いを願っておられることに気がついた。だから彼女は言った「子犬も主人の食卓から落ちるパンくずはいただくのです」。神は私たちを憐れんで下さる。そう信じた。この信仰をイエスは「あなたの信仰は大きい」とほめられた。

**3.4 千人の給食**

・イエス一行はティルスとシドンの旅の後、ガリラヤ湖の岸辺、デカポリス地方へ戻り、イエスが山に登り休んでおられると、大勢の人々が癒しを求めて来た。イエス彼らを癒された。癒しの業に驚いた人々はイスラエルの神を賛美した。「イスラエルの神を賛美した」とのはユダヤ人ではなく、イエスに癒された異邦人であった。

ーマタイ 15：29ー31「イエスはそこを去って、ガリラヤ湖のほとりに行かれた。そして、山に登って座っておられた。大勢の群衆が、足の不自由な人、目の見えない人、体の不自由な人、口の利けない人、その他大勢の病人を連れて来て、イエスの足もとに横たえたので、イエスはこれらの人々をいやされた。群衆は口の利けない人が話すようになり、体の不自由な人が治り、足の不自由な人が歩き、目の見えない人が見えるようになったのを見て驚き、イスラエルの神を賛美した。」

・イエスはカナンの女の娘の癒し、大勢の異邦人の癒し、さらに四千人の群衆への給食までされた。

ーマタイ 15：35ー39「イエスは地面に座るよう群衆に命じ、七つのパンと魚を取り、感謝の祈りを唱えてこれを裂き、弟子たちにお渡しになった。弟子たちは群衆に配った。人々は皆、食べて満腹した。残ったパン屑を集めると、七つの籠いっぱいになった。食べた人は女と子供を別にして、男が四千人であった。イエスは群衆を解散させ、舟に乗ってマガダン地方へ行かれた。」

・直前の 14 章には 5 千人の給食の話があり、ここでは 4 千人の給食だ。同じような出来事が二度あったのだろうか。マタイはそう理解して二度記し、ルカは同じ話の繰り返しとして、これを省略している。

ーマタイ 16:8-11「イエスはそれに気づいて言われた。『信仰の薄い者たちよ、なぜ、パンを持っていないことで論じ合っているのか。まだ、分からないのか。覚えていないのか。パン五つを五千人に分けた時、残りを幾籠に集めたか。また、パン七つを四千人に分けた時は、残りを幾籠に集めたか。パンについて言ったのではないことが、どうして分からないのか。ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種に注意しなさい』」。

**33. マタイ 16：1-12、ファリサイ派のパン種**

**1. 人々はしるしを欲しがる**

・サドカイ派とファリサイ派の者たちが共に来て、イエスに『しるし』を求めた。ファリサイ派とサドカイ派は対立していたが、共通の敵イエスに対峙するためにそろって来ている。

ーマタイ 16:1「ファリサイ派とサドカイ派の人々が来て、イエスを試そうとして、天からのしるしを見せてほしいと願った」。

・イエスは病人の癒しや五千人への給食を行われたが、ユダヤ教指導者たちは満足せず、しるしを求めた。彼らが求めるしるしは、「神から遣わされたメシア」であるのか、あるいは「神の言葉を語る預言者」であるならば、「その証拠を見せよ」ということであった。イエスはしるしを拒否された。

ーマタイ 16:2-3「イエスはお答えになった。『あなたたちは、夕方には『夕焼けだから、晴れだ』と言い、朝には『朝焼けで雲が低いから、今日は嵐だ』と言う。このように空模様を見分けることは知っているのに、時代のしるしは見ることができないのか』」。

・12 章では「しるしを見せよ」と要求する人々に、イエスは「ヨナのしるし」だけが与えられると答えられた。イエスがメシアであることを知りたければ、彼の復活を見よとマタイの教会は主張していたことが反映されている。

ーマタイ 12:38-41「すると、何人かの律法学者とファリサイ派の人々がイエスに、『先生、しるしを見せてください』と言った。イエスはお答えになった。『よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがるが、預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない。つまり、ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にい

たように、人の子も三日三晩、大地の中にいることになる・・・ここに、ヨナにまさるものがある』」。
・イエスはユダヤ教指導者を残し、その場を去られた。神の子のしるしは言葉で説明して納得できるものではなく、「復活のキリストとの出会い」を体験するしかない出来事である。
ーマタイ 16：4「『よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがるが、ヨナのしるしの他には、しるしは与えられない。』そしてイエスは彼らを残して立ち去られた。」

2. サドカイ派とファリサイ派のパン種
・イエスは弟子たちとガリラヤ湖対岸へ渡られた。舟の中で弟子たちはパンを持って来るのを忘れ、どうしようかと話しあっていた。イエスは彼らに、「ファリサイ派とサドカイ派のパン種」に注意せよと教え始められる。弟子たちは自分たちがパンを持ってくるのを忘れたためイエスが叱責されたと勘違いした。
ーマタイ 16:5-7「弟子たちは向こう岸に行ったが、パンを持って来るのを忘れていた。イエスは彼らに、『ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種によく注意しなさい』と言われた。弟子たちは、『これは、パンを持って来なかったからだ』と論じ合っていた」。
・イエスは弟子たちに、「五千人と四千人への給食を思い起こせ」と言われる。「食べるパンについて語られた」のではないことが何故わからないのかと。
ーマタイ 16：8-10「イエスはそれに気づいて言われた。『信仰の薄い者たちよ、なぜ、パンを持って来ないことで論じ合っているのか。まだ、分からないのか。覚えていないのか、パン五つを五千人に分けた時、残りを幾籠に集めたか。また、パン七つを四千人に分けた時は、残りを幾籠に集めたか。パンについて言ったのではないことが、どうして分からないのか』。
・イエスはファリサイ派とサドカイ派のパン種に注意せよと弟子たちに教えられた。パン種とは、外面的なしるしを求め、イエスを神から派遣された使者と認めない彼らの生き方である。
ーマタイ 16：11-12「パンについて言ったのではないことが、どうして分からないのか。ファリサイ派とサドカイ派のパン種に注意しなさい。そのとき、ようやく、弟子たちは、イエスが注意を促されたのは、パン種のことではなく、ファリサイ派とサドカイ派の教えのことだと悟った。」

3. ファリサイ派の愚かさ
・イエスは最初にファリサイ派の愚かさを指摘される。彼らはイエスが 7 つのパンで 4 千人を養われる場を目撃した。にもかかわらず彼らはイエスに更なるしるしを求める。7 つのパンで 4 千人を養うのは物理的には不可能であり、7 つのパンであれば 7 人が食べれば終わりだ。それを 4 千人の人が食べるという奇跡を彼らは目の前に見た。不可能を可能にされる神の業を今彼らは見た。しかし、彼らは更なるしるし、「あなたが神から遣わされたのであればその証拠を見せよ」と求める。イエスは答えられた「しるしは今の時代には決して与えられない」。ファリサイ派の人々も、イエスを受入れなかったナザレの群衆と同じだ。正式なラビ教育も受けず、按手礼も受けていないイエスの権威を彼らは認めず、言葉に耳を貸さない。
・ファリサイ派の人びとは「律法、神の戒めを守れば救われる」と考えた。そのため彼らは律法の規定を細分化し、書かれた律法だけでなく、彼らが定めた口伝律法の順守も求めた。規定を守らない者を「地の民（アム・ハーレツ）」として軽蔑した。ファリサイの名はペリッシュ（分離する）というアラム語から来る。彼らは様々の汚れから自分たちを分離し、身を清く保とうとした。自分を正しいとする者は何を見ても感動しない。イエスが食べるものも無い人々を見て「この群衆がかわいそうだ、彼らは三日間も食べていない」と憐れまれて、人々を養われても、彼らはそれを天からのしるしと見ていない。彼らにとって「自分が救われる」ことが最大の目的なのであって、地の民がお腹をすかしていようが関係がない。
・私たちにもこのファリサイ派のパン種がある。教会に汚い服装のホームレスの人が来たら私たちはどうするのか、「教会は神を求める正しい人が集まる聖なる場所であり、汚い身なりの人が来るところではない」と、私たちがする時、私たちもファリサイ派なのだ。私たちが「主よ、主よ」と自分の救いのみを求め、空腹の 4 千人の存在を無視したら、私たちもファリサイ派と同じだ。現代の私たちは、数十万、数百万の人びとが餓えで死につつあることを知っており、様々の団体が支援活動を行っていることを知っている。が、それを気にもかけない。「ファリサイ派のパン種に警戒しなさい」というイエスの言葉は、私たちに言われている。

4. 弟子たちの愚かさ
・二番目の愚かさは弟子たちの無知である。弟子たちは 4 千人が養われるのを見た。乏しいものでも分け与

える時、多くの祝福が与えられるのを見た。それにもかかわらず、今手元にパンが1つしかなく、みんなが食べることが出来ないと騒いでいる。この愚かさは私たちの内にもある。神は私たちを養ってくださることを教えられながら、子供の教育費はどうする、家のローンの支払いは大丈夫か、このままでは老後が心配だ、私たちの毎日はわずらいに満ちている。イエスが「何を食べようか、何を飲もうか、あるいは何を着ようかと言って思いわずらうな。・・・あなたがたの天の父は、これらのものが、ことごとくあなたがたに必要であることをご存じである。」（マタイ6：31-32）と言われても、私たちは、うわの空で聞き流し、本気で考えようとはしない。
・自分の生存を神に委ねようとしないから、私たちは自分のパンを裂いて他者に与えることが出来ず、「パンは一つしかない、みんなが食べるには足らない」と騒いでいる。人間の目から見ればパンの欠乏は大きな問題である。しかし、神の目から見れば必要なものは与えると約束しているのに、何故信じないのかという問いかけになる。「委ねてみよ、主の恵みを試してみよ」と私たちは問われている。
・食べものが無く4千人が餓えていた時、弟子たちが持っている7つのパンを差し出せば、神は4千人を養うにパンにして下さる。自分たちだけで食べようとする時、7つのパンは7人しか養わない。「なぜ、パンがないからだと論じ合っているのか。まだわからないのか、悟らないのか。あなたがたの心は鈍くなっているのか。目があっても見えないのか。耳があっても聞えないのか。まだ思い出さないのか」（マルコ8：17-18）とイエスは言われる。私たちはこの真理を本当に知っているのかと問われる。
・私たちが幸福になりたいのであれば、「今手元にあるパンを二つに割って一つを他者に与えよ」とイザヤは言う。分け与えることをこそ、神が求められていることだ。
ーイザヤ58：10-11「飢えた者にあなたのパンを施し、苦しむ者の願いを満ち足らせるならば、あなたの光は暗きに輝き、あなたのやみは真昼のようになる。主は常にあなたを導き、良き物をもってあなたの願いを満ち足らせ、あなたの骨を強くされる。あなたは潤った園のように、水の絶えない泉のようになる。」
・アメリカの心理学者マズローは自己実現の五段階欲求説をとなえた。マズローの考えでは、人間はまず「生理的欲求」が満たされることが必要で、その上に「安全性欲求」、「社会的欲求」、「承認欲求」、最後に「自己実現欲求」を求める。しかし、晩年のマズローは「人は五段階がすべて満たされても本当には満たされない」と語る。人間は、「自己実現欲求」が満たされても幸せになれないし、すべてが満たされても「虚しい」と思う存在であり、その虚しさを超えるものこそが、「自己超越欲求（他者欲求）」だとマズローは語る。個人の利益を超えて同胞や社会のために貢献したいという思いが人を生かし、聖書が語るあり方だ。

**34. マタイ16：13－28、ペテロの信仰告白**
**1. ペトロの信仰告白**
・イエスは弟子たちとピリポ・カイザリアに向かわれる。この後、イエスはエルサレムに向かわれるが、そこにはイエスに敵意を持つ祭司長や律法学者が待ち受け、イエスは殺される危険があった。だから、イエスはエルサレムで待ち受けている苦難を弟子たちに伝え、彼らの覚悟を求めたいとして、北の保養地に行かれた。その地で、イエスは弟子たちに「人々は私のことを何者だと言っているのか」と尋ねられた。
ーマタイ16：13「イエスはフィリポ・カイザリア地方に行った時、弟子たちに、『人々は、人の子を何者だと言っているか』とお尋ねになった」。
・人々は、イエスを「洗礼者ヨハネだ、エリヤだ、エレミヤだ、預言者の一人だ」などと言っていた。
ーマタイ16:14「弟子たちは言った。「『洗礼者ヨハネだ』と言う人も、『エリヤだ』と言う人もいます。ほかに、『エレミヤだ』とか、『預言者の一人だ』と言う人もいます。」
・イエスはさらに問われる「それでは、あなたがたは私を何者だと言うのか」。弟子たちを代表する形でペテロが答えた「あなたはメシア、生ける神の子です」。
ーマタイ16:15-16「イエスが言われた。『それでは、あなたがたは私を何者だと言うのか。』シモン・ペトロが、『あなたはメシア、生ける神の子です』と答えた」。
・ペテロの告白に対して、マタイは17節以降でイエスの祝福の言葉を記す。
ーマタイ16：17-19「シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、私の天の父なのだ。私も言っておく。あなたはペトロ。私はこの岩の上に私の教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない。私はあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる」。
・この個所はマタイが基本資料としたマルコ福音書になく（マタイの50%はマルコから取られている）、並行するルカ福音書にもない（マタイとルカは30%が同じ記事）ことから、マタイが独自に編集して挿入した

言葉とされる。イエスは人々に「悔い改め」を求められたが、それは「教会」を形成するためではなく、終末を前に、人々に「終末への準備」を迫るためであった。しかしイエスは志半ばで十字架に殺され、復活され、そこに「イエスは主である」と告白する教会が生まれてきた。「あなたはメシア、生ける神の子です」は、イエス生前のペテロの告白ではなく、復活後のマタイ教会の信仰告白の言葉だ。
ーアルフレッド・ロワジー「イエスが教えたのは神の国の到来であったが、やってきたのは教会だった」。

**2. イエス、死と復活を予告する**
・イスラエルの宗教指導者たちは、イエスに敵対し、迫害の度を強めている。エルサレムに行けば受難は避けられない。それが父なる神の御心であれば受けようとイエスは決心しておられ、イエスは弟子たちに受難を予告された。
ーマタイ 16：21「この時から、イエスは御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者らから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっていると、弟子たちに打ち明け始められた」。
・弟子たちは耳を疑った。神から遣わされたメシアが殺されて死ぬ、そんなことはありえない。マタイは「ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた」と記す。それに対してイエスは「サタン、引き下がれ」とペテロを激しく叱りつける。
ーマタイ 16：22－23「するとペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。『主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません』。イエスは振り向いてペトロに言われた。『サタン、引き下がれ、あなたは私の邪魔をする者。神のことを思わず人間のことを思っている』」。
・人はいつも「栄光のメシア」を求める。弟子たちは「この人に従っていけば、自分たちもひとかどの者なれる」と思い、イエスがエルサレムで王位につかれ、自分たちも相応の地位を与えられると期待していた。その弟子たちにイエスは「死ぬためにエルサレムに行く」と言われる。「とんでもない」という思いが、ペテロの激しい言葉を引き出し、イエスは「サタンよ、引き下がれ」と激しく叱責された。出来事からわかることは、イエスの生前、弟子たちはイエスを理解出来ず、「イエスは神の子」との信仰は持てなかったという事実だ。だから彼らは、イエスが捕らえられた時には逃げ去り、「お前はイエスの仲間だ」と告発されると、「そんな人は知らない」と否定する。その彼らが復活のイエスとの出会いを通して変えられていく。
ーヨハネ 21：17「三度目にイエスは言われた。『ヨハネの子シモン、私を愛しているか。』ペトロは、イエスが三度目も、『私を愛しているか』と言われたので、悲しくなった。そして言った。『主よ、あなたは何もかもご存じです。私があなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。』イエスは言われた。『私の羊を飼いなさい』」。
・復活のイエスが弟子たちに託した言葉「私の羊を飼いなさい」が、マタイの「私はあなたに天の国の鍵を授ける」という言葉に示されている。復活のイエスはさらに弟子たちに言われる。
ーマタイ 16：24－25「それから弟子たちに言われた。『私について来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、私に従いなさい。自分の命を救いたいと思う者はそれを失うが、私のために命を失う者は、それを得る』」。
・イエスは復活後昇天されたが、やがて再臨されると弟子たちは信じ、その時は近いと信じた。この再臨の近接が、初代教会を伝道共同体にした。16：26－28 の言葉も当然に教会の信仰告白の言葉である。
ーマタイ 16：26－28「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。自分の命を買い戻すのにどんな代価を支払えようか。人の子は、父の栄光に輝いて天使たちと共に来るが、そのとき、それぞれの行いに応じて報いるのである。はっきり言っておく。ここに一緒にいる人々の中には、人の子がその国と共に来るのを見るまでは、決して死なない者がいる」。

**3. 聖書は複合的に読む必要性がある**
・ヨハネ 20 章にも、復活されたイエスが、弟子たちに群れを委託した言葉が残されている。
ーヨハネ 20：22-23「そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた『聖霊を受けなさい。だれの罪でもあなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でもあなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る』」。
・この言葉を読む時、そこにマタイ 16 章と同じ言葉が語られていることに気付く。マタイ 16 章のイエスの祝福の言葉は、復活のイエスが弟子たちに語った委託の言葉なのだ。
ーマタイ 16：19「あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる」
・生前のイエスは、「神の国が来る」と宣教され、「神が新しい世をお造りになる。だから悔い改めて待て」

と命じられた。そのイエスが十字架で死なれ、復活して弟子たちに現れ、弟子たちはイエスが神の子であったことを知った。そのイエスに弟子たちは告白する「あなたこそメシア、生ける神の子です」（マタイ 16：16）。その告白に対して、復活のイエスが「シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、私の天の父なのだ」（マタイ 16：17）と祝福しておられる。
・地上を生きる私たちは、本当の意味での信仰告白をすることが難しい。ペテロの信仰告白にしても当初は見当違いの信仰告白であり、「サタンよ、退け」とイエスに叱責され、裏切りと挫折を経て復活のイエスに再会し、本当の信仰告白にたどり着いた。日本の教会では、洗礼を受けた信徒の六割以上は、やがて教会から離れる。それは私たちの信仰が、「自我の業としての信仰」にとどまっているからだと、精神科医赤星進氏は語る（赤星進「心の病気と福音」）。
ー赤星進「自我の業としての信仰とは、救われるために神を信じる信仰だ。この病を癒してほしい、この苦しみを取り除いてほしいとして、私たちは教会の門をたたき、聖書を読み、バプテスマを受ける。しかし、この信仰に留まっている時は、やがて信仰を失う。なぜならば、自我の業としての信仰は、要求が受け入れられない時には、崩れていく」。
・赤星氏は続ける「神の業としての信仰を持て」と。弟子たちは復活のイエスに出会うことによってこの信仰を与えられ、イエスのために死を恐れない者とされた。
ー赤星進「それは赤子が母親に対してどこまでも信頼するのに似た、神に対する信頼だ。生まれたばかりの赤子は一人では生きていくことができず、一方的に母親の愛を受け、その中で安心して生きていく。イエスが示されたものはこの信仰、神への基本的信頼の信仰ではないか」。
・私たちは、信仰告白をして洗礼を受けても、いろいろな出来事の中で、教会につまずき、教会を離れ、信仰を無くしてしまう存在だ。しかし、キリストはいつでも帰還を待っておられ、キリストの弟子たち（教会）はいつでも歓迎の準備をしている。今教会にいる私たちも失敗し、挫折し、教会を離れたことがあるからこそ、教会を離れている友を「迎える」ことが出来る。ペテロの体験は私たちの体験なのである。
ーヨハネ黙示録 3：20「見よ、私は戸口に立って、たたいている。だれか私の声を聞いて戸を開ける者があれば、私は中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、私と共に食事をするであろう」。

**35. マタイ 17：1ー20、山上の変貌**
**1. イエスの姿が変わる**
・イエスは受難予告の後に、高い山（ガリラヤ北東部ヘルモン山といわれる）に上り、そこで変貌の姿を弟子たちに見せたとマタイは伝える。「山上の変貌」の記事である。イエスが三人の弟子を連れて山に登られた時、イエスの姿が弟子たちの目の前で輝くような姿に変わった。
ーマタイ 17：1-3「六日の後、イエスはペトロ、それにヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。イエスの姿が彼らの目の前で変り、顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった。見るとモーセとエリヤが現れ、イエスと語り合っていた」。
・弟子たちには何が起きたのか、理解できない。イエスの姿が彼らの目の前で変り、「顔は太陽のように輝き、目は光のように白くなった」とマタイは記す。イエスの突然の変貌を目撃したペトロは、「仮小屋を三つ建てましょう」と言う。彼は茫然自失していた。
ーマタイ 17：4「ペトロが口をはさんでイエスに言った。『主よ、私たちがここにいるのは、すばらしいことです。お望みでしたら、私がここに仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、一つはエリヤのためです』」。
・現れたモーセとエリヤは、これから受難を迎えるイエスを励ましたとされる。並行記事のルカではイエスがこれからエルサレムで迎える受難について語り合ったと記している。「最後」と訳されている言葉の原語は「エクソダス=脱出」、旅立ちの意味だ。十字架は終わりではなく、新しい旅立ちであることを、二人はイエスに話し、励ました。
ールカ 9:30-31「見ると、二人の人がイエスと語り合っていた。モーセとエリヤである。二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた」。
・そして天から声が聞こえたとマタイは記す「これは私の愛する子、私の心に適う者。これに聞け」。イエスの洗礼の時に天から下った声と同じである。
ーマタイ 3：16-17「イエスは洗礼を受けると、すぐ水の中から上がられた。そのとき、天がイエスに向かって開いた。イエスは、神の霊が鳩のように御自分の上に降って来るのを御覧になった。そのとき『これは私の愛する子、私の心に適う者』と言う声が、天から聞こえた」。

・山上の変貌の記事は日常体験とかけ離れており、理解が難しい。聖書学者は、この出来事は弟子たちの復活者イエスとの顕現体験が、イエスの地上活動の中に反映されたのではないかと考える。復活されたイエスは「高い山」で弟子たちに現われている（マタイ 28：16）。
ーマタイ 17：5-8「ペトロがこう話しているうちに、光り輝く雲が彼らを覆った。すると、『これは私の愛する子、私の心に適う者。これに聞け』という声が雲の中から聞こえた。弟子たちはこれを聞いてひれ伏し、非常に恐れた。イエスは近づき、彼らに手を触れて言われた。『起きなさい。恐れることはない。』彼らが顔を上げて見ると、イエスのはかにはだれもいなかった。」
・ペテロはこの時の体験を第二ペテロ書に記している。手紙が書かれたのはペテロの晩年、教会は迫害の中にあり、ペテロ自身も殉教の時が近づいている中で、信徒たちに励ましの手紙を書く。信徒たちは迫害の中で信仰が揺らぎ始めていた。「仲間が殺されても、神は何もして下さらない。信徒を守ることの出来ない神は本当の神なのか」。その信徒たちにペテロは述べる「私が話したことは作り話ではない。私はイエスと共に山に登り、そこでイエスが神の栄光に包まれるのをこの目で見た。そして、神の言葉をこの耳で聞いた。私はイエスの十字架の死もその復活も見た。イエスは神の子だ。御子は再び来られるから、忍耐を持ってその日を待て」と。
ー第二ペテロ 1:16-18「私たちの主イエス・キリストの力に満ちた来臨を知らせるのに、私たちは巧みな作り話を用いたわけではありません。私たちは、キリストの威光を目撃したのです。荘厳な栄光の中から、『これは私の愛する子。私の心に適う者』というような声があって、主イエスは父である神から誉れと栄光をお受けになりました。私たちは、聖なる山にイエスといた時、天から響いてきたこの声を聞いたのです」。

**2. 人々はエリヤが来たのに認めなかった**
・山を下りる時、イエスは山で見たことを、「復活の時まで誰にも話すな」と弟子たちに口止めした。その時がまだ来ていないからである。この記事も、山上の変貌の出来事が復活のイエスとの顕現体験であったことを示唆する。
ーマタイ 17：9「一同が山を下りる時、イエスは、『人の子が死者の中から復活するまで、今見たことをだれにも話してはならない』と弟子たちに命じられた」。
・弟子たちはメシア来臨についてイエスに質問した。山上でエリヤが現れたことが、この質問のきっかけとなった。イエスはマラキ書を引用して「確かにエリヤが来た」（マラキ 3：23－24）と語るが、人々は来臨したエリヤを受け入れなかったと批判した。その時、弟子たちはイエスが洗礼者ヨハネのことを言っていると悟る。イエスはヨハネの死に自分のこれから来る死を重ねて見ている。
ーマタイ 17：10-13「彼らはイエスに、『なぜ、律法学者は、まずエリヤが来るはずだと言っているのでしょうか』と尋ねた。イエスはお答えになった。『確かにエリヤが来て、すべてを元どおりにする。言っておくが、エリヤはすでに来たのだ。人々は彼を認めず、好きなようにあしらったのである。人の子も、そのように人々から苦しめられることになる。』そのとき、弟子たちは、イエスが洗礼者ヨハネのことを言われたのだと悟った。」

**3. この物語をどう聞くか**
・信仰の世界において、神秘的な体験あるいは超越的な出会いはある。パウロの回心は、ダマスコ途上での復活のイエスとの出会いから来たし、アウグスティヌスやルターも不思議な出会い体験をしている。しかし、今日の聖書個所で大事なことは、不思議な出来事があったということではなく、この出来事を通して、一行が力をいただき、山を降りてエルサレムに向かう力が与えられたとマタイが記していることだ。「御心であれば、理解できなくとも従って行く。その時に道が開けてくる。死ぬとはエクソダス、新しい旅立ちである」。そのことを弟子たちは示された。彼らは、理解はしていない。だからイエスの十字架死の時に彼らは逃げた。しかし、復活のイエスとの出会い体験を通して、彼らは変えられていく。
・人は宗教に現世利益か現世離脱のどちらかを求める。現世利益は「信仰すれば治ります」とか、「信仰すれば幸せになります」とか言う教えで、苦難の中にある人はわらをもつかむ思いですがる。しかし、信じても治らないし、苦しみは去らない。別の宗教は、この世を離れ、霊の世界との交流による救いを提唱する。聖書は「信じれば治る」とは言わないし、「この世を離れて修行しなさい」とも言わない。弟子たちに示されたのは、「イエスと共に行けば、あなたがたにも危険が及ぶだろうが、それでも行きなさい」ということだ。弟子たちには十字架の意味がまだわからないが、それでも彼らはイエスに従って、エルサレムに行く。
・現世利益も現世離脱も共に、苦しみからの解放を求める人間の作り出した幻想だ。幻想は破れる。そのよ

うな幻想に留まるのではなく、「現実を直視し、その現実から逃げるな」と聖書は教える。人は誰も十字架の道など歩きたくない。しかし、十字架を負って始めて知る人生の豊かさがある。河野進は、岡山ハンセン病療養所で50年間伝道した牧師だ。彼の書いた詩に「病まなければ」という詩がある。彼は50年間、ハンセン病の人に付き添い、その重い病の中に、神の祝福を見た。
ー河野進「「病まなければ捧げ得ない悔い改めの祈りがあり、病まなければ聞き得ない救いのみ言葉があり、病まなければ負い得ない恵みの十字架があり、病まなければ信じ得ない癒しの奇跡があり、病まなければ受け得ないいたわりの愛があり、病まなければ近づき得ない清い聖壇があり、病まなければ仰ぎ得ない輝く御顔がある。おお、病まなければ、人間でさえあり得なかった」」。
・私たちも重荷を負うことによって、人生が豊かにされていく。教会に来て、心が慰められ、清められたということだけに留まる人は、神に出会うことはないだろう。その清められた思い、強められた力を現実の生活の場で生かしていく時、神に出会う。日常の煩雑から逃れて山に登るとは、私たちにとっては、「主の日（日曜日）」に、世を離れて教会に来ることだ。教会に来て力をいただき、山を降りる＝日常の現実に戻る。それぞれの場所で神の御心を問いながら暮す。
・パウロは言う「兄弟たち、自分の体を神に喜ばれる聖なる生ける生贄として献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です」（ローマ12：1）。礼拝は日曜日に始まり、月曜日から土曜日までの私たちの世の生活を支える。山に登るのは、地上の生活を生きるための力をいただくためだ。そして山を降り、十字架を再び負って歩いていく。そういう生き方をマタイ17章は私たちに示している。

**36. マタイ17：14ー27、悪霊の子の癒しと二度目の受難予告**
**1. 悪霊に取りつかれた子を癒す**
・マタイはイエスの山上での変貌を記した後、てんかんの子の癒しを物語る。
ーマタイ17：14-16「一同が群衆のところに行くと、ある人がイエスに近寄りひざまずいて、言った。『主よ、息子を憐れんでください。てんかんでひどく苦しんでいます。度々火の中や、水の中に倒れるのです。お弟子たちのところに連れて来ましたが、治すことができませんでした。』」
・イエスは弟子たちの不信仰を嘆きながら、子供の病気を癒された。
ーマタイ17：17-18「イエスはお答えになった。『なんと信仰のないよこしまな時代なのか。いつまで、私はあなたがたと共にいられようか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならないのか。その子をここに、私のところに連れて来なさい。』そして、イエスがお叱りになると、悪霊は出て行き、そのとき子供は癒された」。
・古代では、病気は悪霊の仕業と考えられており、イエス自身もそうした考えを前提に癒しの業を行なわれた。この子供の病も、イエスの叱責により悪霊が退散し、癒された。弟子たちがイエスに問う「なぜ、私たちは悪霊を追い出せなかったのでしょうか」。それに対してイエスは「からし種一粒ほどの信仰があれば山も動く」と言われた。
ーマタイ17：19-20「弟子たちはひそかにイエスのところに来て、『なぜ、私たちは悪霊を追い出せなかったのでしょうか』と言った。イエスは言われた。『信仰が薄いからだ。はっきり言っておく。もし、からし種一粒ほどの信仰があれば、この山に向かって、「ここから、あそこに移れ」と命じても、そのとおりになる。あなたがたにできないことは何もない。』」
・記事のオリジナルであるマルコ福音書では、イエスが父親に子を連れて来なさいと命じられた時に、父親はイエスに言う「お出来になるなら、私どもをお助けください」。
ーマルコ9:20-22「人々は息子をイエスのところに連れて来た。霊は、イエスを見ると、すぐにその子を引きつけさせた。その子は地面に倒れ、転び回って泡を吹いた。イエスは父親に、『このようになったのは、いつごろからか』とお尋ねになった。父親は言った。『幼い時からです。霊は息子を殺そうとして、もう何度も火の中や水の中に投げ込みました。お出来になるなら、私どもを憐れんでお助けください。』」
・「お出来になるなら」、子供は幼い時からてんかんの発作に苦しんでおり、父親は子供の病気を救ってやりたいとして、多くの医者を尋ね歩いて来たが誰も治せなかった。今、一縷の望みを持ってイエスの弟子に依頼したが無駄であった。イエスでもだめだろう、父親はそう考えている。この父親は不信仰だが、当然の不信仰だ。父親はイエスが誰であるかをまだ知らない。父親に対してイエスは答えられる「『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる」。
ーマルコ9:23-24「イエスは言われた。「『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる。その子の父親はすぐに叫んだ。「信じます。信仰のない私をお助けください。』」

・イエスは父親の信仰告白を聞いて、子供を癒された。私たちはイエスが神の子であり、癒し主であることを信じるが、どこかに疑念を持つ。私たちの信仰は「不信仰の信仰」であることを知る必要がある。
ーE. シュバイツァー注解から「人はただ、自分の不信仰を知ることにおいてのみ、信仰という神の賜物を喜ぶことが出来る。自分の不信仰を認める、信仰のない私をお助けくださいという祈りこそ、私たちがなすべき祈りなのである」。

2. 二度目の受難予告
・イエスはフィリポ・カイザリアを旅した時、弟子たちに自らの受難を予告している（16：21）。その後イエスはエルサレムへの途上で二度目の受難予告をされる。メシアが受難するわけはないと考えていた弟子たちにとって、イエスの受難予告は理解の限界を越えていた。
ーマタイ 17：22ー23「一行がガリラヤに集まったとき、イエスは言われた。『人の子は人々の手に引き渡されようとしている。そして、殺されるが三日後に復活する。』弟子たちは非常に悲しんだ」。
・前回の告知ではペトロがイエスを諌めて叱責されたが、今回イエスから受難告知を受けた弟子たちは、「ただ悲しみに沈むだけであった」とマタイは記す。復活予告は後代の挿入であろう。「受難は受難のみでは終わらない」というのが、初代教会の経験した出来事であった。
ー使徒 2:23-24「このイエスを神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうえで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまったのです。しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです」。

3. 神殿税を納める
・マタイではその後に神殿税を納めるべきかどうかの物語が記される。マタイ独自の記事である。エルサレム神殿を維持管理するために、ユダヤの成人男子は毎年半シュケル（ヘブライ貨幣）の神殿税を支払う義務を有していた（出エジプト記 30：13）。
ーマタイ 17：24「一行がカファルナウムに来たとき、神殿税を集める者たちがペトロのところに来て、『あなたたちの先生は神殿税を納めないのか』と言った」。
・納税額は一人銀半シェケル、2 ドラクメ（デナリ）に当たり、当時の労働者二日分の賃金に相当した。徴収人の督促に対し弟子のペトロは「納めます」と即答するが、イエスは神殿のありかたに批判的であり、納める必要はないと思っておられた。
ーマタイ 17:25-26「ペトロは『納めます』と言った。そして家に入ると、イエスの方から言いだされた『シモン、あなたはどう思うか。地上の王は、税や貢ぎ物をだれから取り立てるのか。自分の子供たちからか、それともほかの人々からか』。ペトロが『ほかの人々からです』と答えると、イエスは言われた『では、子供たちは納めなくてよいわけだ』」。
・しかし、イエスは、「人々をつまずかせないため税を納めよ」と言われる。その納め方はペテロが釣りに行って魚を釣れば、その魚の口から必要なお金が得られるというものだった。「銀貨」の原語はスターテルであり、4 ドラクメの価値がある。つまり、イエスとペテロの二人分の神殿税である。ここで言われているのは奇跡ではない。ペテロは漁師であり、魚を釣り、それを売って、収入を得、そのお金で神殿税を払う。そのことが象徴的に物語されたのがこの話であろう。
ーマタイ 17：27「湖に行って釣りをしなさい。最初に釣れた魚を取って口を開けると、銀貨が一枚見つかるはずだ。それを取って、私とあなたの分として納めなさい」
・イエスはエレサレム神殿に象徴される祭儀宗教に否定的で、神殿の崩壊さえも預言された（24：2）。それでもイエスは神殿税を納めよと言われた。これは当時のマタイの教会にとっては大きな示唆を与えた。マタイ福音書が書かれた紀元 80 年代、ユダヤ戦争の結果、神殿は破壊されており、神殿税はない。しかし当時のローマ皇帝は廃止された神殿税と同額のユダヤ税を帝国内のすべてのユダヤ人に納めるように布告しており、その税はローマにあるユピテル神殿に納税された。教会にとってこれは厄介な問題だった。異教のローマ神殿に何故納税しなければいけないのか、それは偶像礼拝ではないのかという議論が教会内に起こった。マタイはイエスの事例を参考に、私たちも「人々をつまずかせないために」、ユダヤ税を払っていこうとして、記事をここに挿入したと思われる。基本にあるのは「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」（マタイ 22：21）と言われたイエスの言葉である。
・信仰の本質に関わる出来事（神のもの）と本質ではない出来事（皇帝のもの）を区別し、本質でない出来

事については世に従いなさいとイエスは言われた。パウロもこれを受けて「貢を納めるべき人には貢を納め、税を納めるべき人には税を納めなさい」と教える。良き市民であることはキリスト者の基本である。
ーローマ 13：1ー7「人は皆、上に立つ権威に従うべきだす。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたからです・・・すべての人々に自分の義務を果たしなさい。貢を納めるべき人には貢を納め、税を納めるべき人には税を納め、恐るべき人は恐れ、敬うべき人は敬いなさい」。
・牧師の中には、町内会費のなかに地域の神社への維持献金が含まれているから町内会費は納めないと公言する人がいるが、聖書的ではない。また自分はキリスト者であるから、仏式の葬儀には参列しないし、焼香したりしないという人もいるが、それも柔軟性に欠ける信仰だと思える。私たちには、柔軟な、しなやかな信仰が必要だ。イエスはペテロに「湖で漁をすれば魚が取れ、その魚の口にはスタテラ銀貨が入っているからそれで税を納めなさい」と言われた。この個所を読んで、神は奇跡を起こされるからそれを待つというのは愚かであり、そんなことがあるわけはないと切り捨てるのは不信仰だ。そうではなく、私たちは、イエスから、「二日働けば神殿税を納めるお金を得ることができるとすれば、あなたの本来の職業である漁師として働き、魚を収穫し、それを売って必要なお金を獲得しなさい」と命じられている。足らなければ、働いて獲得すればよい。

**37. マタイ 18：1-20、天の国で一番偉い者は誰か**
**1. 天の国で一番偉い者**
・エルサレムへの道中で、弟子たちが「天の国で一番偉いのは誰か」とイエスに聞いてきた。
ーマタイ 18：1「そのとき、弟子たちがイエスのところに来て、『いったい誰が、天の国で偉いのでしょうか』と言った」。
・マタイが引用したオリジナル版マルコでは弟子たちは自分たちの序列を巡って争っていたとある。
ーマルコ 9:33-34「一行はカファルナウムに来た。家に着いてから、イエスは弟子たちに、『途中で何を議論していたのか』とお尋ねになった。彼らは黙っていた。途中で誰がいちばん偉いかと議論し合っていたからである」。
・弟子たちの関心は集団内の序列である。現代人も組織内での位置や昇進が一番の関心事だ。その弟子たちに、イエスは一人の子どもを示して、「子どものように自分を低くしなければ天の国に入ることはできない」と答えられた。仲間内で順位を争うような狭い心では、天の国へ入る資格すらない。偉さを競い、人の上に立ちたいという願望は、天の国に入るにはふさわしくない。
ーマタイ 18：2ー5「そこで、イエスは一人の子どもを呼び寄せ、彼らの中に立たせて言われた。『はっきり言っておく。心を入れ替えて子どものようにならなければ、決して天の国に入ることはできない。自分を低くして、この子どものようになることが、天の国でいちばん偉いのだ。私の名のためにこのような一人の子どもを受け入れる者は、私を受け入れるのである。』」
・イエスの答えに弟子たちがどんな反応をしたか、マタイは何も記していない。部下の功名心を掻き立て、競わせるのが世の指導者であるが、イエスは反対のことを教えられた。幼児は母の腕の中で何の疑いもなく眠り、腹が空けば目を覚まし、むずかる。世の欲得に何の関わりなく、ありのままに生きる。無邪気な幼児の姿に、人はふと天国を感じる。イエスは、幼子を受け入れることは私を受け入れることであると繰り返し言われる。
ーマタイ 25：40「はっきり言っておく。私の兄弟であるこの小さい者の一人にしたのは、私にしてくれたことなのである。」
・アードルフ・ポルトマンは、「人間はどこまで動物か」という本の中で語る。「人間は、両親や兄弟や周りの人々の『愛と受容』がなければ生きていけない」。それを知ることは集団内の序列を争うことより大事なことではないかとイエスは語られている。
ーアードルフ・ポルトマン：人間はどこまで動物か「人間の子どもは母親や養護者の助けなしには一日も生きていけない能なしである。高等哺乳類、例えば山羊や馬の仔は、生まれるや否や立ち上がって仲間の後を追いかける。眼も見えるし、母乳も自力で吸う。身体も成熟した大人の形に近い。だが、人間の赤ん坊は、あらゆる哺乳類の中で最も弱い状態で生まれて来る。歩くことはおろか、自力で食べることも覚束ないし、目も見えない。泣く以外には何もできず、一切を母親や養護者に依存している。愛され、受け入れられるということがなければ、一日も生きて行けない。このように、あるがままに受け入れてくれる周りの人々の『愛と受容』のお蔭で、生きることができる。だから、『愛と受容』は命の基本構造なのである」（アードルフ・ポルトマン「人間はどこまで動物か」（1961 年、岩波新書、代々木上原教会 2005・12・11 説教から）。

・イエスが語られたのも、「愛と受容に生きよ」ということであった。
ールカ 22:24-26「使徒たちの間に、自分たちのうちでだれがいちばん偉いだろうか、という議論も起こった。そこで、イエスは言われた。『異邦人の間では、王が民を支配し、民の上に権力を振るう者が守護者と呼ばれている。しかし、あなたがたはそれではいけない。あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者のようになり、上に立つ人は、仕える者のようになりなさい』」。

2. 罪への誘惑
・6 節以下では、「小さい者をつまずかせる」ことへの警告が語られる。ここでいう小さい者は子どもではなく、教会の中の信仰の未熟な者を指している。マタイはつまずかせる者の罪の大きさを「大きな石臼を首にかけられ、深い海に沈められる方がましである」と強調する。大きな石臼を首にかけられ、深い海に沈められたら、生きて再び太陽を見ることはかなわない。小さい者の信仰を失わせ、離れさせる者は、それほど罪が重いという、教会の中でおごり高ぶる人々への警告の言葉である。
ーマタイ 18：6「私を信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者は、大きな石臼を首に懸けられて、深い海に沈められる方がましである」。
・人をつまずかせる者は厳しい決断を迫られる。片方の手や足がつまずかせるなら、その手足を切り捨てよ。片方の目がつまずかせるならその目をえぐり出して捨てよ。両手両足両目がそろったまま、永遠の火が燃える地獄に投げこまれるよりましだからとイエスは言われる。厳しい言葉だ。
ーマタイ 18：7ー9「世は人をつまずかせるから不幸で、つまずきは避けられない。だが、つまずきをもたらす者は不幸である。もし片方の手か足があなたをつまずかせるなら、それを切って捨ててしまいなさい。両手両足がそろったまま永遠の火に投げ込まれるよりは、片手片足になっても命にあずかる方がよい。もし片方の目があなたをつまずかせるなら、えぐり出して捨ててしまいなさい。両方の目がそろったまま火の地獄に投げこまれるよりは、一つの目になっても命にあずかる方がよい。」

3. 「迷い出た羊」のたとえ
・迷い出た羊の譬えはルカにもあるが（15：3-7）、マタイでは「小さな者を一人でも軽んじないように気をつけなさい」という文脈の中で語られる。マタイは信仰共同体における牧会配慮の教えの中で語る。
ーマタイ 18:10「これらの小さな者を一人でも軽んじないように気をつけなさい。言っておくが、彼らの天使たちは天でいつも私の天の父の御顔を仰いでいるのである」。
・旧約では、羊飼いは神で、羊は民である。羊は迷いやすい弱い動物だ。捕囚期の預言では離散したイスラエルの民を神自ら尋ね歩いて群れを回復する様子が、迷った羊を尋ね歩く羊飼いの姿に重ね合わされている。
ーエレミヤ 23：3ー4「この私が、群れの残った羊を、追いやったあらゆる国々から集め、もとの牧場に帰らせる。群れは子を産み、数を増やす。彼らを牧する牧者を私は立てる。群れはもはや恐れることも、おびえることもなく、また迷い出ることもないと主は言われる」。
・マタイの物語では、羊の持ち主は、一匹の羊が迷うと九十九匹を山に残して捜しに行く。山は聖書では聖なる場所で、九十九匹の安全を確保した上で、迷い出た一匹が捜し出される。この譬えが語るのは、教会にとって信仰の弱い人たちをどのように牧会していくのかである。
ーマタイ 18：11ー14「あなたがたはどう思うか。ある人が羊を百匹持っていて、その一匹が迷い出たとすれば、九十九匹を山に残しておいて、迷い出た一匹を捜しに行かないだろうか。はっきり言っておくが、もし、それを見つけたら、迷わずにいた九十九匹より、その一匹のことを喜ぶだろう。そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたの天の父の御心ではない。」
・マタイでは弱い人が「迷い出た羊」として描かれ、連れ戻された羊が悔い改めないならば、その羊は放出される。マタイの視点はあくまでも教会論にある。
ーマタイ 18:15-17「兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところで忠告しなさい。言うことを聞き入れたら、兄弟を得たことになる。聞き入れなければ、ほかに一人か二人、一緒に連れて行きなさい。すべてのことが、二人または三人の証人の口によって確定されるようになるためである。それでも聞き入れなければ、教会に申し出なさい。教会の言うことも聞き入れないなら、その人を異邦人か徴税人と同様に見なしなさい」。
・一方ルカでは異なる場面設定で語られる。ルカにとって九十九匹はファリサイ人を指し、一匹は排斥された貧しい人々を意味する。ルカの文脈では九十九匹よりも一匹の方が大切にされる。
ールカ 15:1-7「徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々

や律法学者たちは、『この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている』と不平を言いだした。そこで、イエスは次のたとえを話された『あなた方の中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでくださいと言うであろう。言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある』」

・マタイは「迷い出た羊の譬え」の中で、教会の人々に信仰の弱い人を保護するようにとイエスの言葉を語り直している。他方、ルカは「見失った羊の喩え」で、見失った羊をどこまでも追い求める教会の在り方として譬えを解釈する。どちらが良いか悪いかではなく、共に大切な、しかし異なる視点を私たちに伝える。

**38. マタイ 18：21－35、仲間を赦さない家来の譬え**

**1. 「仲間を赦さない家来」の譬え**

・ペトロがイエスに、「私の兄弟が罪を犯した場合、何度赦すべきでしょうか。七度までですか」と問うた。前後の文脈から、私の兄弟（教会員）への罪の赦しの可否が問われている。当時のラビは「赦しは三度まで」としていたので、七度はかなりの寛容である。イエスは「七の七十倍」という無限の赦しを説かれた。教会はこれを牧会の問題（教会員が罪を犯した場合、何度赦すべきか）として聞いた。

ーマタイ 18：21－22「『どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心を一つにして求めるなら、私の天の父はそれをかなえてくださる。二人または三人が私の名によって集まるところには、私もその中にいるのである。』そのときペトロがイエスのところに来て言った。『主よ、兄弟が私に対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか』。イエスは言われた。『あなたに言っておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい』」。

・その後にイエスは、赦しとは何かをわからせるために、「仲間を赦さない家来」の譬えを話された。譬えでは、王が家来に一万タラントンの返済を求めた所から話が始まる。一万タラントンは 6 千万デナリオン、今日の通貨基準では数千億円に相当する。当時のユダヤ領主でさえ六百タラントンの税収しかなかったと言われているから、一万タラントンの負債は譬え話の中でしかありえない、無限の負債を意味する。その無限の負債を王は免除した。

ーマタイ 18：23－27「そこで、天の国は次のようにたとえられる。ある王が、家来たちに貸した金の決済をしようとした。決済し始めたところ、一万タラントン借金している家来が、王の前に連れて来られた。しかし、返済できなかったので、主君はこの家来に、自分も妻も子も、また持ち物も全部売って返済するよう命じた。家来はひれ伏し、『どうか待ってください。きっと全部返済します』としきりに願った。その家来の主君は憐れに思って、彼を赦し、彼の借金を帳消しにしてやった』」。

・イエスはここで神の無限な赦しを語られた。私たちは、罪あるままに（負債を支払うことなしに）、イエスの贖罪の死により命を救われた。贖いにより、大きな罪（一万タラントンの負債）は免除された。「そのことを覚えよ」とイエスはここで語られる。

ーコロサイ 2:13-14「肉に割礼を受けず、罪の中にいて死んでいたあなたがたを、神はキリストと共に生かしてくださったのです。神は、私たちの一切の罪を赦し、規則によって私たちを訴えて不利に陥れていた証書を破棄し、これを十字架に釘付けにして取り除いてくださいました」。

**2. 人を赦さない者は赦されない**

・物語は続く。第二の場面では、一万タラントンという巨額の負債を帳消しにしてもらった家来が、立場が逆になり自分が債権者になると、わずか百デナリオンの負債も赦さなかったという話である。百デナリオンは労働者の三か月分の月収、今日でいえば百万円前後、返せない金額ではない。それなのに家来は負債者がひれ伏して、赦しを乞うても赦さず、首を絞め、牢にぶちこんでしまった。

ーマタイ 18：28－30「ところがこの家来は外に出て、自分に百デナリオンの借金をしている仲間に出会うと、捕まえて首を絞め、『借金を返せ』と言った。仲間はひれ伏して『どうか待ってくれ、返すかから』としきりに頼んだ。しかし、承知せず、その仲間を引っぱって行き、借金を返すまでと牢に入れた」。

・負債者の仲間はこれを見て心を痛め、王に訴え出る。王は激怒し、この不埒な家来を捕え、一万タラントンを返済するまでは赦さないと彼を牢に入れた。贖いきれない大きな負債を神の憐れみで赦されたことを忘れ、兄弟の小さな負債を赦さない忘恩の行為がどれほど罪深いかを、この譬えは教えている。

ーマタイ 18：31－34「仲間たちは事の次第を見て非情に心を痛め、主君の前に出て事件を残らず告げた。そ

こで、その主君はその家来を呼びつけて言った。『不届きな家来だ。お前が頼んだから、借金を全部帳消しにしてやったのだ。私がお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったのか。』そして、主君は怒って、借金をすっかり返済するまでと、家来を牢役人に引き渡した」。
・ここでは神に対する無限の負債を持つ人間が、人間同士の相対的な負債さえも赦さない冷酷さが示されている。
ーマタイ 18：35「あなた方の一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、私の天の父もあなたがたに同じようになさるだろう」。
・私たちに人を裁く権利などない。何故ならば私たちも罪人であったからだ。何故「死に値する罪＝負債から赦されていることを感謝して生きないのか」とパウロは語る。
―第一コリント 6:6-7「兄弟が兄弟を訴え、しかもそれを不信者の前に持ち出すのか。そもそも、互に訴え合うこと自体が、すでにあなたがたの敗北なのだ。何故むしろ不義を受けないのか。何故むしろだまされていないのか。」
・イエスは繰り返し、赦しこそが大事だと語る「私たちが人を赦さないなら、私たちの赦しはない」。
ーマタイ 6:14-15「もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたの過ちをお赦しになる。しかし、もし人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しにならない。」
・だから主の祈りでは、私たちに他者の赦しを可能とするように祈ることを求められている。
ーマタイ 6:12「私たちの負い目を赦してください、私たちも自分に負い目のある人を赦しましたように」。
・横浜指路教会・長尾ハンナ氏は「この物語は私たちの物語だ」と語る。
ー2012 年 8 月 26 日説教から「この譬え話、仲間を赦さない家来の姿は、人間の身勝手さ、自分が人に与えている損害や迷惑はすぐに忘れてしまって、人が自分に与えている損害や迷惑ばかりに目が行ってしまうというという様子をよく現しています。また、与えられている恵みをすぐに忘れて自分勝手に生きてしまう人間の姿を描いているとも言えます。そういう意味でこの家来の姿は、私たち自身と重なるのです」。

**3. この物語をどう聞くか**
・創世記 4 章でカインは弟アベルを殺し、神の前に告発される。カインは自分も殺されるかもしれないという恐怖を通して、アベルの苦しみを知り、神に助けを懇願する。神はカインのような殺人者の叫びさえ聞かれ、彼の保護のためにしるしをつけられた。
ー創世記 4:15「主はカインに言われた『いや、それゆえカインを殺す者は、だれであれ七倍の復讐を受けるであろう』。主はカインに出会う者がだれも彼を撃つことのないように、カインにしるしを付けられた」。
・カインは妻を娶り、カインの子孫からレメクが生まれる。彼は語る「カインのための復讐が七倍なら、レメクのためには七十七倍」。神の赦しを知らない者は、孤独と不安から自己の力に頼り、その結果、他者に対して敵対する。神の赦しを知らない現代も、相手を赦さない人間中心主義が継続されている。
ー創世記 4:23-24「レメクは妻に言った『・・・妻たちよ、わが言葉に耳を傾けよ。私は傷の報いに男を殺し、打ち傷の報いに若者を殺す。カインのための復讐が七倍なら、レメクのためには七十七倍』」。
・他方、神はアダムとエバに新しい子を与えられる。セトであり、彼の子孫たちは主の御名を呼び始める。ここに、「七十七倍の復讐をやめ、七の七十倍の赦しを」求める人々の系図が生れていく。赦されたから赦していく、神中心主義の流れだ。人間の歴史はこのカインの系図とセトの系図の二つの流れの中で形成されてきた。キリスト者は自分たちがセトの子孫であることを自覚する。
・「打たれたら打ち返す」社会の中で、私たちは「七の七十倍の赦し」を求めていく。それはイエスの十字架を見つめた時にのみ可能になる。カインさえも赦しの中にあり、殺されたアベルもセトという形で新たに生かされたことを知る時、私たちも赦しの中にある事を知る。十字架を仰ぐ時、私たちは「主の名を呼び求める者」に変えられていき、与えられる不利益や苦しみをも喜ぶ者となる。肉による力は復讐を通して自己を顕示するが、イエスは赦しこそが力であることを示された。
ーローマ 12：19「愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。『復讐は私のすること、私が報復する』と主は言われると書いてあります」。
・赦しのない戦場で人間はどのように苦闘するのかを描いた映画とドキュメンタリーがある。映画「勇士たちの戦場」（2006 年）は、イラク戦争から帰還したアメリカ兵たちの PTSD に苦悩する姿を描いた戦争ドラマである。イラク戦争の最前線で、軍医のウィルとトミー、ジョーダン、ジャマール、ヴァネッサたちは、帰郷を目前に控えていた時、最後の任務で武装勢力の急襲を受け、トミーの目の前でジョーダンは戦死、ジャマールは民間人の女性を誤射してしまい、ヴァネッサは右手を失う。故郷へ戻った彼らは、PTSD（心的外傷

後ストレス障害）に悩まされる日々を送り始める。まさにイエスが言われたように、「剣を取る者は皆、剣で滅びる」（マタイ 26：52）。
・「帰還兵はなぜ自殺するのか」（2015 年）も同じテーマを扱う。本書に登場するのは、5 人の兵士とその家族。そのうち一人はすでに戦死し、生き残った者たちは重い精神的ストレスを負っている。妻たちは「戦争に行く前はいい人だったのに、帰還後は別人になっていた」と語り、苦悩する。戦争で何があったのか、何がそうさせたのか。内田樹は語る「戦争は時に兵士を高揚させ、時に兵士たちを奈落に突き落とす。若い兵士たちは心身に負った外傷をかかえて長い余生を過ごすことを強いられる。その細部について私たち日本人は何も知らない。何も知らないまま戦争を始めようとしている人たちがいる。」

**39. マタイ 19：1-12、結婚と離婚の意味**

**1. 離縁についてのイエスの教え**

・イエスはヨルダン川対岸のユダヤ地方に行かれた。イエスの教えと癒しを求める人々が大勢に付き従った。イエスは行く先々で病人を癒された。イエスに付き従う群れの中に、イエスを監視するファリサイ派の人々がいた。彼らはイエスに罠を仕掛けるために離縁問題を持ちだした。
ーマタイ 19：3「ファリサイ派の人々が近寄り、イエスを試そうとして、『何か理由があれば、夫が妻を離縁することは、律法に適っているでしょうか』と言った」。
・律法の立場からは離縁が許されていた。当然にそれを知っているファリサイ人が質問をしたのは、イエスが姦淫に対して厳しい態度を取っておられることを聞き知って、イエスから「離縁は許されない」という言葉を引き出し、イエスが律法の教えに従っていないことを明らかにするためだった。
ー申命記 24：1「人が妻をめとり。その夫となってから、何か恥ずべきことを見出し、気にいらなくなったときは、離縁状を書いて彼女の手に渡し、家を去らせる」。
・「妻に恥ずべきことを見いだし」という離婚理由について、ラビたちの間で論争があり、「姦通等の不品行だけに限るべきだ」と厳格に解釈するシャンマイ派と、「食物を焦がす」ことまで含めて広く解釈するヒレル派が対立していた。支持が集まっていたヒレル派の考えでは、夫が妻を嫌になればいつでも離縁することが出来た。それに対して、イエスは一切の離婚を禁じる原則論を展開された。
ーマタイ 19:4-6「イエスはお答えになった。『あなたたちは読んだことがないのか。創造主は初めから人を男と女とにお造りになった』。そして、こうも言われた『それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから、二人はもはや別々ではなく、一体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない』」。
・神は人を男と女に造られ、男女の交わりを通して命が継承されていくようにされた。「人が一人でいるのは良くない」から、「彼に合う、助ける者を造ろう」と神は言われた（創世記 2：18）。その神の御心をあなた方はないがしろにして、「妻が年老いたので若い妻を娶りたい」とか、「他の女性の方が好ましくなったので離縁したい」とかいう人間の掟を作り上げている。それが神の御心ではないことは明らかだ。神が望んでおられることは、「二人が一体となって生きる」こと、「神の前に対等で平等な存在として生きる」ことだ。だから「神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない」。
・留意すべきは、イエスがここで「離婚の絶対禁止」を言われているのではなく、「男の身勝手な行為によって経済的、社会的困窮に妻を追いやるような離婚は許されない」ことを示されたことだ。当時の女性は経済的には夫に頼って生きていたから、実際に夫に追い出され、路頭に迷う多くの妻たちをイエスは目にされ、「そのような勝手を神は許されない」とされた。

**2. 男性優位だったユダヤ人の結婚**

・ファリサイ派の人々は、反問する「では、なぜモーセは離縁状を渡して離縁するよう命じたのか」。
ーマタイ 19:7-8「すると、彼らはイエスに言った『では、なぜモーセは、離縁状を渡して離縁するように命じたのですか』。イエスは言われた『あなたたちの心が頑固なので、モーセは妻を離縁することを許したのであって、初めからそうだったわけではない』」。
・モーセは不当な離婚から女性を守るため、離縁状で離婚の理由を明白に示すことを男性に求めた。そして、イエスは離婚を禁じる厳しい言葉を付け加えられた。
ーマタイ 19:9「言っておくが、不法な結婚でもないのに妻を離縁して、他の女を妻にする者は、姦通の罪を犯すことになる」。
・当時のユダヤ人の結婚の現実は、結婚の理想を裏切っていた。当時は親か仲介人により、男性の社会的地

位や財力により結婚相手が選ばれていた。その結果、女性の意志は無視され、女性は親か夫の所有物のように扱われることになり、本人同志の愛情で結ばれるなど考慮されなかった。女性が一度も会ったことのない男性と婚約させられることも珍しくはなかった。さらに離婚の主導権は夫側にあり、女性は自ら離婚を申し出ることはできなかった。

**3. 弟子たちが抱いた結婚への疑問**

・イエスの教えは弟子たちに、「離婚がそんなに難しいものなら、もう結婚したくない」と言わせるほど厳しいものだった。イエスはモーセが許容した離婚条件まで否定された。しかし、イエスは結婚そのものを否定されたのではない。祝福されている結婚を人が歪めてしまうことを批判された。そしてイエスは「結婚しない」という選択肢もありうることを示された。

ーマタイ 19：10－12「弟子たちは、『夫婦の間柄がそんなものなら、妻を迎えない方がましです』と言った。イエスは言われた『だれもがこの言葉を受け入れるのではなく、恵まれた者だけである。結婚できないように生まれついた者から結婚できないようにされた者もいるが、天の国のために結婚しない者もいる。これを受け入れることのできる人は受け入れなさい』」。

・ここで注目すべきことは、イエスは倫理を説かれたのではなく、福音を説かれたということだ。福音書は「小さき者をつまずかせるな」、「小さき者を大事にせよ」とイエスが言われたことを記録する（マタイ 18 章他）。その文脈の中で、小さき者をつまずかせるような、身勝手な離婚をイエスは禁止された。イエスの時代は男性優位社会であり、妻は夫と離れては生活していくことが出来なかった。だから離縁にしても妻の側からの申し出はありえず、離縁といえば「夫が妻を追い出す」ことだった。その文脈の中で語られた「神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない」を、状況のまるで異なる現代に適用して離婚を禁止するのは、「神の御心をないがしろにする」行為になりかねない。

・カトリック教会はイエスの教えを倫理として受取り、離婚を禁止するが、このことによって多くの弊害が生じている。ヨーロッパのカトリック国、フランスやイタリアで結婚しない人たちが増えている。若者たちは言う「一度結婚したら離婚できないのであれば、結婚しないほうが良い」。その結果増えているのが同棲だ。同棲と結婚と何が異なるのか、結婚届という一枚の紙を行政当局に出すか出さないかの違いだが、この「紙一枚」が人の生き方を大きく変える。人間が単に、肉体的、生物学的な存在であれば、結婚も同棲も同じだ。しかし人間は霊的な存在でもあり、「健やかな時も病める時も愛し続け、決して裏切りません」と紙一枚であれ誓うのは、人間が人間であるからだ。離婚の自由がないところでは、本当の結婚の意味も失われていく。不倫を英語では「unfaithful」という。それは「誓いに対して誠実ではない」行為なのだ。

・パウロはイエスの教えを受けて、結婚に関する教えを信徒に説いた。

ー第一コリント 7:8-15「未婚者とやもめに言いますが、皆私のように独りでいるのがよいでしょう。しかし、自分を抑制できなければ結婚しなさい。情欲に身を焦がすよりは、結婚した方がましだからです。更に、既婚者に命じます。妻は夫と別れてはいけない。こう命じるのは、私ではなく、主です。既に別れてしまったのなら、再婚せずにいるか、夫のもとに帰りなさい。また、夫は妻を離縁してはいけない。その他の人たちに対しては、主ではなく私が言うのですが、ある信者に信者でない妻がいて、その妻が一緒に生活を続けたいと思っている場合、彼女を離縁してはいけない・・・しかし、信者でない相手が離れていくなら、去るにまかせなさい・・・平和な生活を送るようにと、神はあなたがたを召されたのです」。

**4. 離婚は許されているのか**

・聖書は離婚を禁止しない。しかしそれは離婚を奨励しているのではなく、人間が人間らしく生きるためには、場合によっては離婚も選択できるということである。離婚の自由を最初に唱えたプロテスタント信仰者は、イギリスの詩人ジョン・ミルトンである。ミルトンは「失楽園」を書いたが、ピューリタンの信仰を持ち、信教の自由、言論の自由と共に離婚の自由を唱えた。彼はイエスの言われた言葉を真剣に考えた。イエスは、結婚とは「夫婦が神によって霊的にも身体的にも一心同体となる結びつき」だと言われた。ミルトンも夫と妻との内面的、霊的な結びつきを追求することこそが、神から与えられた結婚の目的であると考えた。その結果、そのような結婚愛が全く失われている場合には、それは神からの結婚とは言えないがゆえに離婚が認められるべきであるという結論に至った。

・ミルトンは、結婚・離婚問題を軽く考えていたのではなく、逆に、結婚を普通以上に重視し、真剣に考えた結果、離婚は許されるべきだとした。ミルトンのこのような結婚・離婚観は、夫と妻との関係において、もう一つの重要な側面を明らかにした。それは、結婚愛は夫と妻との内面的、霊的な結びつきであるという

解釈によって、夫と妻とが神の前に完全に対等で平等なものとなったことである。結婚の基本は夫婦の愛情にあり、それこそが「人を男と女に造られた」神の御心に沿うものだというのが、福音的な結婚理解なのである。

**40. マタイ 19：13－30、子供への祝福と金持ちの青年**

**1. 子供を祝福する**

・ユダヤ人にとって、ラビに手を置いてわが子を祝福してもらうことは、無上の幸いであった。子供たちにイエスの祝福を受けさせたいと願う親たちと、彼らをイエスに近付けまいと叱る弟子たちで、イエスの周りが騒がしくなった。

ーマタイ 19：13「その時、イエスに手を置いて祈っていただくために、人々が子供を連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った」。

・子連れの人々を弟子たちはたしなめた「先生は大事な話をしておられる子供が騒げばうるさくて先生の話が聞こえないではないか」。親たちはたじろぐ。同じような出来事は現代の教会でも起きている。牧師が説教をしている、小さい子供たちが教会堂の中を走り回って騒いでいる。うるさくて話が聞こえない、静かにさせてくれないか、会衆は母親をにらみ、にらまれた母親は小さくなり、来週は教会に来るのを止めようと思う。

・イエスが弟子たちを制して、「子供たちを来させなさい」と命じ、騒ぎは収まった。子供を排除するのではなく、うるさくても良いから子供たちであふれている集会を造りなさいと語られている。現代の教会では高齢化の中で、子供たちの姿が会堂から消えている。次世代を担う子供たちがいないことが教会の大きな課題だ。

ーマタイ 19：14－15「しかし、イエスは言われた『子供たちを来させなさい。私のところに来るのを妨げてはならない。天の国はこのような者たちのものである』。そして、子供たちに手を置いてから、そこを立ち去られた」。

・幼な子は自分一人では生きていくことが出来ない無力の存在だ。しかし同時に、彼らは「親は自分を愛し、守ってくれるはずだ」と無条件に信じている。ここに幼な子の強さがある。同じように神への無条件の信仰、信頼こそが神の国の扉を開くのだとイエスは言われる。「幼な子のようになる」とは、自分の弱さを認め、助けなしには生きていけないことを認めることだ。

**2. 金持ちの青年**

・金持ちの青年がイエスに教えを乞うために来た。彼はたくさんの財産を持ち、地位も高かった。この世で生きるには十分なものを持っていた。しかし何かが欠けている、死んだ後どうなるのかについて確信が持てない。だから「永遠の命を受け継ぐには何をすればよいでしょうか」と聞いてきた。

ーマタイ 19:16「さて、一人の男がイエスに近寄って来て言った『先生、永遠の命を得るには、どんな善いことをすればよいのでしょうか』」。

・イエスは彼の問題を一目で見抜かれた。彼は善いことをすれば救われると考えているが、善い方である神を求めていない。「神お一人のほかに善い方、救いを与える方はだれもいない」のに、救いを自分の手で勝ち取ろうとしている。イエスは青年に、「善いことはすでに律法の中で明らかにされているのに、なぜ私に聞くのか」と答え、「律法を守りなさい」と付け加えた。

ーマタイ 19:17「イエスは言われた『なぜ、善いことについて、私に尋ねるのか。善い方はお一人である。もし命を得たいのなら、掟を守りなさい』」。

・イエスは彼を試すために言われる「戒めを守れば救われると考えるのであれば、守ったらどうか」。

ーマタイ 19:18-19「男が『どの掟ですか』と尋ねると、イエスは言われた『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、父母を敬え、また、隣人を自分のように愛しなさい』」。

・イエスが教え終わると、青年は「そのようなことは、みな守ってきました」と答えた。

ーマタイ 19:20「青年は言った『そういうことはみな守ってきました。まだ何か欠けているでしょうか』」。

・彼には救いの実感がない。だからイエスのもとに来た。イエスは彼に驚くべきことを言われる「行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。それから、私に従いなさい」

ーマタイ 19：21－22「イエスは言われた『もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に冨を積むことになる。それから、私に従いなさい』。青年はこの言葉を聞き、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである」。

・ここでイエスは五つの指示を出しておられる。「行きなさい」、「売り払いなさい」、「施しなさい」、「来なさい」、「従いなさい」。イエスの言葉で彼の問題点が浮き彫りになる。彼は自分の救いのために一生懸命に努力してきたが、その中に「他者」という視点が欠けていた。「殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え」、すべては「自分を愛するように隣人を愛しなさい」という他者のための戒めなのに、彼は自分の救い、満たしのことだけを考えていた、だから彼に信仰の喜びはなかった。それを知るために、「今持っている全てを捨てなさい」と命じられた。しかし彼はあまりにも多くを所有していたので、イエスの言葉に従えなかった。

**3. 救いとは何か**

・立ち去る若者を見て、イエスは言われる「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか」。弟子たちは驚いた。当時のユダヤ人は豊かになり、安定した生活ができることを神からの祝福だと信じていたからだ。しかし、イエスは金持ちが天の国に入るのは、らくだが針の穴を通るより難しいと言われた。「それでは誰も救われない」、弟子たちは驚いた。イエスは弟子たちを見つめて、「人にはできないことも神ならできる」と語られた。

ーマタイ 19：23－26「イエスは言われた『はっきり言っておく。金持ちが天の国に入るのは難しい。重ねて言うが、金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだやさしい』。弟子たちはこれを聞いて非常に驚き『それでは、だれが救われるだろうか』と言った。イエスは彼らを見つめて『それは人間にできることではないが、神は何でもできる』と言われた」。

・青年は財産があるから救われないのではなく、自分の力で救いを買えると思ったから、神の国から閉めだされた。仮にこの青年が「全てを捨てることは出来ません。でもあなたに従いたいのです」と訴えたら、イエスはそれを喜んで受け入れられたであろう。「人間に出来ることではないが神には出来る」、金持ちの青年はお金や才能があったばかりに自分の力に頼り、「人には出来ない」という場所で引き返してしまった。もし彼が、「神には出来る」という信仰でイエスの下に留まれば、神の国を見ることは出来たであろう。

・初代教会を継承したカトリック教会は、この教えを限定的に受け止め、聖職者には「清貧の誓い=全てを捨てる誓い」をさせるが、一般の人には強制しなかった。他方、カトリック教会の改革者として生まれたプロテスタント教会は、この教えを象徴として受け取った。富そのものは神の祝福であり、感謝していただけばよい。しかし、富を愛し、富に頼ることは禁じた。メソジスト教会の創始者であるジョン・ウェスレーは語った「正直に稼ぎ、できるだけ節約し、必要以外のものは他に与えよ」。

・ペテロは言う「私たちは何もかも捨ててあなたに従って参りました。では、私たちは何をいただけるのでしょうか」。

ーマタイ 19:27「すると、ペトロがイエスに言った『このとおり、私たちは何もかも捨ててあなたに従って参りました。では、私たちは何をいただけるのでしょうか』」。

・ペテロは何も捨てていない、イエスから良き物がいただけると思うから、職業を捨ててイエスに従っているだけのことで、イエスの十字架刑後には故郷のガリラヤに戻って漁師の職に戻っている。いつでも戻ることのできる余地を残しながら従っていた。人は全てを捨てて従うことは出来ない。ペテロと富める青年と本質は何も変わらないことを留意すべきだ。

・しかし、イエスはそのようなペテロをとがめない。イエスは「自らが栄光の座につく時、十二弟子もイスラエルの十二部族を治める」と預言する。マタイのみの記述でルカやマルコにはない。明らかにはイエスの言葉ではなく、弟子たちの、あるいは初代教会の願望の言葉であろう。

ーマタイ 19:28「イエスは一同に言われた『はっきり言っておく。新しい世界になり、人の子が栄光の座に座るとき、あなたがたも従って来たのだから、十二の座に座ってイスラエルの十二部族を治めることになる』」。

・イエスはこの世での所有放棄を求められる。弟子たちは自らの家、兄弟、姉妹、父母、子、畑への執着を断ち切らねばならない。生易しいことではないからこそ百倍の報いがある。

ーマタイ 19：29-30「私の名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子供、畑を捨てた者は皆、その百倍もの報いを受け、永遠の命を受け継ぐ。しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる」。

・イエスにより集められた十二人の弟子は、社会の下層民であり、社会の先頭に立つような人々ではなかった。彼らは神を信じ、イエスを信ずる以外、何も持たず、イエスと共に伝道の旅へ出立した。彼らにも野心があったが、最後には「持ち物を売り払い、私に従いなさい」という言葉に従った。彼らはこの世では無力な者であり、イエスに従い殉教した愚か者であった。しかし、神の国の視点で見れば、神に選ばれ、大きな

役割を担った。彼らの残した手紙や教えは正典となり、2 千年の時を超えて人々が読み続けている。

**41. マタイ 20：1－16、ぶどう園の労働者の譬え**

**1. 「ぶどう園の労働者」の譬え**

・イエスは多くの譬え話を語られたが、その中でも「ぶどう園の労働者の譬え」は有名だ。ぶどうの獲り入れに雇われた日雇い労働者の話は、当時のぶどう園の労働事情が背景になっている。九月になるとパレスチナ地方のぶどうは一斉に熟し、雨季が来る。雨季になる前に収穫しないと、ぶどうは腐ってしまうから、収穫作業は手早く済ませねばならない。そこで一時的にたくさんの人手が必要になり、多くの日雇い労働者を雇い入れる。

ーマタイ 20：1－2「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。主人は一日に一デナリオンの約束で労働者をぶどう園に送った」。

・日雇い労働者は農地を持たず、その日の労働を切り売りして暮らす。彼らは朝早くから広場に立って、雇い主が現れるのを待ち、賃金も雇い主の定めた額しか貰えなかった。ぶどう園の主人は夜明けごろ広場に出かけ、最初の労働者を日当一デナリオンで雇った。それでも人手が足りず、十二時と三時ごろにも出かけて労働者を雇った。さらに、午後五時になってまだ仕事につけない労働者がいたので、彼らも雇った。

ーマタイ 20：3－7「また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、『あなたたちも行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った。それで、その人たちは出かけて行った。主人は十二時ごろと三時ごろにまた出て行き同じようにした。五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、彼らは『だれも雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った」。

・夕方仕事が終わって賃金を支払う時になり、主人は最後に来た労働者から賃金を払い始め、彼らに一デナリオンを払った。最初から働いた労働者はこれを見て、自分たちはもっともらえると期待した。しかしもらえたのは同じ 1 デナリオンであった。

ーマタイ 20：8－10「夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。そこで五時ごろに雇われた人が来て、一デナリオンずつ受け取った。最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。」

**2. 後の者が先になり、先の者が後になる**

・主人の賃金の支払い方は常識を覆すものだった。通常はしないような形で、労働時間の短い者から支払いを始め、彼らは 1 デナリをもらった。長時間労働者たちの期待は増す「自分たちはもっと多くもらえるだろう」と。ところが 12 時間働いた長時間労働者の賃金も同じ 1 デナリだった。長時間労働者は怒り始めた。最後に雇われた労働者と自分たちの賃金が、同じ一デナリオンでは納得できなかなかった。期待が落胆に変わり、落胆が怒りに変った。

ーマタイ 20：11－12「そこで受け取ると、主人に不平を言った。『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日暑い中を辛抱して働いた私たちと、この連中とを同じ扱いにするとは』」。

・「働いた成果に応じて報酬が与えられる」というのが世の常識であるのに、たくさん働いた人が少ししか働かなかった人と賃金が同じであるとはおかしい。朝から働いた労働者の不満は当然だ。しかし、主人は答える「あなたたちには約束通りの一デナリオン払ったではないか」と。

ーマタイ 20：13－16「主人はその一人に答えた『友よ、私は不当なことはしていない。あなたは私と一デナリオンの約束をしたではないか。自分の分を受け取って帰りなさい。私はこの最後の者にも同じように支払ってやりたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしてはいけないのか。それとも、私の気前のよさをねたむのか』。このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる」。

・主人は何故 1 時間しか働かない人に、1 デナリを支払ったのか。それは 1 デナリがないと労働者とその家族は今日のパンが買えないからだ。それは生きるための最低賃金である。マタイによれば「5 時から働いた人は怠けていたわけではなく、職を求めて朝から広場にいた」(20：7)、しかし体力がないと見られたのか、6 時にも 9 時にも 12 時にも雇ってもらえなかった。父なる神は、この人々の悲しさを知って、彼らにもその日のパンを買うだけの賃金を下さった。しかし人々はそれを理解しなかった。

ーマタイ 20：14b-15「私はこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、私の気前のよさをねたむのか」。

3. この物語は何を語るのだろうか
・主人は不平を言う労働者に語る「私の気前のよさを妬むのか」。「妬む」、原語では「悪い目」が用いられる。自分の財産や権利を守るために、人が自分の周りに張り巡らしてしまう視線のことだ。最初の労働者はこの世的な公平を求め、1時間労働者の賃金が12分の1デナリオンであれば満足したであろう。その結果、1時間労働者が今日生きるためのパンを買うことが出来なくとも、それは彼等の関知するところではない。この「悪い目」、自分の満足のためであれば他人のことを考慮しない悪い目を、人は持つことを教えるために、主人はあえて「短時間労働者」から支払いを始めた。
・この世は働けない者の悲しさや苦しさは考慮しない。日本では労働組合も非正規労働者の雇用改善のために取り組むことをしない。12時間労働者と同じ「悪い目」を持つからだ。この世の価値観は能力主義、業績主義であり、社会は労働能力の劣ったものを「役立たず」として捨てる。しかし、私たちがある人々を「役立たず」として捨てる時、実は私たち自身を捨てている。私たちもいつかは、無能力者になる。病気になるかもしれない。失業して無収入になるかも知れない。年をとれば身体的・精神的能力は衰える。他人に起こった不幸は自分にも起こり、能力主義の社会では何時敗者になるかわからないし、勝ち組も遅かれ早かれ負け組になる。「そこには平安がないではないか、それで良いのか」と神は言われている。
・「この最後の者にも同じように支払ってやりたい」、この言葉に神の愛がある。主人は1時間しか働かない人に1デナリオンを支払った。それは1デナリオンがないと労働者と家族は今日のパンが買えないからだ。それは生きるための最低賃金なのだ。マタイの記事によれば「5時から働いた人は怠けていたわけではなく、他の人たちと一緒に職を求めて朝から広場にいた」（20：7）、しかし体力がないと見られたのか、6時にも9時にも12時にも雇ってもらえなかった。父なる神は、この人々の悲しさを知って、彼らにもその日のパンを買うだけの賃金を下さった。「最後の者も生きるために必要なものは与えられる」、それが神の国の経済論理なのである。
・「この最後の者にも」、経済学者のジョン・ラスキンはこの譬えを基に資本主義経済を批判した著作「Unto The Last この最後の者にも」（1860年、岩波文庫訳）を発表した。現代社会の不幸を救済するために、神の国の経済学を導入すべきであると彼は主張した。彼の経済学は「人間を幸せにするための経済学」と言われ、それを読んだマハトマ・ガンジーがそれまでの資本主義や社会主義とも違った、「人間の心の変革を起こす」独自の改革思想に目覚めた契機になったと言われている。アジアで初めてノーベル経済学賞を受賞したインドのアマルティア・センはラスキンの思想を現代化した。マタイ20章は現代社会のあり方に警告する神からのメッセージであり、同時に私たちの悲しみや苦しみは決して無駄ではないという喜ばしい福音を伝える。
・アメリカの作家のジョン・スタインベックは1939年に小作農民の苦難を描いた『怒りの葡萄』を発表した。飢饉により土地を追われ流民となった農民たちが、豊かなカリフォルニアの地で過酷な日雇労働者として労苦する様を描き、ベストセラーになった。スタインベックはキリスト教文学、とりわけ聖書に決定的な影響を受けた。本作でジョード一家が貧しいオクラホマから、乳と蜜の流れる、豊饒な「約束の地」であるカリフォルニアに脱出するところは、旧約聖書の「出エジプト記」をモチーフとしている。また、物語の最後で母親が言う「先の者が後にまわり、後の者が先頭になる」はマタイ20章の一節である。「葡萄」とは、神の怒りによって踏み潰される「人間」を意味する（ヨハネ黙示録14：17-20）。なお、怒りの葡萄（grapes of wrath）という表現は、ヨハネ黙示録に題材を得たアメリカの女流詩人ジュリア・ウォード・ハウの1862年作「リパブリック賛歌」（南北戦争での北軍の行軍曲）の歌詞から取られている。
＊リパブリック賛歌歌詞「私の眼は主の降臨の栄光を見た。主は、怒りの葡萄が貯蔵されている葡萄酒醸造所を踏み潰す。恐るべき神速の剣を振るい、運命的稲妻を放った。主の真理は進み続ける」。
・神は弱き者の側に立たれる。コリントで洗礼を受けたのは奴隷たちが多かった。インドでクリスチャンになったのは指定カーストの人びとだった。アメリカでは白人よりも黒人が熱心なキリスト教徒になっている。日本で同じような立場にあるのが、「非正規労働者」であろう。日本では正規雇用者の平均所得は503万円だが、非正規雇用では175万円にすぎない。そして労働人口の37%、2000万人が非正規雇用者として働いている。ぶどう園の労働者の物語は現在の日本の物語なのではないか。

42 マタイ20：17－34、偉くなりたいという弟子たちの願い
1. ヤコブとヨハネの母の願い
・エルサレムに近づいた時、イエスは三度目の受難予告をされた。
ーマタイ20:17-19「イエスはエルサレムへ上って行く途中、十二人の弟子だけを呼び寄せて言われた。『今、

私たちはエルサレムへ上って行く。人の子は、祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して、異邦人に引き渡す。人の子を侮辱し、鞭打ち、十字架につけるためである。そして、人の子は三日目に復活する』」。
・その直後に、弟子のヤコブとヨハネが進み出て、イエスに言う「栄光をお受けになる時、私どもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください」。三度目の受難予告を聞いたばかりなのに、弟子たちはまだエルサレムで何が起こるかを理解しておらず、イエスがエルサレムで王になられる時に自分たちも報償が欲しいと言う。なおマタイでは、ゼベダイの子ヤコブとヨハネの母が、「エルサレムであなたが即位される時は、息子たちをあなたの左右の座に着く大臣に取り立ててほしい」と願い出たとある。
ーマタイ 20：21「その時、ゼベダイの息子たちの母が、その二人の息子と一緒にイエスのところに来て、ひれ伏し何かを願おうとした。イエスが『何が望みか』と言われると、彼女は言った『王座にお着きになるとき、この二人の息子が、一人はあなたの右にもう一人はあなたの左に座れるとおっしゃってください』」。
・マタイでは彼らの母親が大臣就任を願い出ているが、原本のマルコではヤコブとヨハネの本人が願い出ている。マタイが十二弟子たちの名誉を守るために、申出者を本人から母親に変えたと思われる。
ーマルコ 10:35「ゼベダイの子ヤコブとヨハネが進み出て、イエスに言った『先生、お願いすることをかなえていただきたいのですが』。イエスが、『何をしてほしいのか』と言われると、二人は言った。『栄光をお受けになるとき、私どもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください』」。
・イエスは息子たちに、「あなたたちは自分が何を求めているか、分かっていない」と言われた。イエスは彼らに「私が飲もうとしている杯を飲めるか」と反問された。彼らは即座に「飲めます」と答えているが、これは空返事である。なぜなら、イエスがこれから飲もうとしている杯は「十字架の死」であり、当時の彼らには、その意味が理解できていない。
ーマタイ 20：22－23「イエスはお答えになった『あなたがたは自分が何を願っているか、分かっていない。この私が飲もうとしている杯を飲むことができるか』。二人が『できます』と言うと、イエスは言われた『確かに、あなたがたは私の杯を飲むことになる。しかし、私の右と左にだれが座るかは、私の決めることではない。それは、私の父によって定められた人々に許されるのだ』」。
・ヤコブは使徒の中で最初の殉教者になった（使徒 12：1、ヤコブは紀元 43 年ヘロデ・アグリッパ王により殺された）。ヨハネは長寿を全うしたが、晩年には迫害の中でエルサレムから小アジアに移住している。イエスの「あなたがたは私の杯を飲むことになる」という言葉は、二人の運命を知っていた初代教会が、イエスの言葉に補筆したものであろう。イエスに従うとはイエスと共に十字架を負うことである。弟子たちはイエスの復活後、そのことに気づいた。
ー第一ペテロ 2:21-25「あなたがたが召されたのはこのためです。というのは、キリストもあなたがたのために苦しみを受け、その足跡に続くようにと、模範を残されたからです。この方は・・・十字架にかかって、自らその身に私たちの罪を担ってくださいました。私たちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました。あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は、魂の牧者であり、監督者である方のところへ戻って来たのです」。
・弟子たちはイエスを理解していなかった。その彼らに、イエスの十字架死は恐ろしい衝撃だったと思える。しかし弟子たちは復活のイエスとの出会いを通じて、「イエスが今も生きておられる」との確信が与えられ、イエスの死を「罪を贖う犠牲の死」だと理解し、そこからイエスが生前説いていた罪の赦しを理解した。そして、赦しを経験した彼らは、新しい人生を歩むようになる。私たちもこの赦しの中で教会生活を続ける。

**2. 人の子が自分の命を献げるために来たように**
・母親を巻き込んでのヤコブとヨハネの抜け駆けは、たちまち他の弟子たちに伝わり、彼らは憤慨した。弟子の中で誰が偉いかという議論は、イエスからみれば愚かなことだが、集団の中では、よく起こる。
ーマタイ 20：24「ほかの十人の者はこれを聞いて、この二人の兄第のことで腹を立てた」。
・イエスは弟子たちを呼ぶ集め、
「異邦人の間では偉い人たちが民を支配しているが、あなた方の間ではそうであってはならない」と諭し、皆の中で偉くなりたい者は、僕となり皆に仕えなさいと諭した。偉い人=ギリシャ語メガス、ラテン語マイヨール=大いなる者、ローマ皇帝の別称だ。イエスは「支配者とみなされているローマ帝国の者たちは諸民族の上に君臨し、皇帝が諸民族に対して権力を振るっている。だが君たちは決してそうであってはならない」と語る。
ーマタイ 20：25－28「そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。『あなたがたも知っているように、異

邦人の間では支配者たちが民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は皆の僕になりなさい。人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるためにきたのと同じように』」。
・三回目の受難予告を通して明らかになることは、弟子たちの上昇志向だ。彼らはイエスがエルサレムで王になられ、その時は自分たちも特権的な地位につけると思っているから、イエスに従って来た。彼らはイエスの苦しみを理解することなく、自分たちのことだけを考えている。私たちもまた「上昇志向」の中にある。身分の高い人や権力者や資産家の周りには大勢の人々が寄ってくる。人に評価され、賞賛されることは心地よいものであり、私たちもそういう人になりたいと思っている。しかし上に立つ人がいれば下で苦しむ人もいる。上に立つ人は、周りの人が耐えている痛みや苦しみ、悲しみが見えなくなる。メシアとしてのイエスの生涯を駆り立てるものは、苦しむ人々への共感であり、私たちがイエスの後に従いたいのであれば、私たちの生き方も修正を迫られる。
・イエスは、「人は罪を背負った存在であるが、その罪人を神は一方的に受容して下さった。あなたがたは既に神に赦されている。だから、この世的な支配-被支配の生き方から解放されよ」と言われる。それが「あなたがたの中で偉くなりたい者は皆に仕える者になり、一番上になりたい者はすべての人の僕になりなさい」という意味であろう。教会におけるリーダーシップは「導くことではなく、仕えること」である。
ーヨハネ 13:14-15「ところで、主であり、師である私があなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。私があなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである」。

**3. 二人の盲人をいやす**
・二人の盲人の癒しの記事はマタイ 9：7ー21 に既出している。二つの記事を同一の出来事の別の記録とする研究もあるが、状況は異なっている。エリコの城門に物乞いの盲人がたむろしていた。彼らの一人が門を通過するイエス一行に気づき、助けを求めて叫び始め、他の盲人も呼応して助けを求めて叫んだ。盲人の呼びかけの「主よ」は、イエスの権威を認める称号であり、「ダビデの子よ」はユダヤ世界のメシアとしての称号であった。イエスはどちらの呼びかけも拒否されなかった。
ーマタイ 20：29ー31「一行がエリコの町を出ると、大勢の群衆がイエスに従った。そのとき、二人の盲人が道端に座っていたが、イエスがお通りと聞いて『主よ、ダビデの子よ、私を憐れんでください』と叫んだ。群衆は叱りつけて黙らせようしたが、二人はますます『主よ、ダビデの子よ、私を憐れんでください』と叫んだ」。
・イエスは立ち止まり彼らに「何をしてほしいか」と尋ねられた。
ーマタイ 21：32-34「イエスは立ち止まり、二人を呼んで、『何をしてほしいのか』と言われた。二人は、『主よ、目を開けていただきたいのです』と言った。イエスが深く憐れんで、その目に触れられると、盲人たちはすぐ見えるようになり、イエスに従った。」
・原本のマルコではこの盲人はバルティマイとされている。名前が知られていることはバルティマイがその後イエスの弟子となり、初代教会の人々は彼を知っていたことを示すものである。ここにあるのは奇跡物語ではなく、イエスに臣従した弟子の記録である。
ーマルコ 10:46-52「一行はエリコの町に着いた。イエスが弟子たちや大勢の群衆と一緒に、エリコを出て行こうとされたとき、ティマイの子で、バルティマイという盲人の物乞いが道端に座っていた・・・イエスは『何をしてほしいのか』と言われた。盲人は『先生、目が見えるようになりたいのです」と言った。そこで、イエスは言われた『行きなさい。あなたの信仰があなたを救った』。盲人は、すぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った」。

**43. マタイ 21：1ー11、イエスのエルサレム入城～驢馬にのって**
**1. イエスのエルサレム入城**
・エルサレムを目指して旅を続けて来たイエス一行は、エルサレム郊外のオリーブ山のふもとまで進んで来られた。近くにベタニヤ村がある（マルコ 11：1、マタイではベトファゲ）。イエスは二人の弟子に、「向こうの村へ行って驢馬を借りて来なさい」と言われた。ベタニヤ村には、イエスと親しかったマリアとマルタたちが住んでおり、イエスの為に驢馬を用立ててくれる約束になっていた。
ーマタイ 21：1ー3「一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山沿いのベトファゲの来たとき、イエスは二人

の弟子を使いに出そうとして、言われた『向うの村に行きなさい。するとすぐ、驢馬がつないであり、一緒に子驢馬のいるのが見つかる。それをほどいて、私のところに引いて来なさい。もし、だれかが何か言ったら「主がお入用なのです」と言いなさい。すぐ渡してくれる』」。
・イエスはエルサレム入城の時に、驢馬の背に乗られたが、マタイはそれが聖書の預言の成就であったとして、ゼカリヤ書を引用する。
ーマタイ 21：4ー5「それは預言者を通して言われていたことが実現するためであった『シオンの娘に告げよ。「見よ、お前の王がお前のところにお出でになる、柔和な方で、驢馬に乗り、荷を負う驢馬の子、子驢馬に乗って」』」。
・イエスは驢馬に乗って、エルサレムに入られたが、それは、イエスが、ゼカリヤ書に象徴される「柔和の王」である事を人々に示されるためであった。「私はメシアであり、あなたがたを救う為に、都に来た。しかし、あなたがたが期待するように軍馬に乗ってではなく、驢馬の子に乗って来た」という、イエスの気持ちが、驢馬に乗るという行為に示されている。
ーゼカリヤ 9：9「娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者、高ぶることなく、驢馬に乗って来る、雌驢馬の子である驢馬に乗って」。
・エルサレムでは、高名な預言者が来るとして、人々が集まって来た。不思議な力で病いを治し、悪霊を追い出されるイエスの評判は都まで伝わっていた。都の人々は期待を持ってイエスを歓迎した。
ーマタイ 21：6ー9「弟子たちは行って、イエスが命じられた通りにし、驢馬と子驢馬を引いて来て、その上に服をかけると、イエスはそれにお乗りになった。大勢の群衆が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は木の枝を切って道に敷いた。そして群衆は前を行く者も後に従う者も叫んだ。『ダビデの子にホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。いと高きところにホサナ』」。
・「あなたがメシアであれば、このイスラエルから占領者ローマを追い出し、再びダビデ王国の栄光を取り戻して下さい」と群衆は期待して叫ぶ。その声の中を、イエスは無言で、驢馬の背に揺られて進んで行かれた。驢馬は古代の王の乗りものであったが、ソロモン時代以降、次第に馬が王の象徴として用いられるようになる。しかし預言者たちは、武力と権力の象徴となった馬は忌避した。
ー詩編 147：10ー11「主は馬の勇ましさを喜ばれるのでもなく、人の足の速さを望まれるのでもない。主が望まれるのは主を畏れる人、主を待ち望む人」。
・「新約聖書 1 日 1 章」を書いた榎本保郎牧師は、この箇所に基づき、自分を「ちいろば」（子驢馬）と称した。イエスを乗せた子驢馬のように、イエスの福音を運びたいと願ったからである
ー三浦綾子・ちいろば先生物語から「エルサレムに入城するイエス様を乗せた、小さな子驢馬のようになりたい。『主の用なり』と言われたら、たとえ自分に力が無くとも、どこへでも出かけて行こう。敗戦後、満州から帰国した榎本保郎は、挫折を試練に変えて立ち直り、神の道への献身をこのように決意する」。

**2. 歓呼してイエスを迎える群衆**

・当時ユダヤを支配していたローマ総督は、重要な祭日には、滞在するカイザリアから、戦車や軍馬を連ねてエルサレムに入城した。エルサレムにはローマ兵が常駐するアントニア要塞があり、警備軍を増強し、治安維持を強化するためであった。過越祭においては、全国から多くの巡礼者が集まってエルサレムの人口は十倍以上になり、国民的な宗教感情が高まり、征服者ローマに対する敵意が暴動となりかねなかった。ローマ軍はカイザリアから、すなわち西から、戦車や軍馬を連ねて、エルサレムに入る。それに対して、イエスは、オリーブ山から、東から、数人の弟子たちを従えて、「驢馬に乗って」入城された。イエスのエルサレム入城は「軍事力や権力」の誇示ではなく、「謙遜と非暴力」の表現である。イエスは行為を通して人々に語られる「馬は人を支配し、従わせるための乗り物だ。しかし、私は支配するためではなく、仕えるために来た。あなたがたに本当に必要なものは戦いで勝利を勝ち取ることではなく、和解だ。人間同士、国同士の和解に先立って、まず神との和解が必要だ。しかし、あなたがたの罪がその和解を妨げている。だから私はあなた方の罪を背負うために来た」と。
・驢馬は風采の上がらない動物で、戦いの役には立たない。しかし、柔和で忍耐強く、人間の荷を黙って背負う。人々が求めていたのは、「栄光に輝くメシア」、軍馬に乗り、大勢の軍勢を従え、敵から解放し、幸いをもたらしてくれる「強いメシア」であり、驢馬に乗る「柔和なメシア」ではなかった。人々は、イエスが自分たちの求めていたメシアではないことがわかると、一転して「イエスを十字架につけろ」と叫び始め、それが金曜日の受難へと続く。「柔和の王」を拒否したエルサレムの人々は、やがてローマに対して武力闘争を始め（紀元 66 年）、その結果、エルサレムはローマ軍に占領され、焼かれ、神殿も崩壊する。

ーマタイ 26:52「イエスは言われた。『剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる」。

3. 柔和なイエスに従っていく

・イエスが「馬ではなく、驢馬に乗って」エルサレムに入城されたことは、深い意味を持っている。軍馬に頼る平和はないことを示すためだ。

ーイザヤ 2：4「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」。

・人類は有史以来、戦争を繰り返してきた。それは人間の中にある罪のためであり、その罪を贖い、殺し合いを止めさせ、真の平和を打ち立てるのは人間には不可能ゆえに、イザヤは「神の平和を待ち望む」。イザヤ書 2 章 4 節はニューヨークの国連ビルの土台石に刻み込まれている。二度の世界大戦を通して、世界は苦しみ、血を流した。「もう、戦争は止めよう、武器を捨てよう。剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌としよう」と言う理想を掲げて、国連は設立された。しかし、戦後世界でも戦火は続いている。

・イザヤが生きた紀元前 700 年ごろ、中東ではアッシリアが世界帝国の道を歩み、シリアが占領され、北イスラエルは滅ぼされ、圧倒的な軍馬がユダ王国に迫った。人々はアッシリアに対抗するためにエジプトの援助を求めるが、イザヤは反対する。ユダ王国はアッシリア軍によって国土の大半を焼かれ、占領され、かろうじてエルサレムだけが残された。イザヤの平和預言は戦争に負け、国土が焼け野原になった状況の中で歌われた。その状況は 1945 年の日本に酷似している。日本は戦争に負け、国土は焼け野原になった。もう兵器はいらない。砲弾や武器を作るために兵器工場に集められた鉄が鋳られ、釜や鍬が作られた。そして新しい憲法が発布され、新憲法は 9 条 1 項で「戦争の放棄」を宣言し、9 条 2 項で「いかなる軍隊も武力も保持しない」と宣言した。世界で初めての平和憲法である。イザヤが夢見た「戦争の放棄」という出来事が現代日本で起こった。

・ユダの国はアッシリアが強くなるとアッシリアになびき、エジプトが強くなるとエジプトになびいた。その結果、国は滅んだ。イザヤの信仰は単なる理想ではなく、世界情勢の現実認識の上に立てられたものだった。このイザヤの心を具体化されたのがイエスである。

ーマタイ 5：5「柔和な人々は幸いである。その人たちは地を受け継ぐ」。

・「柔和な人々」とは、腕力や権力、経済力や軍事力を使って無理やり人に言うことを聞かせようとしない。現実主義者は、「この世界では軍馬の思想のみが有効な行き方だ」と語るが、歴史上、軍馬で平和が達成されたことはない。軍馬の思想を極限まで推し進めた強国アッシリアはバビロンに滅ぼされ、バビロンもペルシャに、ペルシャもギリシャに、ギリシャもローマに滅ぼされた。柔和なイエスがこの世界史の中に誕生されたということは、新しい世界が始まったということであり、キリスト者はこの視点に立って国の安全保障を考える必要がある。

・イエスが驢馬を調達されたベタニヤは、「神により頼む、貧しい者の家」と言う意味である。この村でラザロは死からよみがえり（ヨハネ 11：44）、マリアはイエスにナルドの香油を奉げ（マタイ 25：12）、イエスはこの村から昇天された（ルカ 24：50）。私たちは教会をベタニヤ村のような共同体にしたいと願う。驢馬のように、忍耐強く、愚痴を言わずに、黙々と他者の荷を負っていく共同体だ。「柔和」とはギリシャ語「プラウース」、単なる謙遜やおとなしさではなく、「抑圧にめげない」姿勢を示す。「右のほほを打たれたら左のほほを出す。しかし決して下は向かない」、「罵られても罵り返さない。しかし決して屈しない」という強さを持った言葉だ。どのような中にあっても抑圧に負けず、雄々しく生きる生き方こそ「柔和な」、私たちの目指すべき生き方ではないか。

44. マタイ 21：12-27、宮清めと権威問答

1. 神殿から商人を追い出す

・エルサレムに入られるとイエスはすぐに神殿に行かれ、宮清めをされる。この記事はマタイ・マルコ・ルカの共観福音書だけでなく、ヨハネ福音書にも記されている。4 福音書全てに記載されていることは、初代教会にとって重要な出来事であることを示す。

ーマタイ 21：12－14「それから、イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いをしていた人々を皆追い出し、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けを倒された。そして言われた『こう書いてある。「私の家は祈りの家と呼ばれるべきである。ところが、あなたたちは、それを強盗の巣にしている」』。境内では目の見えない人や足の不自由な人たちがそばに寄って来たので、イエスはこれらの人々をいやされた」。

・イエスが言われた「私の家は祈りの家と呼ばれるべきである、ところがあなたたちはそれを強盗の巣にし

ている」。これはイザヤ、エレミヤからの預言の引用である。祈りの家であるべき神殿で、両替商や生贄の犠牲獣を売る者たちの叫び声が、神殿の神聖を損ねていた。強盗の巣のようであった。
ーイザヤ 56：7「私は彼らを聖なる私の山に導き、私の祈りの家の喜びの祝いに、連なることを許す。彼らが焼き尽す献げ物と生贄をささげるなら、私の祭壇で私はそれを受け入れる。私の家は、すべて民の祈りの家と呼ばれる。」
ーエレミヤ 6：11「私の名によって呼ばれるこの神殿は、お前たちの目に強盗の巣と見えるのか。その通り。私にはそう見える、と主は言われる」。
・イエスが糾弾された両替や犠牲の鳩を売る商行為は、当時の人にとって当然の行為だった。神殿税を払うためには、流通しているローマ貨幣をユダヤ貨幣に替えねばならなかったし、犠牲の動物を遠隔地から持参することも不可能だった。それでもなお、イエスが宮清めをされたのは、もっと根本的なこと、「犠牲を捧げれば救われる」というユダヤ教の根本教理に対する告発だった。イエスが処刑された最大の理由がここに（神殿否定＝ユダヤ教の根本教理の否定）あった。
ーヨハネ 2：18－21「ユダヤ人たちはイエスに『あなたは、こんなことをするからには、どんなしるしを私たちに見せるつもりか』と言った。イエスは答えて言われた『この神殿を壊してみよ。三日で建て直して見せる』。それでユダヤ人たちは『この神殿は建てるのに四十六年もかかったのに、あなたは三日で建て直すのか』と言った。イエスの言われる神殿とは、御自分の体のことだったのである」。
・当時のエルサレム神殿は壮大な伽藍や建物を持ち、数千人の祭司たちが働いていた。建物の維持費や人件費は膨大になり、そのために神殿内で犠牲の動物の売買や両替等の商いが公然と行われ、神殿の収益源になっていた。そのことに憤りを覚えられたイエスは宮清めをされた。
ーヨハネ 2：15-16「イエスは縄で鞭を作り、羊や牛をすべて境内から追い出し、両替人の金をまき散らし、その台を倒し、鳩を売る者たちに言われた『このような物はここから運び出せ。私の父の家を商売の家としてはならない』」。
・神殿から商人を追い出したのも、信仰の指導者であるべき祭司が神殿を利用して利益を貪り、本来のあり方から逸脱していることを批判する象徴行為だった。神殿崩壊の預言は、たとえエルサレムに主の神殿があったとしても、信仰がなければそれは崩れるとの預言だった。
ーマタイ 24:12「イエスが神殿の境内を出て行かれると、弟子たちが近寄って来て、イエスに神殿の建物を指さした。そこで、イエスは言われた。『これらすべての物を見ないのか。はっきり言っておく。一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない』」。

**2. イエスと祭司長たちの対立**
・イエスは神殿粛清の後で、盲人や足萎えの人を癒された。神殿には「盲人や足萎えは入ってならない」という規定があった（サムエル下 5：8）。彼らを癒すことによって彼らも神殿参拝が出来るようになった。
ーマタイ 21:14「境内では目の見えない人や足の不自由な人たちがそばに寄って来たので、イエスはこれらの人々を癒された」。
・イエスの神殿粛清は神殿体制を脅かすものだった。神殿の責任者である祭司長たちがイエスを攻撃するために来た。彼らはイエスを批難したが、イエスは反問されて神殿を出、ベタニヤ村に行かれた。
ーマタイ 21：15－17「他方、祭司長たちや、律法学者たちは、イエスの不思議な業を見、境内で子供たちまで叫んで、『ダビデの子にホサナ』と言うのを聞いて腹を立て、イエスに言った『子供たちが何と言っているか、聞こえるか』。イエスは言われた『聞こえる。あなたたちこそ、「幼子や乳飲み子の口に、あなたは賛美を歌わせた」という言葉をまだ読んだことがないのか』。それから、イエスは彼らと別れ、都を出てベタニヤに行き、そこにお泊まりになった」。
・後に、イエスが神殿で教えておられる時にも、祭司長たちが「何の権威で教えているのか」と詰問する。人々は外的権威を求める。イエスは律法学者としての学びもしておらず、どこの教派にも属していない。
―マタイ 21:23「イエスが神殿の境内に入って教えておられると、祭司長や民の長老たちが近寄って来て言った。『何の権威でこのようなことをしているのか。だれがその権威を与えたのか』」。
・権威を求める人々はイエスを無資格者とした。故郷ナザレの人たちも外的権威のないイエスにつまずいた。「この人はヨセフの子ではないか」、「同じ村人なのに何を偉そうに」と彼らはつぶやいた。
―ルカ 4:22「皆はイエスをほめ、その口から出る恵み深い言葉に驚いて言った。『この人はヨセフの子ではないか。』」

3. いちじくの木を呪う
・イエスは空腹を覚えられて、いちじくの木に近づかれたが、実はなく、いちじくの木を呪われた。
ーマタイ 21:18-19「朝早く、都に帰る途中、イエスは空腹を覚えられた。道端にいちじくの木があるのを見て、近寄られたが、葉のほかは何もなかった。そこで、『今から後いつまでも、お前には実がならないように』と言われると、いちじくの木はたちまち枯れてしまった。」
・いちじくは6月ごろに実を熟すが、過ぎ越しの祭りのころには (3-4 月)、季節が早すぎるため実を結ばない。それなのにイエスはいちじくの木を呪われた。
ーマタイ 21:20-22「弟子たちはこれを見て驚き、『なぜ、たちまち枯れてしまったのですか』と言った。イエスはお答えになった。『はっきり言っておく。あなたがたも信仰を持ち、疑わないならば、いちじくの木に起こったようなことができるばかりでなく、この山に向かい、立ち上がって、海に飛び込めと言っても、そのとおりになる。信じて祈るならば、求めるものは何でも得られる』」。
・イエスがエルサレムに入城されたのは、過越祭の時、3 月から 4 月にかけての時期であり、いちじくは葉が繁っていても実のなる季節ではない。実のなる季節でもないのにいちじくの実がないからと呪い枯らせるのは、理不尽ではないかとだれもが思う。イギリス人哲学者バートランド・ラッセルもこの物語に違和感を覚えた。彼は随筆「私はなぜキリスト教徒とならないか」の中で、イエスがいちじくの木を呪う箇所を取り上げ、「聡明さの点でも、徳の高さでも、他の歴史上の有名な人ほどに、キリストが高いと私は思えない」と、イエスが理不尽な行為をされたことを、彼がキリスト教徒とならない理由の一つとしている。
・この出来事は預言者の象徴行為であることを覚える必要がある。いちじくはイスラエルを象徴する果物であり、珍重されてきた。その神の民が今は葉ばかりが茂り、神に対して実りなき者となっており、その結果、破滅しかない。この厳粛な事実を示すために、イエスはあえていちじくの木を枯らすという異常な行動に出られた。その証拠に、マルコでは神殿粛清の記事を囲むように配置されている。この物語は本来、神殿粛清の物語の一部なのである。
ーマルコ 11:12「翌日、一行がベタニヤを出るとき、イエスは空腹を覚えられた。そこで、葉の茂ったいちじくの木を遠くから見て、実がなってはいないかと近寄られたが、葉のほかは何もなかった。いちじくの季節ではなかったからである。イエスはその木に向かって、『今から後いつまでも、お前から実を食べる者がないように』と言われた。弟子たちはこれを聞いていた～中略（神殿粛清）～翌朝早く、一行は通りがかりに、あのいちじくの木が根元から枯れているのを見た。そこで、ペトロは思い出してイエスに言った。『先生、御覧ください。あなたが呪われたいちじくの木が、枯れています』」。
・聖書にはもう一つの「実のならないいちじくの喩え」がある。私たちの信じるイエスは「実がならないいちじくの木を呪う」方ではなく、「何とか実がなるように取りなしの祈りをされる」方だ。バートランド・ラッセルが、このもう一つの「いちじくの物語」を知っていたら、彼はクリスチャンになったかも知れない。
ールカ 13：6-9「ある人がぶどう園にいちじくの木を植えておき、実を探しに来たが見つからなかった。そこで、園丁に言った。『もう三年もの間、このいちじくの木に実を探しに来ているのに、見つけたためしがない。だから切り倒せ。なぜ、土地をふさがせておくのか。』 園丁は答えた。『御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます。そうすれば、来年は実がなるかもしれません。もしそれでもだめなら、切り倒してください』」。

45. マタイ 21：28-46、ぶどう園と農夫の譬え
1. 「二人の息子」の喩え
・イエスは祭司長たちに、「二人の息子の喩え」を語られる。父親は初め兄にぶどう園に行くよう頼み、兄は最初断るが、その後思い直して行く。弟は「行きます」と返事するが、結局は行かなかった。マタイ独自の譬えである。
ーマタイ 21：28－30「ところで、あなたたちはどう思うか。ある人に息子が二人いたが、彼は兄のところへ行き、『子よ、今日、ぶどう園に行って働きなさい』と言った。兄は、『いやです』と答えたが、後で考え直して出かけた。弟のところへも行って、同じことを言うと、弟は『お父さん、承知しました』と答えたが、出かけなかった。この二人のうち、どちらが父親の望みどおりにしたか。』
・兄に例えられる宗教指導者は、ヨハネの説く「義の道」を受け入れながら、ヨハネに従わなかった。弟に例えられる徴税人や娼婦は「義の道」に背きながらも、ヨハネを、そしてイエスを受け入れた。最終的に神の御心に添った生き方をしたのは、宗教指導者ではなく、社会から排除されていた徴税人や遊女であったとイエスは指摘される。ただわかりにくい譬えである。

ーマタイ 21：31－32「『この二人のうち、どちらが父親の望みどおりにしたか。』彼らが『兄の方です』と言うと、イエスは言われた。『はっきり言っておく。徴税人や娼婦たちの方が、あなたたちより先に神の国に入るだろう。なぜなら、ヨハネが来て義の道を示したのに、あなたたちは彼を信ぜず、徴税人や娼婦たちは信じたからだ。あなたたちはそれを見ても、後で考え直して彼を信じようとしなかった。』」

**2. 農夫たちの反抗**

・イエスは次に「ぶどう園と農夫の喩え」を語られた。マタイ・マルコ・ルカに共通する譬えであり、原典はマルコであろう。旧約聖書において、イスラエルはしばしば、ぶどう園に喩えられた。「ぶどう園と農夫の喩え」に登場する、家の主人は「神」、ぶどう園は「イスラエル」、農夫たちは「イスラエルの宗教指導者たち」、僕たちは「預言者たち」、主人の息子は「イエス」でありと解釈される。

ーマタイ 21：33－36「『もう一つの譬えを聞きなさい。ある家の主人がぶどう園を作り、垣を巡らし、その中に搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た。さて、収穫の時が近づいたとき、収穫を受け取るために、僕たちを農夫たちのところへ送った。だが、この農夫たちはこの僕たちを捕まえ、一人を袋だたきにし、一人を殺し、一人を石で打ち殺した。また、他の僕たちを前よりも多く送ったが、農夫たちは同じ目に遭わせた。』」

・ぶどう園に喩えられたイスラエルの管理を、家の主人である神は、宗教指導者を含むイスラエルの人々たちに任せた。神は彼らを信頼したからこそ任せたのに、彼らは信頼を裏切った。ぶどう園の主人である神が度々送った僕たち（預言者たち）を殺し、神の信頼をないがしろにしてしまった。イエスはイスラエルの宗教指導者たちの犯してきた背信の罪を、「ぶどう園と農夫の喩え」で指摘された。その背景にはイザヤ書の警告がある。

ーイザヤ 5：7「イスラエルの家は万軍の主のぶどう畑、主が楽しんで植えられたのはユダの人々。主は裁き（ミシュパト）を待っておられたのに、見よ、流血（ミスパハ）。正義（ツェダカ）を待っておられたのに、見よ、叫喚（ツェアカ）」。

・ぶどう園の主人は、最後の手段として、息子を送るが、農夫たちは息子も殺し、ぶどう園まで自分たちのものとしようとする。跡取り息子の殺害は、イエスが殺害されたことを暗示している。

ーマタイ 21：37－39「そこで最後に『私の息子なら敬ってくれるだろう』と言って、主人は自分の息子を送った。農夫たちはその息子を見て話し合った『これは跡取りだ。さあ、殺して、彼の相続財産を我々のものにしよう』。そして、息子を捕まえ、ぶどう園の外にほうり出して殺してしまった」。

・イエスは事件の結末を、「ぶどう園の主人は、その悪党どもを死刑にして、ぶどう園は他の農夫に貸すだろう」と語られたと福音書記者は記す。

–マタイ 21：40–41「『さて、ぶどう園の主人が帰って来たら、この農夫たちをどうするだろうか』。彼らは言った『その悪人どもをひどい目に遭わせて殺し、ぶどう園は、季節ごとに収穫を納めるほかの農夫に貸すにちがいない』」。

**3. ぶどう園と農夫の譬えの背景にあるもの**

・祭司長たちやファリサイ人たちは、この物語が自分たちに対する批判であることを知り、歯ぎしりする。しかし、民衆の手前、今すぐイエスを捕らえることは出来なかった。

ーマタイ 21：45－46「祭司長たちやファリサイ派の人々はこの譬えを聞いて、イエスが自分たちのことを言っておられると気づき、イエスを捕えようとしたが、群衆を恐れた。群衆はイエスを預言者だと思っていたからである。」

・マタイ 21 章の物語は、マルコ 12 章から採られている。イエスが人々に言われたとされる言葉「ぶどう園の主人は農夫たちをどうするだろうか。戻ってきて、この農夫たちを殺し、ブドウ園を他の人たちに与えるに違いない」（12：9、マタイ 21：40–41）は、イエスの言葉ではないとされる。「十字架上で自分を殺す者たちのために祈られたイエスが、相手を裁き、その死を望まれる」とは思えない。

・聖書学者の多くは、マルコ 12：9 節後半以降（マタイ 21：40 以下）は初代教会が自分たちの信仰の立場から書き加えたと考えている。「農夫たちは殺され、ぶどう園は他の者に与えられる」とは、イエスの死から 40 年後に起こった対ローマ戦争でユダヤが敗北し、エルサレムが滅ぼされたことを暗示している。それは神のひとり子であるイエスを殺したことの報いであると初代教会は反論している。

・しかしこの付加により、イエスが語られた事柄の真意が歪められてくる。イエスは祭司たちに悔い改めを求められたが、その裁きは父なる神に委ねられた。しかし、弟子たちはイエスを殺したユダヤ人を裁き始め

ている。マタイはさらにマルコにはない43節以下を挿入し、そのトーンを強めている。
ーマタイ21：43-44「だから、言っておくが、神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民族に与えられる。この石の上に落ちる者は打ち砕かれ、この石がだれかの上に落ちれば、その人は押しつぶされてしまう」。

**4. 隅の親石の喩え**
・その後、イエスは隅の親石の喩えを語られた。
ーマタイ21：42－44「イエスはこう言われた『聖書にこう書いてあるのを、まだ読んだことがないのか。『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石になった。これは、主がなさったことで、私たちの目には不思議に見える』。だから、言っておくが、神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民族に与えられる。この石の上に落ちる者は打ち砕かれ、この石がだれかの上に落ちれば、その人は押しつぶされてしまう』」。
・隅の親石という言葉は詩篇118編から採られている。元来は、バビロン捕囚を踏まえた詩だ。神は罪を犯したイスラエルを罰するために、バビロニア帝国を用いて国を滅ぼされ、指導者たちをバビロンに捕囚として送られた。イスラエルは捨てられた。捕囚民はバビロンの地で悔い改め、涙を流した。時が来て、神は、バビロンに囚われた人々を解放してイスラエルに戻し、新しい国の再建を任せられた。「捨てられたかに見えた石を用いて、神はイスラエルを立て直された」と人々は神を賛美した詩である。
ー詩編118：22－23「家を建てる者の退けた石が、隅の親石となった。これは主の御業、私の目には驚くべきこと」
・マルコ（そしてマタイ）がこの詩篇を引用した意図は明確だ。人々はイエスを役に立たない石として捨てるが、そのイエスを神は死から復活させられ、復活を通して、人々はイエスが神の子であることを知り、自分たちが神の子を殺したことに気づき、悔改める。その時、「家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となる」。それは祝福の言葉であり、呪いの言葉ではない。
・マタイ21：42－44はイスラエルに対する呪いが記されているが（神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民族に与えられる。この石の上に落ちる者は打ち砕かれ、この石がだれかの上に落ちれば、その人は押しつぶされてしまう）、当然にイエスの言葉ではない。教会によるイエスの言葉の書き換えが後のユダヤ人迫害（キリストを殺した民としてのユダヤ人）、そしてナチスのユダヤ人大量虐殺に繋がっていく。イエスは福音を語られたのに、弟子たちはそれを裁きの言葉に変えた。私たちは聖書が福音である（良い知らせ）であることを、聖書の釈義を通して明らかにしていく責任がある。

**46. マタイ22：1-22、婚宴の喩えと皇帝への税金**
**1. 婚宴の喩え**
・婚宴の喩えはマタイとルカにあり、イエスの語録伝承（Q資料）によるもの。元々は、イエスの教えを聞きながら、日常の多忙さの中でその教えを無視した人々への警告の喩えだったとされる。オリジナルはルカ福音書に近いとされる。
ールカ　14:16-21「ある人が盛大な宴会を催そうとして、大勢の人を招き、宴会の時刻になったので、僕を送り、招いておいた人々に、『もう用意ができましたから、おいでください』と言わせた。すると皆、次々に断った。最初の人は、『畑を買ったので、見に行かねばなりません。どうか、失礼させてください』と言った。ほかの人は、『牛を二頭ずつ五組買ったので、それを調べに行くところです。どうか、失礼させてください』と言った。また別の人は、『妻を迎えたばかりなので、行くことができません』と言った。僕は帰って、このことを主人に報告した。すると、家の主人は怒って、僕に言った。『急いで町の広場や路地へ出て行き、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れて来なさい』」。
・聖書学者の大貫隆はルカの譬えを解説する「盛大な宴会の喩えでは、主人が宴席（神の国の食事）に招待しようとしても、人々は多忙を理由に断る。日常的・連続的時間、クロノスの根強さがここにある。仕事に追われて宴会どころではない。神の国、そんな話を聞いている暇はさらにない。イエスの『今（カイロス）』が生活者の『クロノス』と衝突し、拒絶される」（大貫隆『イエスという経験』）。
・この喩えをマタイは、イエスを受け入れなかったユダヤ人の不信の罪を語る物語と理解した。招待を受けながら、理由を並べ、婚宴への出席を拒んだ客はユダヤ人である。彼らは、神に選ばれ、生かされてきたにもかかわらず、神の恩寵を忘れ、イエスの招きを拒絶した。
ーマタイ22：1-5「イエスは、また、喩えを用いて語られた。『天の国は、ある王が王子のために婚宴を催し

たのに似ている。王は家来たちを送り、婚宴に招いておいた人々を呼ばせたが、来ようとしなかった。そこでまた、次のように言って、別の家来たちを使いに出した。「招いておいた人々にこう言いなさい。『食事の用意が整いました。牛や肥えた家畜を屠って、すっかり用意ができています。さあ、婚宴にお出でください』。しかし、人々はそれを無視し、一人は畑に、一人な商売に出かけた」。
・さらにマタイは独自の特殊記事を挿入する「ある者たちは婚宴の知らせをした王の使いを殺してしまった。そのため、王は怒り、軍隊を派遣して彼らを殺し、町を焼き払った」。この部分は紀元70年のローマ軍によるエルサレム破壊を示唆している。ユダヤ人は神から遣わされたイエスを受け入れずに、十字架に架けて殺してしまった、その報いがエルサレムの崩壊だとマタイは理解している。
ーマタイ22：6ー7「『また、他の人々は王の家来たちを捕まえて乱暴し、殺してしまった。そこで、王は怒り、軍隊を送って、この人殺しどもを滅ぼし、その町を焼き払った』」。
・王は婚宴を断った客の代わりに、町の大通りから婚宴客を集めてくるよう家来に命じた。並行のルカは「急いで町の広場や路地へ出て行き、貧しい人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れて来なさい」（14：21）と記している。王は客の資格など問わない決心をした。神に選ばれた民の無礼と不信仰から、神の招きが異邦人へ向けられことを示す。「見かけた者はだれでも婚宴に連れて来なさい」と家来に命じたのは、神によるユダヤ民族を超えた異邦人への招きが始まったことを指している。
ーマタイ22：8ー10「そして家来たちに言った。『婚宴の用意はできているが、招いておいた人々はふさわしくなかった。だから、町の大通りに出て、見かけた者はだれでも婚宴に連れて来なさい』。そこで、家来たちは通りに出て行き、見かけた人は善人も悪人も皆集めて来たので、婚宴は客でいっぱいになった」。

**2. 招かれる人は多いが選ばれる人は少ない**
・王が婚宴会場を見回すと礼服を着ていない客がいた。王は礼服を着ていない理由を尋ねたが、彼は答えられなかった。王は側近に命じて、彼の手足を縛らせ、放り出させた。彼は礼服を着て来なかったことを悔い、暗闇で泣きわめいて悔しがったが、もう手遅れだった。
ーマタイ22：11ー14「王が客を見ようと入って来ると、婚礼の礼服を着ていない者が一人いた。王は、『どうして礼服を着ないでここに入って来たのか。』と言った。この者が黙っていると、王は側近の者たちに言った。『この者の手足を縛って、外の暗闇にほうり出せ、そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう』。招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない」。
・礼服着用が、異邦人伝道における喩えとするなら、礼服は洗礼によりキリストを着ることを示すのであろう。神の国への招きはすべての人に向けられている。しかし来た人すべてが選ばれるわけではない。「礼服を着る」、キリストを生きることが求められている。
ーガラテヤ3:26-27「あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです」。
・神の招きを受けて求道し、信徒の一人に迎えられたとしても、後に信仰を捨てる人が多いという現実はマタイの譬え（招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない）の真実性を納得させる。また「今に忙殺され、将来を考えようとしない」現代人の多くは神の招きを断るが、人間存在の根底的問題、「死」に直面した時、彼らは変えられる。1985年8月12日日航機が群馬県上野村に墜落し、520名の方々が亡くなったが、遺族は35年後の今も慰霊登山を続ける。「“カイロス”が生活者の“クロノス”と衝突し、拒絶される」という日常の出来事が、親しい者の死を通して、「“カイロス”（真実の時）の意味を求め続ける」時に変わっていくことも事実である。だから私たちは、御言葉が聞かれても聞かれなくても伝道する。

**3. 神のものは神へ**
・ファリサイ派とヘロデ派が共同で、イエスに納税論争を持ちかけた。植民地であるユダヤはローマ皇帝に税を納めることを義務づけられていた。それは神を信じないローマ人の支配に服することであり、屈辱的な出来事として、ユダヤ教徒の間に強い反対があった。彼らはイエスを窮地に追い込もうとして、皇帝に税を納めるのは、「律法に適うか、適わないか」と問いかけてきた。
ーマタイ22：15ー17「それから、ファリサイ派の人々は出て行って、どのようにしてイエスの言葉じりをとらえて、罠にかけようかと相談した。そして、その弟子たちをヘロデ派の人々と一緒にイエスのところに遣わして尋ねさせた。『先生、私たちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれをもはばからない方であるのを知っています。人々を分け隔てなさらないからです。ところで、どうお思いでしょうか。お教えください。皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか。適っていないでしょうか』」。

・イエスは彼らに、当時流通していたローマの貨幣であるデナリオン銀貨を出させ、銀貨の肖像と銘は誰かと尋ねた。彼らが「ローマ皇帝です」と答えると、イエスは「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」と答えられた。ユダヤがローマの政治的・経済的支配下にあるならばそれに従えばよいとイエスは言われた。
ーマタイ 22：18－22「イエスは彼らの悪意に気づいて言われた。『偽善者たち、なぜ私を試そうとするのか。税金に納めるお金を見せなさい』。彼らがデナリオン銀貨を持って来ると、イエスは『これはだれの肖像と銘か』と言われた。彼らは『皇帝のものです』と言った。すると、イエスは言われた。『では、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい』。彼らはこれを聞いて驚き、イエスをその場に残して立ち去った」。
・皇帝の支配下にあるならば皇帝のものは皇帝に返すのが当然だとイエスは言われ（「皇帝のものは皇帝に返しなさい」）。しかし「神のものは神に返せ」と付け加えられた。信仰の本質にかかわる出来事（神のもの）と本質ではない出来事（皇帝のもの）を区別し、本質でない出来事については世に従いなさいとイエスは言われた。初代教会はこのイエスの言葉を基礎に、税や貢物を国家に納めるべきかを議論し、市民としての義務を果たせと教えた。
ーローマ 13：1-7「人は皆、上に立つ権威に従うべきです・・・すべての人々に対して自分の義務を果たしなさい。貢を納めるべき人には貢を納め、税を納めるべき人には税を納め、恐るべき人は恐れ、敬うべき人は敬いなさい」。
・しかし同時に「世に倣ってはいけない・・・何が神の御心であり、何が良いことで、神に喜ばれ、また完全であるかをわきまえなさい」（12：2）とパウロは語る。熱狂的に反ローマを推進したファリサイ人らは紀元 70 年のユダヤ戦争により滅んで行くが、教会は生き残った。その間の経緯を聖書学者は説明する。
ー須藤伊知郎・新約聖書解釈の手引きから「マタイの共同体はイエスの語録資料（Q文書）を携えて紀元後 30-70 年ごろにイスラエル本国でユダヤ人伝道を行っていた人々である。この人々は 66-70 年に起こった第一次ユダヤ戦争の際、非戦の立場を貫いたために、同胞のユダヤ人たちから敵国ローマの協力者とみなされて迫害され、そこでの宣教活動に挫折して、失意のうちに戦争難民となり、北方のシリアに逃れていったものと思われる。この人々がシリアに入ってマルコ福音書を所有していたグループと出会い、新しい共同体を創った。それがマタイの教会で、彼はこの教会のためにマルコ福音書とQ文書を組みあわせた新しい福音書を編集した」。

**47. マタイ 22：23－40、復活問答と最も大事な戒め**
**1. 復活についての問答**
・当時のユダヤ教では、中産階級を代表する律法学者やパリサイ派の人々は、人は死んでも魂が残り、終末の時に復活して、新しい体を与えられると考えていたが、サドカイ派と呼ばれる祭司や富裕層の人々は、死後の命や復活などはないと言っていた。金持ちで豊かな人々は現在に満足し、保守的になり、現実主義的になる。そのサドカイ派の人々が復活がないことを示すため、「レヴィラート婚」についてイエスへ質問した。ユダヤでは、「兄が子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の後継ぎをもうけねばならない」（申命記 25：5-10）と規定されていた。家系を絶やさないための規定であった。
ーマタイ 22：23－27「その同じ日、復活はないと言っているサドカイ派の人々が、イエスに近寄って来て尋ねた『先生、モーセは言っています。ある人が子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならないと。さて、私たちのところに、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが死に、跡継ぎがなかったので、その妻を弟に残しました。次男も三男も、ついに七人とも同じようになりました。最後に女も死にました。すると復活の時、その女は七人のうちのだれの妻になるのでしょうか。皆その女を妻にしたのです』」。
・復活問答は、つきつめて言えば、「死後の世界はあるのか」という問題になる。サドカイ派の人々は、死んだ後には何もない、生きている間だけが全てだと考えている。イエスは、この主張に対して、「あなたたちは聖書も神の力も知らないから、思い違いをしている」と言われた。
ーマタイ 22：29－30「イエスはお答えになった。『あなたたちは聖書も神の力も知らないから思い違いをしている。復活の時には、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ』」。
・イエスは「復活の時には、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになる」と言われた。地上における人間関係が、そのまま天に持ち込まれるわけではない。死後の歩みや復活を、この世の人生の延長として考えるなということだ。私たちは死んだ後を、この世の人生の延長で考えようとするから、「亡くなった人と天国で再会する」と考え勝ちだが、イエスは、それは思い違いだと言われている。

ーマタイ 22：30-33「死者の復活については、神があなたたちについて言われた言葉を読んだことがないのか。私はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神であるとあるではないか。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である』。群衆はこれを聞いて、イエスの教えに驚いた」。
・「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」とは、出エジプト記で神がモーセに自己を啓示された時に言われた言葉だ。「アブラハム、イサク、ヤコブというあなたたちの先祖の一人一人の名を呼んで、彼らの神として、共に歩んできた私が、今あなたモーセと共に歩む」と言われ、モーセを通して、エジプトで奴隷として苦しむイスラエルの民を救い出し、彼らを約束の地に導きいれると約束された。「アブラハムに為された約束がモーセを通して実現したではないか。アブラハムを愛し、モーセを導いた神が、今私たちを生かして下さるとしたら、分りもしない死後のことを議論するよりも、神に委ねれば良いではないか」とイエスは言われている。

**2. 私たちはこの問答をどう聞くのか**
・神は「死んだ者の神ではなく、生きている者の神」であり、今をどう生きるべきかを求め、「死後のことは神に委ねよ」とイエスは言われる。聖書が唯一語る死後の命は、「イエス・キリストが復活されたのだから、あなた方も復活する」ということだ。その時、身体はどうなるのか。日本では死ねば火葬されるが、欧米の主流は土葬である。彼らは「遺体を焼くと身体の復活を妨げる」という考え方で土葬する。フランスではカトリック信者が多く火葬率は 30%と低い。イギリスは異例で火葬率が 73%と高いが、プロテスタントが多いためと土地不足のためだ。アメリカもプロテスタントは多いが、広い土地があるため、火葬率は 40%と低い。
・パスカルはパンセの中で語る「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、哲学者の神にあらず、イエス・キリストの神、わが神にして汝らの神」。パスカルは物理学者、数学者だが、31 歳の時に回心を経験し、その回心体験を述べた言葉が、「哲学者の神にあらず、イエス・キリストの神」と言う言葉だ。彼は数学者だから物事を理性で突き詰めて考えていくが、神の存在はいくら考えてもわからない、だから「哲学者の神ではない」。彼は言う「人間は自分が経験した事しか理解できない」。それに気づいた時、彼はかってアブラハムやイサムを導き、イエスを死からよみがえらせた方が、今自分を生かして下さる「わが神」であるとの秘儀を体験した。私たちは、明日が来ると信じるゆえに、今日を生きることができるが、いつか「明日」が来ない「今日」が来る。その時、自分の命を神に委ねることのできる人は幸せだ。その幸せは 100 歳まで長生きすることよりも、この世で栄誉を極めることよりも価値がある。世と世の出来事は過ぎ去る。私たちはキリストの復活を信じる故に、自分の命を最後には神に委ねることができる。過ぎ去らない命を神からいただいた。それだけで私たちの人生は十分ではないか。

**3. 最も重要な掟**
・サドカイ派がイエスに言い込められたと聞いたファリサイ派の律法学者が、イエスを試そうと近付いた。彼らは「律法の中でどの掟が重要か」とイエスに質問した。当時ユダヤの律法はなすべき命令が 248、禁止命令が 365、合計 613 もあり、「どれが最も大事か」に答えるのは難しいと思われた。
ーマタイ 22：34ー36「ファリサイ派の人々は、イエスがサドカイ派の人々を言い込めたと聞き、集まって来た。そのうちの一人、律法の専門家が、イエスを試そうとして尋ねた『先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか』」。
・イエスは第一の教えとして「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽して、あなたの神を愛しなさい。」（申命記 4：6）をあげ、続いて第二の教えとして「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。」（レビ記 19：18ｂ）をあげた。
ーマタイ 22：37ー40「イエスは言われた。『心を尽し、精神を尽し、思いを尽して、あなたの神である主を愛しなさい。これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。隣人を自分と同じように愛しなさい。律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている』」。
・このイエスの教えはパウロに継承されている。キリスト教徒にとって隣人を愛する事こそ信仰の中核である。ある注解者は述べる「私たちが自分自身に寛容であり、時間を割き、関心を持ち、自分自身のために言い訳をし、深く自分の幸せを願っている。それと同じ仕方で隣人にもそのような態度を取りなさい」（L. ウィリアムソン、マルコ福音書注解、 p365）。
ーローマ 13:8-10「互いに愛し合うことのほかは、だれに対しても借りがあってはなりません。人を愛する者は、律法を全うしているのです。『姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな』、そのほかどんな掟があっ

ても、『隣人を自分のように愛しなさい』という言葉に要約されます。愛は隣人に悪を行いません。だから、愛は律法を全うするものです」。

**4. 善きサマリア人の譬えを同時に読む**

・並行記事のルカ 10 章ではこの問答に続いて「良きサマリア人の喩え」が語られている。強盗に襲われた旅人を律法に精通しているはずの祭司やレビ人が関り合いになるのを嫌がり助けなかったが、異邦人であるサマリア人だけが助けたという譬えだ。譬えを通してイエスは、「聞くだけではなく、行う」ことの大事さを教えられた。

ールカ 10:36-37「『さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか』。律法の専門家は言った。『その人を助けた人です』。そこで、イエスは言われた『行って、あなたも同じようにしなさい』」。

・自然のままの私たちは、本当の意味では人を愛することは出来ない。しかし、私たちがかつて傷つき倒れていた時に、イエスが通りかかり、私の傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで介抱してくれ、イエスはその行為のために強盗に襲われて死なれた。イエスが命をかけて私を救ってくださった体験をした時、私たちは「良きサマリア人とはイエスなのだ。イエスは、危険を顧みず私を介抱してくれた」ことを知る。そして、「自分を愛するようにあなたの隣人を愛しなさい」とは、「イエスが私を愛したように、あなたも隣人を愛しなさい」という意味であることがわかってくる。

・ルカ福音書のイエスは律法学者に言われる「聞くだけではなく行いなさい」（ルカ 10：28）。「あなたの目の前にいる人はみな私なのだ。誰かが引きこもって苦しんでいる時、私が苦しんでいるのだ。母親が子供の発育を心配して悩んでいる時、私が悩んでいるのだ。私はあなたの助けを必要としている」。私たちの目の前にいる一人一人こそ、イエスなのだとして受け入れる時、彼らの問題を私自身の問題とした時、私たちは神の国に入って行く。信仰は応答を、応答は行為を伴う。

ーマタイ 7：12「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である」。

**48. マタイ 23：1ー28、律法学者とファリサイ派の人々へ批判**

**1. 律法学者やファリサイ人の行いは見倣うな**

・マタイは 23 章で激しいファリサイ派批判を行うが、マルコやルカに比し、批判の分量は多く、言葉も厳しい。紀元 70 年の神殿崩壊に伴い、祭司階級は消滅し、ユダヤ教はファリサイ派中心の律法共同体になって行き、マタイ教会を始めとするクリスチャンたちは激しく迫害されていた。23 章のファリサイ派批判も 70 年以降の情勢を反映しているとみる必要がある。

ーヨハネ 9:22「両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちを恐れていたからである。ユダヤ人たちは既に、イエスをメシアであると公に言い表す者がいれば、会堂から追放すると決めていたのである」。

・律法（モーセ五書）は前五世紀に捕囚地バビロンで完成するが、時代の変化に応じた解釈が求められ、律法学者（大半はファリサイ派）は再解釈を行い、ファリサイ派は厳格な律法厳守を人々に求めていた。律法学者たちとファリサイ派は「モーセの座につき」、モーセの律法を研究し、民衆に教えていた。イエスは彼らの言説の正しさは認められたが、彼らはそれを実行しない。だから「行いは見倣うな」と言われる。

ーマタイ 23：1ー3「イエスは群衆と弟子たちにお話しになった。『律法学者たちやファリサイ派の人々はモーセの座についている。だから、彼らが言うことは、すべて行い、また守りなさい。ただし、彼らの行いは、見倣ってはならない。言うだけで実行しないからである』」。

・ファリサイ派は、成文律法と同時に、解釈の積み重ねである口伝律法にも権威を認めていた。そのため律法の数は膨大になり、民にとっては背負い切れない重荷になっていた。しかも、彼ら自身は命令するだけで、律法を守れない人々を助けようともしなかった。

―マタイ 23：4「『彼らは背負いきれない重荷をまとめ、人の肩に載せるが、自分ではそれを動かすために、指一本貸そうとしない』」。

・イエスが「私の軛は負いやすく、私の荷は軽い」と教えているのは、律法の重荷のことであろう。イエスは律法の本質を「神を愛し、隣人を愛す」ことだと言われ、律法の細部を守れとは言われなかった。

ーマタイ 11:28-30「疲れた者、重荷を負う者は、だれでも私の元に来なさい。休ませてあげよう。私は柔和で謙遜な者だから、私の軛を負い、私に学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。私の軛は負いやすく、私の荷は軽いからである」。

・ファリサイ人は「聖句の入った小箱を常に身につけていた」。彼らは自身が律法に忠実であることを民衆に見せるために、聖句の入った箱を目立つようにし、衣の房を長くした。また彼らは宴会や会堂で上席に座ることを欲し、広場で、先生と呼ばれることを欲した。彼らは人からの名誉を求めた。
ーマタイ 23：5-7「そのすることは、すべて人に見せるためであり、聖句の入った小箱を大きくしたり、衣服の房を長くしたりする。宴会では上座に、会堂では上席に座ることを好み、また、広場で挨拶されたり、「先生（ラビ、大いなる者）」と呼ばれたりすることを好む」。
・イエスは律法学者たちを批判すると同時に、弟子たちも戒められる。「あなたたちの間で「先生」「父」「教師」の尊称で呼びあってはならない」と。「父」は「天の父お一人」だけであり、「教師（ラビ）」は「キリスト一人」だけである。あなたがた弟子たちは互いに兄弟と呼びあうべきである。共同体の中で序列争いをしていた当時の教会に対するマタイの警告がここに反映している。
ーマタイ 23：8－12「だが、あなたがたは『先生（ラビ）』と呼ばれてはならない。あなたがたの師は一人だけで後は皆兄弟なのだ。また、地上の者を『父』と呼んではならない。あなたがたの父は天の父お一人だけだ。『教師』と呼ばれてもいけない。あなたがたの教師はキリスト一人だけである。あなたがたのうちでいちばん偉い人は、仕える者になりなさい。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」。

**2. あなたたち偽善者は不幸だ**
・イエスは「律法学者とファリサイ人は人々の前で天の国を閉ざす」と非難している。マタイ教会はユダヤ教から激しい攻撃を受けていたため、ファリサイ人に対する批判は厳しい。
ーマタイ 23：13－15「律法学者とファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。人々の前で天の国を閉ざすからだ。自分が入らないばかりか、入ろうとする人も入らせない。律法学者とファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。改宗者を一人つくろうとして海と陸を巡り歩くが、改宗者ができると、自分より倍も悪い地獄の子にしてしまうからだ」。
・イエスは「誓ってはならない」と戒められたが、それは約束した言葉の信頼を失わせないためであった。ファリサイ派は誓いをかける対象で、誓いの価値が左右されると考えていた。イエスはそれを批判される。23 章 16 節以下は、マルコやルカにはない、マタイの特殊資料に基づく批判である。
ーマタイ 23：16－17「ものの見えない案内人、あなたたちは不幸だ。あなたたちは、『神殿にかけて誓えば、その誓いは無効である。だが、神殿の黄金にかけて誓えば、それは果たさねばならない』と言う。愚かでものの見えない者たち、黄金と、黄金を清める神殿と、どちらが尊いか」。
・イエスは、彼らの教えがいかに形式主義に堕しているかを鋭く批判される。
ーマタイ 23：18-22「また、『祭壇にかけて誓えば、その誓いは無効である。その供え物にかけて誓えば、それは果たさねばならない』と言う。ものの見えない者たち、供え物と、供え物を清くする祭壇と、どちらが尊いか。祭壇にかけて誓う者は、祭壇とその上のものにかけて誓うのだ。神殿にかけて誓う者は、神殿とその中に住んでおられる方にかけて誓うのだ。天にかけて誓う者は、神の玉座とそれに座っておられる方にかけて誓うのだ。」

**3. 偽善に気づかない律法学者やファリサイ人**
・律法学者やファリサイ人たちは決められた教えは厳格に守り、十分の一税納付もきちんと行っていた。地の産物の十分の一を、神への献げ物として神殿に納めることは、律法に定められていた（申命記 14：22）。ユダヤ教指導者は、小義にこだわり、大義を忘れていた。薄荷、いのんど、茴香（ういきょう）などは、農家の庭先などでごく少量栽培されるだけの食材であり、薬材だ。イエスは彼らが「小さなブヨは漉しても、大きなラクダは呑みこんでいる」と批判された。彼らは些末なことに拘り、律法の中で最も重要な「義と憐れみと真実」をないがしろにしていると批判されている。
ーマタイ 23：23－24「律法学者とファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。薄荷、いのんど、茴香（ういきょう）の十分の一は献げるが、律法の中で最も重要な、正義、慈悲、誠実はないがしろにしている。これこそ行うべきことである。もとより、十分の一の献げ物もないがしろにしてはならない。ものの見えない案内人、あなたたちは、ぶよ一匹さえも漉して除くが、らくだは飲み込んでいる。」
・イエスはさらに、器の譬えでユダヤ教指導者の偽善を追及された。杯や皿の外側を、いくら綺麗に洗い清めても、内側を洗い清めなければ、その杯や皿を本当に清めたとは言えない。同じようにユダヤ教指導者たちは、表面だけ律法を守っているように見せかけているが、内心は強欲と放縦に満ちていた。
ーマタイ 23：25－26「律法学者とファリサイの人々、あなたたち偽善者は不幸だ。杯や皿の外側はきれいに

するが、内側は強欲と放縦で満ちているからだ。ものの見えないファリサイ派の人々、まず杯の内側をきれいにせよ。そうすれば、外側もきれいになる。」
・ユダヤ人は死体や墓に触れると汚れると信じていた（民数記 5：6）。ユダヤ人の墓の多くは路傍にあったが、墓に触れると汚れるので、人々に気付かせるよう墓を白く塗った。白く塗られた墓は外目に美しく見えても、その中には汚れた骨がある。ユダヤ教指導者の実体はこの墓のように、外見は信心深く清く見えるが、その心の中は罪に汚れているとイエスは指摘された。
ーマタイ 23：27－28「律法学者とファリサイ派の人々、あばたたち偽善者は不幸だ。白く塗った墓に似ているからだ。外側は美しく見えるが、内側は死者の骨やあらゆる汚れで満ちている。このようにあなたたちも、外側は人に正しいように見えながら、内側は偽善と不法で満ちている。」
・信仰生活をしている者にとって、「偽善」という言葉ほど胸に深く突きる言葉はない。信仰者は自分が偽善者であることを知っている。しかし、律法学者やファリサイ人の問題は、彼らが自分たちの偽善に気付いていない点である。だからイエスは反対命題を出されて、人がいかに律法を守ることが出来ないかを示された。誰でも右の頬を打たれたら打ち返すし、敵を憎むなと言われても出来ないのだ。
ーマタイ 5:38-44「あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、私は言っておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい・・・あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、私は言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」。
・そこにパウロが指摘する「律法の限界と福音の意味」が見えてくる。人は律法を守ることによっては救われない。なぜならば守りきることが出来ないからだ。だからこそ十字架の贖いが必要なのである。
ーローマ 3:20-22「律法を実行することによっては、だれ一人神の前で義とされないからです。律法によっては、罪の自覚しか生じないのです。ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません」。

**49. マタイ 23：29－39、義人の殺害**
**1. 蝮の子と批判されるファリサイ人たち**
・マタイは 23 章前半でファリサイ人らの罪を列記し、後半ではその締めくくりとして預言者殺害の歴史を記す。ファリサイ人たちは預言者の墓を建て、義人の碑を祭ったが、それが自己欺瞞だと告発される。歴代の預言者は王の悪政を批判し、それに追随する宗教者の欺瞞を告発した。ユダヤの歴史は預言者や義人の血を流した歴史である（イザヤはのこぎりで首を引かれ、エレミヤは石打ちの刑で殺された）。
ーヘブル 11：37-38「彼らは石で打ち殺され、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、羊の皮や山羊の皮を着て放浪し、暮らしに事欠き、苦しめられ、虐待され、荒れ野、山、岩穴、地の割れ目をさまよい歩きました。世は彼らにふさわしくなかったのです」。
・律法学者やファリサイ人は殉教者の墓を建て、記念碑を飾りたてた。しかし、イエスは彼らに言われた「あなたたちこそ、預言者を殺した者の子孫であり、先祖の悪事の仕上げをしている」と。
ーマタイ 23:29－32「律法学者とファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。預言者の墓を建てたり、正しい人の記念碑を飾ったりしているからだ。そして、『もし、先祖の時代に生きていても、預言者の血を流す側にはつかなかったであろう』などと言う。こうして、自分が預言者を殺した者の子孫であることを自ら証明している。先祖が始めた悪事の仕上げをしたらどうだ。」
・イエスはユダヤ教指導者を「蝮の子らよ」と呼び、「地獄の罰を免れない」と宣言したとマタイは記す。彼らが地獄の罰を免れないのは、遣わされた預言者、知者、学者らを迫害し、会堂で鞭打ち、殺した報いである。そして今、神から遣わされたイエスを殺そうとしている（先祖が始めた悪事の仕上げをする）。
ーマタイ 23：33「蛇よ、蝮の子らよ。どうしてあなたたちは地獄の罰を免れることができようか」。
・次の 34 節は復活された主が派遣された福音の伝道者たちを、ファリサイ派の人たちが迫害する出来事を告発している。イエスの弟子たちは、異端とされ、各地で激しい迫害を受けた。当然にイエスの言葉というよりもマタイ教会の弾劾の言葉であろう。
ーマタイ 23：34「だから、私は預言者、知者、学者をあなたたちに遣わすが、あなたたちはその中のある者を殺し、十字架につけ、ある者を会堂で鞭打ち、町から町へと追い回して迫害する。」
・35 節以下では、「アベルからゼカルヤに至るまで正しい人の血が流された」と指摘される。アベルはカインにより殺され、ゼカルヤは祭司長たちから殺されている（歴代誌下 24：20－22）。「その血の責任はすべて

今の時代の者にふりかかる」、ユダヤ戦争によるエルサレム滅亡は、預言者たちを殺し続け、最後はメシアたるキリストを殺したユダヤ人の罪の故だとマタイは主張する。
ーマタイ 23：35－36「こうして、正しい人アベルの血から、あなたたちが聖所と祭壇の間で殺したバラキヤの子ゼカルヤの血に至るまで、地上に流された正しい人の血はすべてあなたたちにふりかかってくる、はっきり言っておく。これらのことの結果はすべて、今の時代の者たちにふりかかってくる。」
・イエスはユダヤ教指導者を「蝮の子らよ」（23：34）と呼び、「地獄の罰を免れない」と宣言したとマタイは記すが、この言葉はイエスに由来するのであろうか。蝮の子らよという言葉はサタンの一族との意味であり、最終的断罪の言葉である。十字架上で、「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」（ルカ 23：34）と言われたイエスの言葉と真っ向から対立する。おそらくはユダヤ教会からの迫害の中にあった初代教会の呪詛の言葉であろうと市川喜一は語る。
ー市川喜一著作集から「キリスト教の歴史の中で長らく、神の言葉である聖書（新約聖書）がユダヤ教を断罪しているのであるから、ユダヤ教徒（ユダヤ人）は呪われた者であり、キリスト教徒の交わりに入ってはならない、という考え方が底流となって、キリスト教世界におけるユダヤ人迫害が行われた。聖書の文言はあくまで、その言葉が出てきた歴史的状況に置いて、問われなければならない」。

**2. イエスがエルサレムのために嘆く**
・エルサレムは、神が遣わす預言者を受け入れず殺し、悔い改めなかった。神はエルサレムを見捨てず、イエスを遣わし、限りない忍耐をもってエルサレムの回心を待たれた。しかし、エルサレムは神の求めに応じようとしなかった。イエスは言われた「私は何度もあなたたちを救おうとしたが、あなたたちは応じようともしなかった。この後、エルサレムは荒れ果てるであろう」と。
ーマタイ 23：37－38「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ。めん鳥が雛を羽の下に集めるように、私はお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。見よ、お前たちの家は見捨てられて荒れ果てる」。
・しかし滅亡預言の後には回復が預言される。終わりの日にはユダヤ人も再び神の民になるであろうと。イエスは決してユダヤ人たちを見捨てられなかった。
ーマタイ 23：39「言っておくが、お前たちは、『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と言うときまで、今から後、決して私を見ることがない」。
・パウロも、「ユダヤ人は一旦捨てられたが、やがて救済される」との希望を述べる。
ーローマ 11:25-27「次のような秘められた計画をぜひ知ってもらいたい。すなわち、一部のイスラエル人がかたくなになったのは、異邦人全体が救いに達するまでであり、こうして全イスラエルが救われるということです。次のように書いてある通りです。『救う方がシオンから来て、ヤコブから不信心を遠ざける』。これこそ、私が、彼らの罪を取り除く時に、彼らと結ぶ私の契約である。」

**3. マタイ 23 章をどのように読むか（市川喜一著作集から）**
・紀元 70 年のエルサレム神殿崩壊後のマタイの時代には、祭司階級や他の派は消滅し、ファリサイ派だけが神殿なき後のユダヤ教の再建を担っていた。最高法院に代わってユダヤ教を指導した律法学者たちはみなファリサイ派だった。そのため、マタイにおいては「律法学者とファリサイ派」はいつも一組で現れ、一体として扱われる。この時代に彼らは、イエスを信じるユダヤ人キリスト者を異端として追求するようになり、公式の祈りにその絶滅を祈る言葉を加えるに至った。このユダヤ教会堂からのキリスト者迫害に対して、マタイも激しい言葉で対抗する。マタイは自分たちに対立し、迫害するユダヤ教会堂の代表者たるファリサイ人に対して、伝えられた語録を集め、さらに激しい文言を書き加えて、この律法学者・ファリサイ派弾劾の語録集（23 章）を形成した。
・エルサレム神殿の崩壊は、教団の側では、イエスを殺したことに対する神の裁きと理解され、ユダヤ教指導層は神に断罪されたのだという確信になっていく。そして、ユダヤ教会堂がイエスを信じる者を公式に異端としたことは、マタイの共同体などユダヤ人キリスト教徒が、会堂とは一切の関わりを断ち、外に出て行かざるをえないようにした。このような状況がマタイにファリサイ派断罪語録集を造らせた。
・マタイ 23 章は、イエスをメシアと信じるユダヤ人キリスト者と、その信仰を異端とするユダヤ教指導者との間の論争集であり、マタイ教会がユダヤ教徒を「地獄の子」と断定したからといって、ユダヤ教の外にいる者がユダヤ教徒全体を「地獄の子」と断罪することは、大きな筋違いである。歴史的状況を捨象して、書かれた言葉だけを絶対化すると間違いを犯しかねない（ファンダメンタリズムの誤り）。私たちが学問的

成果を尊重しながら、聖書解釈を追求しているのもこのためである。

**50. マタイ 24：1－28、神殿崩壊と終末を予告する**

**1. 神殿崩壊予告**

・イエスは 23 章でエルサレムの崩壊を預言された。

ーマタイ 23:37-38「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、私はお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。見よ、お前たちの家は見捨てられて荒れ果てる」。

・24 章はそのイエスの言葉を軸にした初代教会の終末預言の記事である。弟子たちはイエスの神殿崩壊預言に驚愕する。イエスは弟子たちに「どの石の一つも崩れずに、他の石の上に残ることがない」と、神殿崩壊を預言された。

ーマタイ 24：1－2「イエスが神殿の境内を出て行かれると、弟子たちが近寄って来て、イエスに神殿の建物を指さした。そこでイエスは言われた。『これらすべての物を見ないのか。はっきり言っておく。一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない。』」

・神殿は紀元 70 年にローマ軍によって破壊され、ユダヤは滅ぶ。紀元 80 年代に書かれたマタイ福音書は神殿崩壊と国の滅亡を知っており、「世の終りは来た」と考える教会の人々に、「まだ世の終わりではない」とのメッセージを伝える。「世の終わり」には「イエスが再臨される」と教会は信じていた。

ーマタイ 24：3－5「イエスがオリーブ山で座っておられると、弟子たちがやって来て、ひそかに言った。『おっしゃってください。そのことはいつ起こるのですか。また、あなたが来られて世の終わる時には、どんな徴があるのですか。』イエスはお答えになった。『人に惑わされないように気をつけなさい。私の名を名乗る者が多勢現れ、「私がメシアだ」と言って、多くの人を惑わすだろう。』」

・マタイはイエスの言葉を続ける「戦争は必ず起こるだろう。そして戦争の噂は人々の不安をかき立て騒ぎが起きるだろう。しかし、戦争が起こっても、まだ世の終わりではない」と。

ーマタイ 24：6「『戦争の騒ぎや戦争のうわさを聞くだろうが、慌てないように気をつけなさい。そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない。』」

・民族間の紛争や戦争が起こり、飢饉や地震まで起こる。世の終りとしか思えない出来事が次々に起こる。しかし、それらはまだ産みの苦しみの始まりに過ぎない。

ーマタイ 24：7－8「『民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に飢饉や地震が起こる。しかし、これらはすべて産みの苦しみの始まりである。』」

・神殿崩壊後、ユダヤ教徒はキリスト者を会堂の集まりから追放した。キリスト者は社会から村八分にされ、迫害された。「信徒はすべての民に憎まれる。憎しみに耐えられず、信仰を捨てる者が出る」との言葉はユダヤ戦争後の教会の実態を背景にしている。

ーマタイ 24：9－10「『その時、あなたがたは苦しみを受け、殺される。また、私の名のために、あなたがたはあらゆる民に憎まれる。そのとき、多くの人がつまずき、互いに裏切り、憎み合うようになる。』」

・その時、偽預言者たちが現れる。彼らは神から遣わされた者ではないのに、それらしく自らを装い、偽りの教えを広める。

ーマタイ 24：11「『偽預言者も大勢現れ、多くの人を惑わす。』」

・人々がお互いを信頼せず、愛がなくなる時が来る。しかし、試練を耐え忍ぶ者は救われる。そして、耐え忍び切った者が、福音の証し人となるとマタイは信徒を励ます。

ーマタイ 24：13－14「『不法がはびこるので、多くの人の愛が冷える。しかし最後まで耐え忍ぶ者は救われる。そして、御国の福音はあらゆる民への証しとして、全世界に宣べ伝えられる。それから終りが来る。』」

・マタイの教会は、ユダヤ戦争時に祖国を追われ、シリアに逃れたと見られている。彼らはキリスト者への迫害、戦争、神殿崩壊、飢饉等、世の終わりとされる出来事を文字通りに体験した。西南学院・須藤伊知郎氏は、分析する。

ー須藤伊知郎「新約聖書解釈の手引き」から「マタイ共同体はおそらくユダヤ人キリスト者とその後増え始めた異邦人キリスト者からなる混成の教会であり、前者の中核はイエスの語録資料を携えて紀元後 30－70 年ごろにイスラエル本国でユダヤ人伝道を行っていた人々である。この人々は 66-70 年に起こった第一次ユダヤ戦争で、非戦の立場を貫いたために、同胞のユダヤ人たちから敵国ローマの協力者とみなされて迫害され、ユダヤでの宣教活動に挫折して、失意のうちに戦争難民となり、北方のシリアに逃れていった」。

ー「ユダヤ戦争を生き延びたマタイ教会の中心メンバーは、その破局を透徹した信仰の目で、偏狭な自民族

中心主義（ユダヤ人国粋主義者）と、軍事力で覇を唱えようとする帝国主義(ローマ帝国)の破綻を捕らえている。『平和を実現する人々は、幸いである』、『剣を取る者は皆、剣で滅びる』等のイエスの言葉を伝えたのは、帝国の支配に痛めつけられた戦争難民たちであった。マタイ共同体の人々は、戦争はもう二度としないと誓い、敵を愛し迫害する者のために祈ること、これこそが平和を実践し、創っていく唯一の現実的な道であると信じ、行動していたのである」。
・マタイ共同体の決心「戦争はもう二度としない、敵を愛し迫害する者のために祈る、これこそが平和を実践し、創っていく唯一の現実的な道である」の中に、「戦争はもうしない」、「武器はもう捨てる」として憲法9条を起案した日本の父祖たちと同じ息吹がある。

**2. 終末予告**
・15節は、ダニエル9章、12章の記事による終末預言だ。ダニエル書が語る「荒らす憎むべき者」はユダを支配し、神殿を汚したシリア王アンティオコス四世（前175－164年）の迫害を示す。ここでマタイは新しい圧制者ローマが同じように神殿を汚し、破壊したことをダニエル預言の成就として描く
ーマタイ24:15「『預言者ダニエルの言った憎むべき破壊者が聖なる場所に立つのを見たら、読者は悟れ』」。
・「敵が来た時は山へ逃げよ」、「屋上にいた者はそのまま逃げよ」、「畑にいる者も上着を取りに帰るな」、戦争の嵐の中で、事態は切迫している。太平洋戦争末期、空襲の中で逃げ惑う日本のキリスト者たちも、これらの言葉を自分たちの出来事として受け止めたかもしれない。
ーマタイ24：16－20「『そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。屋上にいる者は、家にある物を取り出そうとして下に降りてはならない。畑にいる者は、上着を取りに帰ってはならない。それらの日には、身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸だ。逃げるのが冬や安息日にならないように、祈りなさい。』」
・襲って来る苦難は未曾有の苦難である。神がその期間を短くしてくださらなければ全滅しかない。しかし、神はその期間を短くしてくださる。だから、希望を持て。
―マタイ24：21－22「『そのときには、世界の初めから今までなく、今後も決してないほどの大きな苦難が来るからである。神がその期間を縮めてくださらなければ、だれ一人救われない。しかし、神は選ばれた人のために、その期間を縮めてくださるであろう。』
・混乱の中で偽メシアや偽預言者が出て来るが、従うな。今日の異端の教説も同じ動きの中にある。
ーマタイ24：23－28「『そのとき、「見よ、ここにメシアがいる」「いや、ここだ」と言う者がいても、信じてはならない。偽メシアや預言者が現れて、大きなしるしや不思議な業を行い、選ばれた人たちをも惑わそうとするからである。あなたがたには前もって言っておく。だから、人が、「メシアは荒れ野にいる」と言っても、行ってはならない。また、「見よ、奥の部屋にいる」と言っても信じてはならない。稲妻が東から西へひらめき渡るように、人の子も来るからである。死体のあるところにははげ鷹が集まるものだ。』」

**3. 私たちは聖書の終末預言をどのように読むか**
・初代教会の人々は、自分たちが生きている間に終末が来て、神の国が来ると期待していた。しかし、神殿が滅び、国が亡くなっても、終末は来ない。キリスト再臨の遅延が次第に教会の課題になり始めた。紀元150年ころに書かれた第二ペテロは終末の遅延が課題として描かれる。
ー第二ペトロ3：8－9「愛する人たち、このことだけは忘れないでほしい。主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせているのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。」
・マタイ24章はマルコ13章「小黙示録」を基本に書かれている。マルコ福音書は70年頃に書かれ、ユダヤ戦争は最終段階にあり、エルサレムはローマ軍に包囲されていた。しかし、マタイはエルサレム神殿が崩壊してから十数年経ったころに福音書を書いている。世の終わりであると見られていた神殿が崩壊しても、「神の国の到来」はなく、世界はそのまま存続し、悪しき者（異教徒ローマ）が支配する旧い時代が続いている。信徒の群れは、その歴史の中を歩む。その時、大切なことは、「キリスト来臨」の待望を失うことなく、いつ起こるか分からないという緊迫感を持っていること（目を覚ましていること）が求められる。
ーマルコ13:13「私の名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。」

**51. マタイ24：29－51、世の終わりをどう理解するか**

1. 終末の始まりと再臨
・イエスの時代、人々は終末と神の国を待望していた。国は異邦人に支配され、生活は苦しく、現在に希望が持てず、新しい時代が来ることを待ち望んでいた。その中で、イエスの「神の国が来た」という教えは人々を惹きつけた。そのイエスは処刑されたが、復活された。初代教会はイエスの復活を「終末の始まり」と理解し、イエスが自分たちの生きているうちに再臨され、神の国が始まると期待していた。
ーマタイ 24：29－31「その苦難の日々の後、太陽はたちまち暗くなり、月は光を放たず、星は空から落ち、天体は揺り動かされる。そのとき、人の子の徴が天に現れる。そして、そのとき、地上のすべての民族は悲しみ、人の子が大いなる力と栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見る。人の子は大きなラッパの音を合図にその天使たちを遣わす。天使たちは、天の果てから果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める。」
・マタイは終末を迎える時、信徒はどうすべきかを譬えで示す。いちじくの木は 5～6 月頃になると若葉を出し、枝が柔らかくなり、夏が近づいたと分かる。それと同じように、神の国も近づいているとイエスは言われた。マタイはこのイエスの言葉を基本に、終末を前にした信徒たちに、注意深くあれと警告する。初代教会はイエスの再臨は近いと信じていた。
ーマタイ 24：32－35「『いちじくの木から教えを学びなさい。枝が柔らかくなり、葉が伸びると、夏の近づいたことが分かる。それと同じように、あなたがたは、これらすべてのことを見たなら、人の子が戸口に近づいていることを悟りなさい。はっきり言っておく。これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。天地は滅びるが、私の言葉は決して滅びない。』」

2. 目を覚ましていなさい。
・終末の日がいつ来るのかは誰にも分からない。知るのは神のみである。ノアの洪水の時も人々は何も気付かず、飲み食いし、日々の暮らしを続けていた。そこへ洪水が突然やって来た。人の子もそれと同じように突然に来る。神殿は崩壊し、国は滅んだが、終末は来なかった。終末はないと弛緩していた教会の人々に、マタイは「それは必ず来るから備えよ」と警告する。
ーマタイ 24：36－39「『その日、その時は、だれも知らない。ただ、父だけがご存じである。人の子が来るのは、ノアの時と同じだからである。洪水になる前は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた。そして洪水が襲って来て一人残らずさらうまで、何も気がつかなかった。人の子が来る場合も、このようである。』」
・神の裁きは予告もなく突然始まる。畑仕事や臼で穀物を挽く日常の何気ない労働の中に、突然神の国が始まる。二人の男が畑で働いていると一人が連れ去られ、一人はその場に残される。二人の女が、臼で穀物を挽いていると突然、一人は連れ去られ、一人は残される。それが終末の時である。
ーマタイ 24：40－41「『そのとき、畑に二人の男がいれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。二人の女が臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。』」
・だから「目を覚ましていなさい」と言われる。主の来臨が何時あるか分からないからである。夜の闇にまぎれて侵入して来る泥棒のように、人の子は思いがけない時に来る。
ーマタイ 24：42－44「『だから、目を覚ましていなさい。いつの日、自分の主が帰って来られるのか、あなたがたには分からないからである。このことをわきまえていなさい。家の主人は、泥棒が夜のいつごろやって来るかを知っていたら、目を覚ましていて、みすみす自分の家に押し入らせはしないだろう。だから、あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。』」

3. 忠実な僕と悪い僕
・この譬えは、人の子の来臨を迎える時の良い例と悪い例を、主人との約束を果たした僕と果たさなかった僕を譬えとして語る。
ーマタイ 24：45－47「主人がその家の使用人たちの上に立てて、時間通り彼らに食事を与えさせることにした忠実で賢い僕は、一体誰であろうか。主人が帰って来たとき、言われた通りにしているのを見られる僕は幸いである。はっきり言っておくが、主人は彼に全財産を任せるにちがいない。」」
・主人が出かけた後、悪い僕はとんでもない行動に出る。仲間に暴力をふるって追い払い、別の仲間を誘いこんで飲食にふけり、乱れた所へ主人が帰って来て、彼は厳しく罰せられる。この例話は、再臨などないと思い込み、油断する教会の指導者に向けられている。
ーマタイ 24：48－51「『しかし、それが悪い僕で、主人は遅いと思い、仲間を殴り始め、酒飲みどもと一緒

に食べたり飲んだりしているとする。もしそうなら、その僕の主人は予想しない日、思いがけない時に帰って来て、彼を厳しく罰し、偽善者たちと同じ目に遭わせる。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。』」

**4. 終末の喩えを私たちはどのように聞くのか**

・初代教会の人びとは、終末は近いと信じていた。パウロ自身も彼が生きているうちに世の終わりが来ると思っていた。それは歴史の完成であり、喜ばしいとき、パウロは全世界に福音をのべ伝えた時、その時に終末＝イエスの再臨が来るとして、彼はイスパニア伝道を急いだ。

ーローマ 15：22-24「あなたがたのところに何度も行こうと思いながら、妨げられてきました。しかし今は、もうこの地方に働く場所がなく、その上、何年も前からあなたがたのところに行きたいと切望していたので、イスパニアに行くとき、訪ねたいと思います。途中であなたがたに会い、まず、しばらくの間でも、あなたがたと共にいる喜びを味わってから、イスパニアへ向けて送り出してもらいたいのです」。

・諸教会も終末の接近を信じていたが、そのことが様々な思惑を呼んでいた。パウロは諸教会に「落ち着け」と語る。

ー第一テサロニケ 4：14-15「私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずです。私たちは主の御言葉の通りに言いますが、主が再び来られる時まで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません」。

・テサロニケ教会のある人々は、異教徒からの迫害激化の中で、「終末は既に来ている。日常の仕事などしている時などではない」と熱狂し、教会を混乱に巻き込んでいた。パウロは戒める。

ー第二テサロニケ 2：1-2「主イエス・キリストが来られることと、その御許に私たちが集められることについてお願いしたい。霊や言葉によって、あるいは、私たちから書き送られたという手紙によって、主の日は既に来てしまったかのように言う者がいても、すぐに動揺して分別を無くしたり、慌てふためいたりしないでほしい」。

・人々は戦争・地震・飢饉・迫害等の緊急事態に遭遇すると、それを終末の前兆だと考える傾向がある。エホバの証人は 1914 年 10 月を「終わりの日の始まり」と定義し、4 年後の 1918 年に「主の再臨」があると預言していた。第一次世界大戦が 1914 年に始まり、キリスト教徒同士が殺し合いを始め、戦死者は 1600 万人にも達した。またスペイン風邪の大流行で当時の世界人口の三分の一にあたる 5 億人が罹患し、2000 万人を超える人が犠牲になった。まさに「世界の終末」が迫っていると思わざるを得ない出来事を前に、エホバの証人の終末預言が為された。

・終末、世の終わりという考えは日本人にはないが、聖書は歴史には一つの到達点があり、目標があると主張する。それが世の終りの時だ。その聖書が語るのはキリストに希望を置く終末論だ。モルトマンは語る。

ーモルトマン・キリスト教倫理から「キリストの到来によって救いの完成が始まり、キリストと共に未来が既に始まった。私たちがイエスの人生と教え、十字架の死に至る彼の献身と復活を終末論的に理解するならば、私たちは山上の説教における戒めのメシア的解釈を、キリストの死と復活においてこの世における神の国の形成を発見する。神の国の倫理は服従であり、イエスへの服従の倫理は、イエスの未来を先取りする倫理である」。

・「毎日の生活の中で、キリストの言葉に従って生きる」ことが求められている。キリストにある愚者としての生き方だ。彼らは「世の中が悪い、社会が悪いと不平を言うのではなく、自分たちには何が出来るのか、どうすれば、キリストから与えられた恵みに応えることが出来るのかを考える」。彼らによって福音が担われ、私たちにも継承されている。ヤコブはそれを「待ち望みつつ、日毎の仕事に専念する」生き方と教える。

ーヤコブ 4：15「主の御心であれば、生き永らえて、あのことやこのことをしよう」。

**52. マタイ 25：1ー30、「十人のおとめ」の譬え、「タラントン」の譬え**

**1. 「十人のおとめ」の譬え**

・マタイ福音書では 24 章から「終末(世の終わり)」の出来事を描く。最初に神殿崩壊が語られ（24：2)、世の終わりのしるしが語られ（24：15～)、準備をしない者は滅ぶ（24：36～）と警告され、最後に「目を覚ましていなさい」(24：42）と語られ、その文脈の中で「十人の乙女の譬え」が語られている。明らかに「終末をどう迎えるか」が課題となっている。

・「十人の乙女」の譬えは、元来はイエスが「身近に迫った最後の審判に備えて準備しなさい」と弟子たちに語られた譬えであろう。その譬えをマタイは、「天の国の到来、キリストの再臨を迎えるための信徒の心

得」として展開している。婚礼では花嫁の付き添いの乙女たちが花嫁の家の前で灯し火を掲げて花婿を迎え、踊りを演じて歓迎する習慣があった。しかし、灯火はやがて消えてしまうため、予備の油が必要となる。愚かな乙女たちはその灯油の準備を怠っていた。
ーマタイ 25：1ー4「『そこで、天の国は次のようにたとえられる。十人の乙女がそれぞれ灯し火を持って、花婿を迎えに出て行く。そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった。愚かな乙女たちは、灯し火は持っていたが、油の用意はしていなかった。賢い乙女たちは、それぞれの灯し火と一緒に、壺に油を入れて持っていた。』」
・花婿の到着が遅れたのは、キリスト再臨の遅れを表している。マタイ時代の教会は再臨待望の熱意と、それがなかなか来ない焦燥感の中にあった。再臨を待望する者にとって、信仰の火を消すことなく、灯し続けることは重要であった。乙女たちが眠りこんだ真夜中、突然、花婿の到着が告げられ、灯油の用意をしていなかった愚かな乙女たちは、賢い乙女たちに灯油の借用を申し込むが、断られる。
ーマタイ 25：5ー9「花婿の来るのが遅れたので、皆眠気がさして眠りこんでしまった。真夜中に『花婿だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声がした。そこで、乙女たちは皆起きて、それぞれの灯し火を整えた。愚かな乙女たちは、賢い乙女たちに言った。『油を分けてください。私たちの灯し火は消えそうです。』賢い乙女たちは答えた。『分けてあげるほどはありません。それより、店に行って、自分の分を買って来なさい。』」
・愚かな乙女たちは予備の灯油を用意しなかったばかりに、宴会に遅れ、会場から締め出されてしまう。
ーマタイ 25：10ー13「『愚かな乙女たちが買いに行っている間に、花婿が到着して、用意のできている五人は、花婿と一緒に婚宴の席に入り、戸が閉められた。その後で、ほかの乙女たちも来て、『ご主人様、ご主人様、開けてください。』と言った。しかし、主人は、『はっきり言っておく、私はお前たちを知らない。』と答えた。だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。」
・初代教会は、キリスト再臨への強い信仰を持っていた。イエスの復活体験は強烈であり、終末は既に始まり、再臨は近いとの熱意を持ち続けた。それは会堂から排除され、迫害される教会の支えでもあった。「キリストの再臨を待ち望み、聖なる生活を続けなさい」とペトロの手紙は励ましている。
ー第一ペトロ 4：13ー15「だからいつでも心を引き締め、身を慎んで、イエス・キリストが現れる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。無知であったころの欲望に引きずられることなく、従順な子となり、召し出してくださった聖なる方に倣って、あなたがた自身も生活のすべての面で聖なる者となりなさい。」
・しかし終末は来なかった。そのため現代人は終末や再臨の期待を失くしてしまった。2013 年度教員採用適性検査の一項目に「キリストの再臨を信じるか」があったという（2014. 11. 16 毎日新聞）。信じれば「カルト思想の持ち主」と分類されるのだろうか。現代ではキリスト者も含めて、「主の再臨」を信じなくなっている。そういう時代の中に私たちはいる。
ー第二ペトロ 3：8ー9「愛する人たち、このことだけは忘れないでほしい。主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせているのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。」
・この譬えには強い自己責任が唱えられている。失敗者（予備の油を忘れた者）は救われないという思想はイエスのものでなく、マタイの付加であろう。神は「人の滅びではなく、救いを望んでおられる」とイエスは考えられたと思われる。
ーカール・バルトの注解「イエス・キリストを信じる者も信じない者もすべて神の怒りから救い出される。地獄は存在するかもしれないが、最後には空き家になる」。

**2. タラントンの譬え**
・この譬えもまた終末と再臨を前提にしている。「不在の主人」とは天に昇ったキリストを指す。キリストがなかなか来ない（長い旅に出ている）、その間を私たちはどのように待つのかが語られている。人は与えられた才能（タレント）をどのように生かすべきか、人に与えられる才能は神から託されている賜物（カリスマ）であることを自覚せよと語られる。タラントンは貨幣の単位で、一タラントンは6,000 デナリ、銀 40 キロに相当する。一デナリは当時の日給だったので、一タラントンは約 16 年分の賃金となる。最初の僕に託された五タラントは、八十年分の賃金という膨大な金額である。
ーマタイ 25：14ー18「『天の国はまた次のように例えられる。ある人が旅行に出かける時、僕たちを呼んで、自分の財産を預けた。それぞれの力に応じて、一人には五タラントン、一人には二タラントン、一人には一タラントン預けて旅に出かけた。早速、五タラントン預かった者は出て行き、それで商売をして五タラント

ンをもうけた。同じように二タラントン預かった者も、ほかに二タラントンもうけた。しかし、一タラントン預かった者は、出て行って穴を掘り、主人の金を隠しておいた。』」
・主人が僕に託したタラントンは三人とも同額ではない。しかし、五タラントン預かった僕も二タラントン預かった僕も、平等に忠実な僕と評価されている。僕の忠実度は預かった額や儲けの額ではではなく、それぞれの努力に対する評価である。このタラントンから「タレント（才能）」という言葉が生まれた。
ーマタイ 25：19－23「かなり日がたってから、僕たちの主人が帰って来て、彼らと清算を始めた。まず五タラントン預かった者が進み出て、ほかの五タラントンを差し出して言った。『ご主人様、五タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに五タラントンもうけました。』主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』次に二タラントン預かった者も進み出て言った。「ご主人様、二タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに二タラントンもうけました。」主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』」
・主人がタラントンを生かすように預けたのであれば、預かった一タラントンを地中に埋めてしまった僕は怠け者ということになる。「タラントンを減らさぬよう地中に隠しておいた」という僕に対して、主人は「私を厳しい主人だと思うなら、銀行にタラントンを預けるべきだった」と非難している。
ーマタイ 25：24－28「ところで、一タラントン預かった者も進み出て言った。『ご主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていましたので、恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました。御覧ください。これがあなたのお金です。』主人は答えた。『怠け者の悪い僕だ。私が蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集めることを知っていたのか。それなら、私の金を銀行に入れておくべきであった。そうしておけば、帰って来たとき、利息つきで返してもらえたのに。さあ、そのタラントンをこの男から取り上げて、十タラントン持っている者に与えよ。』」
・才能は用いれば用いるほど豊かになる。一タラントンを用いなかった僕は、豊かどころか全てを失ってしまった。この喩えは「他の人は五タラントンや三タラントンなのに、自分は一タラントンだ」として、不満を持つ人の投げやりな生き方を戒めている。彼は一タラントンがどれだけ大きい恵みかを忘れていた。
ーマタイ 25：29－30「だれでも持っている人は更に与えられ豊かになるが、持っていない人は持っているものも取り上げられる。この役に立たない僕を外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」

**3. タラントンの譬えをどう読むか**
・「だれでも持っている人は更に与えられ豊かになるが、持っていない人は持っているものも取り上げられる」はイエスの言葉ではなく、マタイの付加とされる。社会学では「経済格差の拡大」等が「マタイ効果」と呼ばれる。社会学者ロバート・マートンは条件に恵まれた研究者は優れた業績を挙げることでさらに条件に恵まれる「利益-優位性の累積」メカニズムを指摘した。彼はマタイ福音書の「持っている人は与えられていよいよ豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる」という言葉から、このメカニズムを「マタイ効果」と命名した。
・神学者の栗林輝夫は「マタイ効果」の負の側面を語る。聖書は時代の中で読むべきものだ。
ー栗林輝夫・福音と世界 2014 年 1 月号「今日我々が目撃しているのは、経済のグローバル化によって、『持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまで取り上げられる』（マタイ 13：2、他）というマタイ効果であり、一部の企業家がとてつもない報酬を得る一方、大勢の若者がワーキング・プアに転落していく光景である。資本のグローバル化は生産拠点を労働力の安い地域に移動させ、人々を結びつけてきた地域の文化を根こぎにし、地方の中小都市の街を軒並みシャッター・ストリートにした。かつて日本は一億総中流の経済格差のない社会であったが、今では先進国の中でアメリカに次ぐ格差社会になってしまった」。

**53. マタイ 25：31－46、最後の審判の時**
**1. すべての民族を裁く**
・マタイは「人の子イエスが天使たちを従え栄光の座に着いた時、審判を受けるため、全世界の民族が栄光の座の前に集められる」と記す。マタイ 13：49、黙示録 20：12 にも最後の審判の記事がある。
ーマタイ 13：49「世の終わりにもそうなる。天使たちが来て、正しい人々の中にいる悪い者どもをより分け、燃え盛る炉の中に投げ込むのである。悪い者どもは、そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」

ーヨハネ黙示録 20:12「私はまた、死者たちが、大きな者も小さな者も、玉座の前に立っているのを見た。幾つかの書物が開かれたが、もう一つの書物も開かれた。それは命の書である。死者たちは、これらの書物に書かれていることに基づき、彼らの行いに応じて裁かれた」。
・人は生前の行いにより裁かれると初代教会は信じた。25 章では人が羊と山羊に譬えられ、羊飼いが羊を右、山羊を左に分ける。
ーマタイ 25：31－33「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来る時、その栄光の座に着く。そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、羊を右に山羊を左に置く。」
・再臨の王イエスは、善き羊に譬えられた正しい人たちを祝福し、神の国を受け継ぐよう語る。彼らの善行が神の国を受け継ぐにふさわしいからである。その行為とは、弱者への援助と、信仰のゆえに迫害され牢に入れられている人たちへの慰問である。この譬えは初代教会が置かれた苦難と迫害の時代を反映している。迫害されている同胞キリスト者を慰めることこそ、主が喜ばれる行為だとマタイは語る。
ーマタイ 25：34－36「そこで、王は右側にいる人たちに言う。『さあ、私の父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちに用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちは、私が飢えていた時に食べさせ、のどが渇いていた時に飲ませ、旅をしていた時に宿を貸し、裸の時に着せ、病気の時に見舞い、牢にいた時に訪ねてくれたからだ。』」
・王に誉められた人たちには善行をした意識すらない。彼らは「いつ私たちがそのような善行をしたでしょうか」と王に質問する。彼らには困っている人々を助けるのは当然だという善意しかない、だから誉められようなどとは思わない。彼らの謙虚な答えを聞いた王は「私の兄弟である最も小さな者を助けたことは、王である私を助けたのと同じである」と彼らを祝福する。
―マタイ 25：37－40「すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつ私たちは、飢えているのを見て食べ物を差し上げ、のどが渇いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか。いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。』そこで、王は答える。『はっきり言っておく。私の兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、私にしてくれたことなのである。』」
・王の左側に分けられ、山羊に譬えられた人々の審判が始まる。王は最初から「呪われた者ども、私から離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ」と厳しい言葉を彼らに突きつける。永遠の火は焼き尽す滅びの火である。しかし、彼らには悪を行ったという意識はない。王なるイエスは彼らの偽善を追及し、弱く困苦の中にいる者らを助けなかったのは私を助けなかったのと同じであると彼らを叱る。最後に王の判決が下り、悪しき山羊には永遠の罰が与えられる。
ーマタイ 25：41－46「それから、王は左側にいる人たちにも言う。『呪われた者ども、私から離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ。お前たちは、私が飢えていた時に食べさせず、のどが渇いた時に飲ませず、旅をしていた時に宿を貸さず、裸の時に着せず、病気の時、牢にいた時に、訪ねてくれなかったからだ。』すると彼らも答える。『主よ、いつ私たちは、あなたが飢えたり、渇いたり、旅をしたり、裸であったり、病気であったり、牢におられたりするのを見て、お世話しなかったでしょうか。』そこで、王は答える。『はっきり言っておく。この最も小さい者にしなかったのは、私にしてくれなかったことなのである。』こうして、この者どもは永遠の罰を受け、正しい人たちは永遠の命にあずかるのである。」

**2. 最後の審判の記事から学ぶもの**
・25 章後半の教えによれば、神の審判は、人が生前に何を為したかによって決まる。つまり、どれだけ恵まれない人々のために働いたかにかかっている。空腹の人に食べさせ、喉が渇いた人に飲ませ、旅人をもてなし、病人を見舞い、牢獄にいる人を慰めることは、誰にもできる。この教えで人助けをした人は、自分が善行をしている意識さえなく、それどころか、隣人を助けることはむしろ当然と考えている。助けないではおれないから助ける、彼らは自然に心から湧き出た行動をしている。
・このマタイ 25 章の記事は最後の審判としてイエスが語られたものというよりも、マタイが教会の成員に向かって語ったものであろう。そこでは、「飢えている者に食べさせ、のどが渇いている者に飲ませ、旅をしている者に宿を貸し、裸の者に着せ、病気の者を見舞い、牢にいる者を訪ねよ」と命じられている。明らかに、キリストの福音を伝えるために放浪し、投獄され、飢え渇き、みすぼらしい身なりをし、宿泊する家もない、巡回伝道者に対する支援の勧めがここに語られている。
・しかし、この勧めの中にはイエスの教えが満ち満ちている。イエスは弟子たちに「私の羊を飼いなさい」

と命じられ、弟子たちはその教えを実践したのである。
ーマタイ 9:36-38「群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。そこで、弟子たちに言われた。『収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。』」

**3. 隣人を愛することこそ、良き行為**
・「私の兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、私にしてくれたことだ」という言葉は、多くの人々を動かして来た。レフ・トルストイはこの言葉を読んで、「愛あるところに神あり」（靴屋のマルチン）という民話を書いた。トルストイは目の前にいる、困っている人こそイエスなのだと気づいたのだ。
ー靴屋のマルチンから「キリストから『明日、おまえのところに行く』と告げられたマルチンは、仕事をしながら窓の外の様子に気をとめる。雪かきをしているおじいさんを家に迎え入れてお茶をご馳走する。赤ちゃんを抱えた貧しいお母さんにショールをあげた。リンゴを盗んだ少年のためにとりなしをする。しかしキリストは来なかった。マルチンは床に就き、夢の中にキリストが現れた。キリストはマルチンに言った『今日、あなたは私を歓迎してくれた。私が飢えていた時、あなたはパンをくれた。私が渇いている時、あなたはお茶を飲ましてくれた。私の兄弟であるこの小さい者にしたことは私にしたことなのである』」。
・マザー・テレサは「身近にいる人をまず助ける」よう勧めた。彼女は何よりも貧しい人を助けることを優先した。彼女はノーベル平和賞の記念晩餐会を断った。「晩餐会はいりません。そのお金を貧しい人に使って下さい」。マザー・テレサは常に、「大切なことは、遠くにいる貧しい人や、大きな援助をすることではなく、身近な人に対して、愛をもって接することです」と語っていた。1997 年マザー・テレサはインドのカルカッタの、自身が創立した修道院で「もう息ができない」の一言を残して天に召された。マザーの生涯は、インドの貧しい人たちに捧げ切った 87 年だった。
ー松見俊・ダイアナ妃とマザー・テレサ「1997 年夏のほぼ同じ時期に、ダイアナ妃とマザー・テレサが亡くなった。ダイアナ妃は人に愛され、幸せになりたいと願い、それを追い続け、それが得られないままに世を去っていった。一方、マザー・テレサは人に愛を与えたい、幸せを与えたいと願い続けた。マザー・テレサの生涯は満たされた生涯だったのではないかと思う」
・16 世紀に日本にキリスト教が伝えられ、短期間のうちに、多くの日本人が改宗して切支丹になったが、何が当時の人々の心を捕らえたのか。歴史学者たちは「宣教師やキリシタンたちが、キリストの愛の実践に基づいて、病める者を見舞い、その死を看取り、貧者であっても丁重に葬っていたことに感動した者たちがキリシタンに改宗した」のではないかと分析している（金城学院大学・筒井早苗氏）。
ー1555 年イエズス会士日本通信「異教徒等はわが死者を葬る方法を見て大いに感激せり、（中略）キリシタン等が最も貧窮なる者に対しても、富者に対すると同一の敬意を表するのを見て、その博愛と友情を認め、（中略）我らの主キリストの教えに勝るものなしと言えり」。
ー1582 年年報「長崎で疫病が流行った時、二人のパードレが自分たちも同じ熱病に罹りながら、絶えず告白を聴き、葬儀を行い、常に病人の救済を怠らなかった。それを見た常陸国の坊主が感激して切支丹になった」。

**54. マタイ 26：1ー30、ベタニヤでの油注ぎと最後の晩餐**
**1. イエスを殺す計略の進行**
・イエスは神殿崩壊を預言され（24：1ー2）、それに憤慨するユダヤ教指導者たちは、イエスを殺す計略を練ったが、過越祭の間は、実行を見合わせようと申し合わせた。祭の間、エルサレムには 200 万人を超える巡礼者が集まり、民衆に人気のあるイエス逮捕は暴動を引き起こす可能性があったからである。
ーマタイ 26：1ー5「イエスはこれらの言葉を語り終えると、弟子たちに言われた『あなたがたも知っているとおり、二日後は過越祭である。人の子は、十字架につけられるために引き渡される』。そのころ、祭司長たちや民の長老たちは、カイアファという大祭司の屋敷に集まり、計略を用いてイエスを捕え、殺そうと相談した。しかし、彼らは『民衆の中に騒ぎが起こるといけないから、祭りの間はやめておこう』と言っていた」。
・十二弟子の一人ユダはイエスを裏切ろうとしていた。マルコやマタイはその理由を記さないが、ヨハネは金銭欲であると記している（ヨハネ 12：4ー6）。時代が経るに従い、ユダをサタン化する傾向が強まるが、これは正当ではない。ユダはメシアとして何も行動を起こさないイエスに失望し、裏切ったのであろう。
ーマタイ 26：14ー16「そのとき、十二人の一人でイスカリオテのユダという者が、祭司長たちのところへ行き、『あの男をあなたたちに引き渡せば、幾らくれますか』と言った。そこで、彼らは銀貨三十枚を支払うことにした。そのときから、ユダはイエスを引き渡そうと、良い機会をねらっていた。」

・イエスが招かれた十二弟子の中にはイスカリオテのユダもいたし、ペテロもいた。ユダはイエスを裏切った。彼は悪人（毒麦）だったのか。ユダはイエスならば世を救う力を持たれているとの希望を持って弟子団に入り、他の弟子たちがイエスを見捨てた後もイエスに信従して来た。彼は良い麦として招かれたのに、何時の間にか毒麦に変ってしまったのだろうか。ペテロはどうだろうか。彼は十二弟子の筆頭であり、イエスのために殉教している。彼は良い麦だったのか。しかし、イエスが捕えられた時、ペテロは大祭司の邸でイエスを否認している。ペテロもまたイエスを裏切ったが、その時の彼は毒麦であったのか。ペテロの行為とユダの行為はどこが違うのか。「同じ人が良い麦にも毒麦にもなりうるのではないか」。毒麦の譬えをアウグスティヌスは語る。
ー山田昌・アウグスティヌス講話から「誰が毒麦で誰が良い麦であるかは私たちにはわからない。全ての信徒が毒麦にも良い麦にもなりうる。ある意味では、私たち各自のうちに毒麦と良い麦が共存しているともいえる。だから、他人が毒麦であるか否かを裁くよりも、むしろ自分が毒麦にならないように、自分の中にある良い麦を育て、毒麦を殺していくように」。

**2. ベタニヤで香油を注がれる**
・二つの裏切りの記事に囲まれて、香油をイエスに捧げた女性の記事が描かれる。ベタニアの女は高価な香油をイエスに捧げた。イエスの弟子達は、無駄使いしたと彼女を非難した。香油の値段の三百デナリは、当時の労働者一年分の賃金に相当した。
ーマタイ 26：6ー9「さて、イエスがベタニヤでらい病の人シモンの家におられた時、一人の女が、極めて高価な香油の入った石膏の壺を持って近寄り、食事の席に着いておられるイエスの頭に香油を注ぎかけた。弟子たちはこれを見て、憤慨して言った『なぜ、こんな無駄使いをするのか。高く売って、貧しい人々に施すことができたのに』」。
・祭司長たちはイエスを殺す計画を立て、弟子の一人ユダはイエスを裏切ろうとしている。他の弟子たちはイエス最後の時が近づいていることに気付かない。その中で、女性は持っているもの全てを捨てて香油を求め、それを自分に注いでくれた。この香油は、メシア＝油注がれた者としての自分の戴冠式であり、また埋葬の準備として香油が注がれたとイエスは感じられた（香油は死者の埋葬時に体に塗られる）。
ーマタイ 26：10ー13「イエスはこれを知って言われた。『なぜ、この人を困らせるのか。私に良いことをしてくれたのだ。貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが、私はいつも一緒にいるわけだはない。この人は私に香油を注いで、私を葬る準備をしてくれた。はっきり言っておく。世界中どこでも、この福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。』」
・この物語は四福音書全てに記載される。弟子たちの記憶に残る印象的な出来事であったのだろう。この女性のひたむきな行為が十字架を前にしたイエスを慰めた。聖なる浪費である。新生賛美歌 652 番「ナルドの壺」はこの行為を歌う。
ー新生讃美歌 652 番「ナルドの壺ならねど、捧げまつるわが愛、御業のため、主よ清めて、受けませ、受けませ」。

**3. 過越の食事をする**
・過越祭の第一日目は除酵祭で、種入れぬパンを食べて急いでエジプトを脱出した記念を行う（出エジプト 12：31ー34）。イエスは、弟子たちに過越の食事の用意をするように命じる。
ーマタイ 26：14ー19「除酵祭の第一日に、弟子たちが、イエスのところに来て、『どこに過越の食事をなさる用意をいたしましょうか』と言った。イエスは言われた。『都のあの人のところに行ってこう言いなさい。「先生が、私の時が近づいた。お宅で弟子たちと一緒に過越の食事をすると言っています」。弟子たちは、イエスの命じられたとおりにして、過越の食事の準備をした。」
・夕方になり食事が始まった。その時、イエスが、「あなたがたの一人が私を裏切ろうとしている」と言われたので弟子たちは動揺した。弟子たちはことごとく「まさか私のことでは」と語り始める。弟子の誰もがイエスを裏切る可能性を持っていた。
ーマタイ 26：20ー25「夕方になると、イエスは十二人と一緒に食事の席に着かれた。一同が食事をしているとき、イエスは言われた『はっきり言っておくが、あなたがたのうちの一人が私を裏切ろうとしている。』弟子たちは非常に心を痛めて、『主よ、まさか私のことでは』と代わる代わる言い始めた。イエスはお答えになった。『私と一緒に手で鉢に食べ物を浸した者が、私を裏切る。人の子は聖書に書いてあるとおりに去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。生まれなかった方がその者のために良かった。』イエス

を裏切ろうとしていたユダが口をはさんで、『先生、まさか私の事では』と言うと、イエスは言われた。『それはあなたの言ったことだ。』」

4. 主の晩餐
・最後の晩餐の時、イエスは弟子たちに別れの言葉を与える。初代教会は、この「最後の晩餐」を記念して、礼拝の中で「主の晩餐式」を行った。
ーマタイ 26：26－30「一同が食事をしている時、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた。『取って食べなさい。これは私の体である』。また、杯を取り、感謝の祈りを唱え彼らに渡して言われた。『皆、この杯から飲みなさい。これは、罪が赦されるように、多くの人のために流される私の血、契約の血である。言っておくが、私の父の国であなたがたと共に新たに飲むその日まで、今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい。』一同は賛美の歌を歌ってからオリーブ山へ出かけた。』
・「主の晩餐式」は現代の教会に受け継がれ、守られている。信徒は「主の晩餐式」を、イエス・キリストが十字架で肉を裂き、血を流し、その死により私たちの罪を購って下さったことを記念する式と理解する。パウロは初代教会から伝承された「主の晩餐の式辞」を記している。
ー第一コリント 11：23－26「私があなたがたに伝えたことは、私自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、感謝の祈りをささげてそれを裂き、『これは、あなたがたのための私の体である。私の記念のためこのように行いなさい』と言われました。また、食事の後で、杯も同じようにして、『この杯は、私の血によって立てられる新しい契約である。飲む度に私の記念としてこのように行いなさい』と言われました。だから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むごとに、主が来られる時まで、主の死を告げ知らせるのです」。
・教会が主の晩餐式を執り行うようになった経緯については二つの流れがある。一つはイエスと弟子たちの最後の晩餐を記念するもの、もう一つはイエスが群集と共に取られた荒野の食事に起源を持つ。イエスは集まった群集が食べるものもない状況を憐れまれ、手元にあったパンと魚で五千人人を養われた。大勢のものが一つのパンを食する、今日で言えば愛餐の食事が、主の晩餐式になったと考える人もいる。初代教会では、最後の晩餐と、荒野での共食が一つになって、主の晩餐式が執り行われた。弟子たちとの会食を強調する教会では主の晩餐式をクローズで行い（受洗者のみが参加する）、荒野の共食を重視する教会はオープンで行う（だれでも参加できる）。バプテストの群れでは、「どちらも正しく、どのように行うかはそれぞれの教会の選びだ」と認める。

55. マタイ 26：31－56、ゲッセマネの祈りとイエスの逮捕
1. ペトロたちの離反を予告する
・イエスは、祈るためにゲッセマネに向かわれる。その道中で、イエスは弟子たちの離反を予告される。しかしイエスはガリラヤでの再会を約束されたとマタイは伝える。ガリラヤでの復活顕現を体験した初代教会の信仰がここに表明されているのであろう。
ーマタイ 26：31－32「そのとき、イエスは弟子たちに言われた。『今夜、あなたがたは皆私につまずく。「私は羊飼いを打つ。すると羊の群れは散ってしまう」（ゼカリヤ 13：7）と書いてあるからだ。しかし、私は復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く。』」
・ペトロは「何が起ころうと自分はつまずくことはない」と言う。自分だけは違うと言い張るペトロに、イエスは「あなたは、今夜鶏が鳴く前に三度、私を知らないと言うであろう」と言う。なおも言い張るペトロは、自分の弱さに気付いていない。他の弟子たちもペトロに追従して離反を否定した。
ーマタイ 26：33－35「するとペトロが『たとえ、みんながあなたにつまずいても、私は決してつまずきません』と言った。イエスは言われた。『はっきり言っておく。あなたは今夜、鶏が鳴く前に、三度私のことを知らないと言うだろう』。ペトロは、『たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどと決して申しません。』と言った。弟子たちも皆同じように言った。」

2. ゲッセマネで祈る
・一行はゲッセマネの園に着いた。イエスの心は悲しみに溢れ、弟子たちの前で悶え苦しみ始めた。イエスは弟子たちに、この場に留まり、目を覚まして、祈るよう命じられた。
ーマタイ 26：36－38「それから、イエスは弟子たちと一緒にゲッセマネという所に来て、『私が向うへ行っ

て祈っている間、ここに座っていなさい。』と言われた。ペトロおよびゼベダイの子二人を伴われたが、そのとき、悲しみもだえ始められた。そして、彼らに言われた。『私は死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、私と共に目を覚ましていなさい。』」
・イエスは「この杯を取り除いてください」と祈られた。しかし、神からの返事はない。イエスは「十字架の死があなたの御意であるならば、すべてを委ね、従います」と祈られた。その後、イエスは祈りを中断して、弟子たちの所に戻ると、彼らは眠り込んでいた。イエスは彼らの弱さを目の当たりにして、「誘惑に陥らぬよう目を覚まして祈る」ように命じられた。
ーマタイ 26：39－41「少し進んで行って、うつぶせになり、祈って言われた。『父よ、できることなら、この杯を私から、過ぎ去らせてください。しかし、私の願いどおりだはなく、御心のままに。』それから、弟子たちのところへ戻って御覧になると、彼らは眠っていたので、ペトロに言われた。『あなたがたはこのように、私と一緒に目を覚ましていられなかったのか。誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。』」
・イエスは園の奥へ再び戻り、二度目の祈りを始められた。祈りの後、イエスが弟子たちのところへ戻ると、彼らはまだ眠っていた。イエスは彼らから離れ、三度目の祈りに入られる。イエスは最初の苦悩の祈りから完全に立ち直り、眠っている弟子たちに語られた「さあ起きよ。立て、目を覚ませ。見よ。私を罪人に引き渡す者が、園の入り口まで来ている」。
ーマタイ 26：42－46「更に、二度目に向うに行って祈られた。『父よ、私が飲まないかぎりこの杯が過ぎ去らないのでしたら、あなたの御心が行われますように。』再び戻って御覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠かったのである。そこで、彼らを離れ、また、向うへ行って、三度目も同じ言葉で祈られた。それから、弟子たちのところに戻って来て言われた。『あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。時が近づいた。人の子は罪人たちの手に引き渡される。立て、行こう。見よ、私を裏切る者が来た。』」

**3. 逮捕される**
・祭司長たちの率いる集団が、イエスを捕えるため園の入り口まで迫っていた。彼らは武器を持ち、大勢で来た。案内役になったユダは手順通り、イエスに接吻しようとした。その時、イエスはユダに「友よ」と呼びかけられた。イエスにはユダに対する憎しみはなかった。ペトロが剣で大祭司の手下に斬りかかり、片耳を斬り落とした時、イエスはペトロを制し諌められた「剣を取る者は剣で滅びる」。
ーマタイ 26：47－52「イエスが話しておられると、十二人の一人のユダがやって来た。祭司長や民の長老の遣わした大勢の群衆も、剣や棒を持って一緒に来た。イエスを裏切ろうとしていたユダは、『私が接吻するのが、その人だ。それを捕まえろ』と、前もって合図を決めていた。すぐイエスに近寄り、『先生、こんばんは』と言って接吻した。イエスは、『友よ、しようとしていることをするがよい』と言われた。すると人々は進み寄り、イエスに手をかけて捕えた。そのとき、イエスと一緒にいた者の一人が、手を伸ばして剣を抜き、大祭司の手下に打ちかかって片方の耳を切り落とした。そこで、イエスは言われた『剣をさやに納めなさい。剣を取る者は剣で滅びる。』」
・「剣を取る者は剣で滅びる」、世界が軍事力の均衡で平和が保たれているのだとしたら、それは真の平和ではない。軍事力の均衡で保つ平和は、やがて崩れる。初代教会はイエスが逃れようと思えば出来たのに、あえて逃れようとはされなかったと受け止めた。
ーマタイ 26：53－56「『私が父にお願いできないとでも思うのか。お願いすれば、父は十二軍団以上の天使を今すぐ送ってくださるであろう。しかしそれでは、必ずこうなると書かれている聖書の言葉がどうして実現されよう。』またそのとき、群衆に言われた。『まるで強盗にでも向かうように、剣や棒をもって捕えに来たのか。私は毎日、神殿の境内に座って教えていたのに、あなたたちは私を捕えなかった。このすべてのことが起こったのは、預言者たちの書いたことが実現するためである。』このとき、弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。」

**4. 私たちはこの箇所をどう読むか**
・ゲッセマネの物語を通して私たちは人間の弱さを見る。最初の弱さはイエスの弱さだ。イエスは「死を前におののかれた」とある。私たちはイエスの弱さに、慰めを覚える。私たちもまた、苦しみの杯を飲まなければいけない時がある。重い病に冒される、生涯をかけた事業が破綻に追い込まれる、愛する人が亡くなる。人生の波風の中で、私たちは「もだえ苦しむ」。その時、私たちはイエスさえおののかれたことを知り、慰められる。イエスは私たちのために弱さを隠されなかった。だからこそ、この人は私たちの友となられた。人

は苦難を通して神に出会う。イエスは人として本当に苦しまれた故に、「神は復活という応答を与えて下さった」と私たちは信じる。
ーマタイ 27:46「三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』。これは、『わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか』という意味である」。
・「目を覚ましている」ことができない私たちがそこにいる。「心は燃えていても肉体は弱い」、その弱い私たちのために「キリストは弱くなられた」。イエスは苦しみの中でも自分を閉じられず、弟子たちに弱さを見せて下さった。「大祭司イエスは、自分自身も弱さを身にまとっているので、無知な人、迷っている人を思いやることができる」、まさにそこに救いがある。
ーヘブル 5：7「キリストは、肉において生きておられた時、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、その畏れ敬う態度のゆえに聞き入れられました」。
・ペテロはイエスが「今夜、あなたがたは皆私につまずく」と言われた時に「みんながつまずいても、私は決してつまずきません」と答えた。そのペテロはイエスが血の汗を流して祈っておられた時、眠りこけ、捕り手たちが来た時は逃げ出し、大祭司の屋敷の人々に「おまえも仲間だ」と問い詰められると、「そんな人は知らない」と三度否認する。鶏が鳴いた時、ペテロはイエスの言葉を思い出し、外に出て、激しく泣いた。ペテロは自分の弱さに泣いた。この涙こそ、ペテロの洗礼の水である。
ーマタイ 26：75「ペトロは、『鶏が鳴く前に、あなたは三度私を知らないと言うだろう』と言われたイエスの言葉を思い出した。そして外に出て、激しく泣いた」。
・ヨハネ福音書によれば、イエスが十字架で死なれた後、弟子たちは故郷ガリラヤに帰って、元の漁師に戻り、そこに復活のイエスが現れる。イエスはペテロに「私を愛するか」と三度聞かれる。ペテロは告白する「主よ、私がどんなにあなたを愛しているかをあなたはご存知です」。そのペテロにイエスは「私の羊を飼いなさい」と命じられた。イエスを裏切った自分に群れが委ねられた事を知った時、ペテロは生れ変わる。弱いペテロが、弱さを知り、祈り求め、主によって強くされた。
ーヨハネ 21:17「三度目にイエスは言われた。『ヨハネの子シモン、私を愛しているか。』ペトロは、イエスが三度目も、『私を愛しているか』と言われたので、悲しくなった。そして言った。『主よ、あなたは何もかもご存じです。私があなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。』イエスは言われた。『私の羊を飼いなさい』」。

**56. マタイ 26：57－75、イエスの裁判とペトロの否認**
**1. 最高法院で裁かれるイエス**
・イエスは大祭司カイアファの屋敷に連行された。直接的にイエスを処刑したのはローマ軍であったが、実際はユダヤ教の最高指導者たちにより、イエスは死に追い込まれた。ペトロは連行されるイエスに、距離をおきながらも、従いて行った。
ーマタイ 26：57－58「人々はイエスを捕えると、大祭司カイアファのところへ連れて行った。そこには、律法学者たちや長老たちが集まっていた。ペトロは遠く離れてイエスに従い、大祭司の屋敷の中庭まで行き、事の成り行きを見ようと、中に入って、下役たちと一緒に座っていた。」
・イエスの裁判は大祭司主導で行われた。彼らは初めからイエスを死刑にしようと企み、多くの証人が、イエスに不利な証言を次々と並べ立てた。しかし、決定的証言はなかなか得られなかった。最後に二人の証人が現れ、「この男は『神の神殿を打ち倒し、三日あれば建てることができる』と言った」と一致した証言をした。不可侵なる聖域である神殿を冒涜した。それは正統派ユダヤ教徒には赦せない事柄であった。
ーマタイ 26：59－61「さて、祭司長たちと最高法院の全員は、死刑にしょうとしてイエスに不利な偽証を求めた。偽証人は何人も現れたが、証拠は得られなかった。最後に二人の者が来て、「この男は、『神の神殿を打ち倒し、三日あれば建てることが出来る』と言いました」と告げた。」
・神殿管理の最高責任者である大祭司は、「神殿を打ち倒す」という証言に強く反応して立ち上がり、「あなたに不利な証言だ。弁明せよ」とイエスに命じた。しかし、イエスは何も答えなかった。
―マタイ 26：62－63「そこで、大祭司は立ち上がり、イエスに言った。『何も答えないのか。この者たちがお前に不利な証言をしているが、どうなのか。』イエスは黙り続けておられた。大祭司は言った。『生ける神に誓って我々に答えよ。お前は神の子、メシアなのか。』」
・イエスは沈黙を破り、「あなたたちは、人の子が力ある方の右の座につき、天の雲に乗って来るのを見ることになる」と述べた。当時の人びとは終末の時、神が人を裁くため来臨すると信じていた。イエスは「自身がメシアとして来て世を裁く」と宣言された。大祭司はイエスの証言に叫んだ「諸君は今、神を冒涜する

言葉を聞いた。これ以上の証人はもう必要ない。」他の人びとも「死刑にすべきだ。」と叫んだ。
ーマタイ 26：64－66「イエスは言われた。『それはあなたが言ったことです。しかし、私は言っておく。あなたたちはやがて、人の子が人の子が全能の神の右に座り、天の雲に乗って来るのを見る。』そこで、大祭司は服を引き裂きながら言った。『神を冒涜した。これでもまだ証人が必要だろうか。諸君は今冒涜の言葉を聞いた。どう思うか。』人々は、『死刑にすべきだ。』と答えた。」
・イエスの復活後、初代教会は安息日を土曜日から日曜日に変えた。これはユダヤ教との全面対決を初代教会が選んだことを意味する。そのため彼らは迫害された。裁判の後、イエスは見張りの下役たちから、唾をかけられ、こぶしで殴られ、平手で打たれた。このような体験を弟子たちもする。
ーマタイ 26：67－68「そして、イエスの顔に唾を吐きかけ、こぶしで殴り、ある者は平手で打ちながら、『メシア、お前を殴ったのはだれか。言い当てて見ろ』と言った。」

**2. ペトロ三度イエスを否認する**
・大祭司の女中はイエスに同行するペトロを記憶していた。彼女が「あなたもガリラヤのイエスと一緒にいた」と言ったので、ペトロは狼狽して否定する。人はいざとなると、死ねない。最初の否認である。
ーマタイ 26：69－70「ペトロは外にいて中庭に座っていた。そこへ一人の女中が近寄って来て、『あなたもガリラヤのイエスと一緒にいた』と言った。ペトロは皆の前でそれを打ち消して、『何のことを言っているにか、私には分からない』と言った。」
・ペトロは大祭司の屋敷を抜け出そうとした。門に近づくと、今度は別の女中に見咎められ，「この人はナザレのイエスと一緒にいました」と言われた。ペトロは「そんな人は知らない」と誓って打ち消した。ペテロの否認がエスカレートしていく。
ーマタイ 26：71－72「ペトロが門も方に行くと、ほかの女中が彼に目を留め、居合わせた人々に、『この人はナザレのイエスと一緒にいました』と言った。そこでペトロは再び、『そんな人は知らない』と誓って打ち消した。」
・三度目は周囲の人々から「お前もあの連中の仲間だ。言葉遣いで分かる」とガリラヤなまりを指摘された。ペトロは進退窮まり、「そんな人は知らない」と呪いの言葉を口にした。その時、鶏が鳴いた。ペトロは今まで意識していなかったイエスの言葉「鶏が三度鳴く前に、あなたは三度私を知らないと言うだろう」を思い出し、自分がイエスを裏切ったことを知り、激しく泣いた。
ーマタイ 26：73－75「しばらくして、そこにいた人々が近寄って来てペトロに言った。『たしかにお前もあの連中の仲間だ。言葉遣いでそれが分かる。』そのとき、ペトロは呪いの言葉さえ口にしながら、『そんな人は知らない』と誓い始めた。するとすぐ鶏が鳴いた。ペトロは、『鶏が鳴く前に、あなたは三度私を知らないと言うだろう』と言われたイエスの言葉を思い出した。そして外に出て激しく泣いた。」
・ペトロはイエスを裏切り、外に出て、大泣きした。しかし、死を選ばなかった。彼は仲間たちの下に帰った。その結果、彼は復活のイエスに出会い、教会の指導者として生かされていく。そのペトロが自分の過ちを告白した文章が聖書の中に残されている。
ー第一ペトロ 2：24「そして（イエスは）十字架にかかって、自らその身に私たちの罪を担ってくださいました。私たちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたは癒されました」。

**3. イエスの裁判についての黙想**
・「神はイエスを通してご自身を啓示してくださった、私たちはイエスを通して神に出会う」。それが初代教会の信仰であり、私たちの信仰だ。しかし祭司長たちはそのイエスを被告席に立たせ、死刑判決を下し、殺してしまった。現代の人びとも同じように神を被告席に立たせて責め立てる。彼らは言う「もし神がいるならば、600 万の人がアウシュビッツで殺された時、何故何もしなかったのか」、「もし神がいるなら 3.11 の大津波で 2 万人の人が溺れ死ぬのを、何故放置されたのか」、「もし神がいるなら、本当にいるのならば、それを証明して見せよ」。現代人もまた神を被告席に立たせ、裁く。それは大祭司がイエスを裁いた裁判と同じ構図である。
ーC. S. ルイス・被告席に立たされる神「古代人は鋭い罪意識を持ち、被告人が裁判官に近づくように神に近づいていった。しかし現代人は罪の意識を持たずに自分が裁判官となり、神が被告席につく」。
・ペテロはイエスが「今夜、あなたがたは皆私につまずく」と言われた時、「たとえ、みんながつまずいても、私は決してつまずきません」と答える。そのペテロは大祭司の屋敷で人々に「おまえもイエスの仲間だ」

と問い詰められると、「そんな人は知らない」と三度否認する（26：74）。ヨハネ福音書によれば、弟子たちは故郷ガリラヤで復活のイエスに出会う。その時、イエスはペテロが裏切ったことを責められず、ただペテロに「私を愛するか」と三度聞かれる。ペテロは泣きながら告白する。「主よ、あなたは全てをご存知です。あなたは私の弱さを知っておられます。私はかつてあなたを裏切ったし、これからも裏切るかも知れません。しかし、私がどんなにあなたを愛しているかをあなたはご存知です」。そのペテロにイエスは「私の羊を飼いなさい」と命じられた（ヨハネ 20：17）。かつてイエスを裏切った自分に群れが委ねられた事を知った時、ペテロは生れ変る。ペテロは弱い人間だったが、自分の弱さを知り、祈り求め、主によって強くされた。
・他方、イスカリオテのユダは仲間のところに戻らず、自死を選ぶ。しかしユダの罪とペテロの罪は同じだ。ペテロは語る「イエスによって選ばれ、任命された、仲間の一人がイエスを裏切り、死んでいきました。私たちはユダに代わる使徒を選ぶべきです」（使徒 1：22）。ペテロはここでユダを非難していない。ユダの行為は彼一人の問題ではなく、自分たちも同じことをしたかもしれない、いや実際にしたとペテロは認識している。ユダがここにいないという事実は、いやでも自分たちの弱さ、逃亡、裏切りを思い起こさせる。イエスを裏切ったのは、ここにいるみんなも同じだ。ユダの問題はキリストを裏切ったことではなく、キリストのところに戻ることが出来なかった、この群れに戻れなかったことだ。過ちを犯したユダが群れに戻れず死んでしまったのは、自分たちがユダを受け入れず、ユダに必要な配慮をしなかったためではないかとペテロは自分を責めている。
ー使徒言行録 1：16-22「兄弟たち・・・ユダは私たちの仲間の一人であり、同じ任務を割り当てられていました。このユダは不正を働いて得た報酬で土地を買ったのですが、その地面にまっさかさまに落ちて、体が真ん中から裂け、はらわたがみな出てしまいました・・・そこで、主イエスが私たちと共に生活されていた間、つまり、ヨハネの洗礼のときから始まって、私たちを離れて天に上げられた日まで、いつも一緒にいた者の中からだれか一人が、私たちに加わって、主の復活の証人になるべきです。」

57. マタイ 27：1ー26，イエスの死刑判決
1. ピラトに引き渡される
・イエスは初めに最高法院で律法により裁かれ、続いてローマ総督ピラトに渡され、ローマ法で裁かれた。植民地の自治機関である最高法院には死刑の実行権はなく、死刑にするためにはローマの法律で裁く必要があった。
ーマタイ 27：1ー2「夜が明けると、祭司長と民の長老たち一同は、イエスを殺そうと相談した。そしてイエスを縛って引いて行き、総督ピラトに渡した。」
・ピラトはイエスに、「お前がユダヤ人の王なのか」と尋ねた。イエスにかけられた神殿冒涜罪は、ユダヤ人の宗教問題に過ぎず、ローマにとってはイエスが「帝国に反逆したのか」が問題だった。祭司長や長老たちがイエスを訴えている間、イエスは沈黙を続けられた。
ーマタイ 27：11ー12「さて、イエスは総督の前に立たされた。総督がイエスに、『お前がユダヤ人の王なのか』と尋問すると、イエスは、『それは、あなたが言っていることです』と言われた。祭司長たちや長老たちから訴えられている間、これに何もお答えにならなかった。」
・ピラトはイエスに反逆行為を認めず、彼を無罪放免にしょうと考えていた。彼は不利な証言に対して弁明するようイエスに勧めたが、イエスは何も語られない。
ーマタイ 27：13ー14「するとピラトは、『あのようにお前に不利な証言をしているのに、聞こえないのか』と言った。それでも、どんな訴えにもお答えにならなかったので、総督は非常に不思議に思った。」
・イエスは裁判の中で一言も弁明されなかった。祭司長たちの罪も、ピラトの罪も、民衆の罪も皆自分で負われるつもりだったからだ。愛とは、何も言わず相手の重荷を負うことである。
ーイザヤ 53:11-12「彼は自らの苦しみの実りを見、それを知って満足する。私の僕は、多くの人が正しい者とされるために、彼らの罪を自ら負った。それゆえ、私は多くの人を彼の取り分とし、彼は戦利品としておびただしい人を受ける。彼が自らをなげうち、死んで罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人の過ちを担い、背いた者のために執り成しをしたのはこの人であった。」

2. ユダ自殺する
・ユダはイエス逮捕に協力した。しかし、祭司長らがイエスをローマ総督ピラトに引き渡すに及んで、自分が彼らに利用され、イエスを売り渡したことを後悔した。ユダはイエスを売って得た銀貨を祭司長たちに返そうとしたが拒否された。ユダは神殿に銀貨を投げ込み、首をくくって死んだ。

ーマタイ 27：3ー5「そのころ、イエスを裏切ったユダは、イエスに有罪の判決が下ったのを知って後悔し、銀貨三十枚を祭司長たちや長老たちに返そうとして、『私は罪のない人の血を売り渡し、罪を犯しました。』と言った。しかし彼らは、『我々の知ったことではない。お前の問題だ。』と言った。そこで、ユダは銀貨を神殿に投げ込んで立ちさり、首をつって死んだ。」
・ユダが投げ込んだ銀貨は祭儀的に汚れた金であり、神殿の収入にはできなかった。祭司長らは相談し、陶器職人の畑を購入し、外国人墓地にすることに決めた。
ーマタイ 27：6ー7「祭司長たちは銀貨を拾い上げて、『これは血の代金だから、神殿の収入にするわけにはいかない。』と言い、相談のうえ、その金で『陶器職人の畑』を買い、外国人の墓地にすることにした。このため、この畑は今日まで『血の畑』と言われている。」
・ペテロもイエスを裏切ったが、やがて弟子団の指導者となった。他方、ユダは首をくくって死んだ。ユダとペテロは何が違ったのか、二人は同じように罪を犯した。ユダはお金を返そうとしたが、「それは我々の知ったことではない。お前の問題だ」と突き放され、自己責任で対応するように求められ、自殺を選んだ。ペテロと異なり、彼には帰るべき家（ホーム）がなかった。他方、ペテロは外に出て泣き、赦しを求めて、仲間のところへ戻った。ユダの問題はキリストを裏切ったことではなく、キリストのところに戻ることが出来なかった、群れに戻れなかったことだ。この差が二人の人生を変えた。
―第二コリント 7:10「神の御心に適った悲しみは、取り消されることのない救いに通じる悔い改めを生じさせ、世の悲しみは死をもたらします。」

**3. 死刑判決を受ける**
・ピラトは祭司長らの一方的な証言だけで、判決を下すことはできず、困惑した。その上、妻が「あの正しい人に関係しないでください」と言っている。困惑するピラトに事態解決の考えが浮かんだ。それは祭りの度に行われる裁判で、釈放する罪人を一人民衆に選ばせる定めだった。彼は集まった群衆に問いかけた「どちらを許したいか。バラバ・イエスか。メシアと呼ばれるイエスか。」
ーマタイ 27：15ー19「ところで、祭りの度ごとに、総督は民衆の希望する囚人を一人釈放することにしていた。そのころバラバ・イエスという評判の囚人がいた。ピラトは人々が集まって来た時に言った『どちらを釈放してほしいのか。バラバ・イエスか。それともメシアといわれるイエスか。』人々がイエスを引きき渡したのは、妬みのためと分かっていたからである。一方、ピラトが裁判の席に着いているときに、妻から伝言があった『あの正しい人に関係しないでください。その人のことで昨夜、夢で苦しめられました。』」
・祭司長らは「バラバを釈放してイエスを死刑にする」ように群衆を扇動した。ピラトが群衆に「二人のうちどちらを釈放してほしいか」と問うと、彼らは「バラバを」と叫び、「イエスを十字架につけろ」と叫んだ。興奮して理性をなくした群衆からは何の答えもなかった。
ーマタイ 27：20ー23「しかし、祭司長たちや長老たちは、バラバを釈放して、イエスを死刑にするようにと群衆を説得した。そこで、総督が『二人のうち、どちらを釈放してほしいのか』と言うと、人々は『バラバを』と言った。ピラトが『では、メシアといわれているイエスの方は、どうしたらよいか』と言うと、皆は『十字架につけろ』と言った。ピラトは『いったいどんな悪事を働いたというのか』と言ったが、群衆はますます激しく、『十字架につけろ』と叫び続けた。」
・ピラトは興奮した群衆が暴動を起こしかねないので、それ以上群衆に問うのを止め、群衆の前で手を洗い、「この人の死については、私には責任はない。責任はお前たちにある。」と言った。ピラトは責任を回避した。興奮した群衆は、「責任は我々と、我々の子孫にある」と叫んだ。
ーマタイ 27：24ー26「ピラトは、それ以上言っても無駄なばかりか、かえって騒動が起こりそうなのを見て、水を持って来させ、群衆の前で手を洗って言った『この人の血について、私には責任がない。お前たちの問題だ。』民はこぞって答えた『その血の責任は、我々と子孫にある。』そこで、ピラトはバラバを釈放し、イエスを鞭打ってから、十字架につけるため引き渡した」。

**4. 「その血の責任は我々にある」と叫ばせたマタイの記述**
・マタイはイエス処刑の際に、民衆（ユダヤ人）に「その血の責任は、我々と子孫にある」言わせた。それは時の政権ローマ帝国への護教的配慮のためであり、同時にマタイの教会がユダヤ人教会から激しい弾圧を受けて来た歴史的事情もそこにあろう。しかし、そのために、後世のユダヤ人迫害の口実が生まれた。ユダヤ人聖書学者モンテフィオーレはこの個所がその後のユダヤ人迫害の根拠とされたと告発する。ナチスのユダヤ人虐殺（ホローコスト）もその延長線上にある。

ーモンテフィオーレ・恐るべき発明から「福音書記者マタイがイスラエルの民に向けた激しい憎悪を見よ。民族全体がここに居合わせていることになっている。キリスト教的支配者や諸国民が、ユダヤ人の上に加えて来た残虐非道の行為はここに由来したのだが、ユダヤ人が自らこれを呼び込んだとされている。人間の血が洪水のように流され、悲惨と荒廃が絶え間なく続くという事態を招いた言葉の一つはこれである」。
・同時に、イエスを殺したのは祭司長でなくピラトでもなく、エルサレム入城でイエスを歓呼して迎えた民衆であったとマタイはここに記す。水野源三は次のような詩を残している。
ー水野源三「ナザレのイエスを十字架にかけよと要求した人、許可した人、執行した人、それらの中に私がいる」。
・同じ信仰がゴスペルソング「君もそこにいたのか」にある。「私もそこにいた」と認識する時、イエスの十字架は、私の出来事になる。
ー君もそこにいたのか「君もそこにいたのか、主が十字架につく時、ああ、なんだか心が震える、震える、君もそこにいたのか」。

**58. マタイ 27：27ー56、イエスの死**
**1. 兵士から侮辱され、十字架につけられる**
・死刑判決を受けたイエスは、総督の兵士たちにより官邸へ連行された。兵士たちはイエスを取り囲み、ユダヤ人の王に見立てて侮辱した。王衣に見立てた赤い外套を着せ、王冠として茨の冠を頭に載せ、王笏に見立てた葦の棒を持たせ、跪き、「ユダヤ人の王万歳」と叫んだ。
ーマタイ 27：27ー31「それから、総督の兵士たちは、イエスを総督官邸へ連れて行き、部隊の全員をイエスの周りに集めた。そして、イエスの着ている物をはぎ取り、赤い外套を着せ、茨で冠を編んで頭に載せ、また、右手に葦の棒を持たせて、その前にひざまずき、『ユダヤ人の王、万歳』と言って侮辱した。また、唾を吐きかけ、葦の棒を取り上げて、頭を叩き続けた。このようにイエスを散々侮辱したあげく、外套を脱がせて元の服を着せ、十字架につけるために引いていった。」
・十字架刑を宣告された囚人は、十字架の横棒を担がされて、刑場まで歩いて行く。イエスは徹夜で調べられ、鞭打たれ、疲れていた。彼は十字架を担ぐことが出来ず、兵士たちは、通りかかったキレネ人シモンに、むりやり十字架を担がせた。
ーマタイ 27：32「兵士たちは出て行くと、シモンという名前のキレネ人に出会ったので、イエスの十字架を無理にかつがせた。」
・イエスの十字架を代りに背負った人の名が明記され、その出身地まで記されていることは、シモンが教会の人々に知られていた信徒であったことを示す。マルコは子供たちの名前（アレクサンドロとルフォス）も記している。シモンは十字架を無理やりに背負わされ、イエスの十字架死を目撃し、そのことが契機となって、彼は信仰に入り、妻や息子たちも信徒になった事が推測される。「強いられた恵み」である。
ーマルコ 15：21「そこへ、アレクサンドロとルフォスとの父でシモンというキレネ人が、田舎から出て来て通りかかったので、兵士たちはイエスの十字架を無理に担がせた」。
ーローマ 16:13「主に結ばれている選ばれた者ルフォス、およびその母によろしく。彼女は私にとっても母なのです」。
・処刑場はゴルゴタ（されこうべ）と呼ばれた丘の上だった。刑場に着くとイエスは手の平に釘を打ち込んで十字架につけられ、痛みを和らげるため、ぶどう酒を与えられた。兵士たちはイエスを十字架に付けた後、剥ぎ取ったイエスの着衣をくじ引きで分配した。現在この跡地には、聖墳墓教会が立てられている。
ーマタイ 27：33ー36「そして、ゴルゴタという所、すなわち『されこうべの場所』へ着くと、苦いものを混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはなめただけで、飲もうとされなかった。彼らはイエスを十字架につけると、くじを引いてその服を分けあい、そこに座って見張りをしていた。」
・イエスの頭上には「ユダヤ人の王イエス」と書かれていた。二人の強盗がイエスの両隣の十字架に架けられた。処刑を見に来た人々はイエスを揶揄し、嘲笑した。
ーマタイ 27：37ー40「イエスの頭の上には『これはユダヤ人の王イエスである』と書いた罪状書きを掲げた。折から、イエスと一緒に二人の強盗が、一人は右にもう一人は左に、十字架につけられていた。そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスを罵って言った。『神殿を打ち倒し、三日で建てる者、神の子なら、自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。』」
・ユダヤ教指導者たちもまたイエスを口汚く罵った。
ーマタイ 27：41ー44「同じように、祭司長たちも律法学者たちや長老たちと一緒に、イエスを侮辱して言っ

た。『他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば、信じてやろう。神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。「私は神の子だ」と言っていたのだから。』一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスを罵った。」
・兵士たちはイエスを十字架につけ、その服を分け合い、見物していた人々は頭を振って、「神の子なら神に救ってもらえ」と罵った。マタイの記述の背景には詩篇 22 編が流れている。
–詩篇 22:8-19「私を見る人は皆、私を嘲笑い、唇を突き出し、頭を振る。『主に頼んで救ってもらうがよい。主が愛しておられるなら助けてくださるだろう』・・・ 犬どもが私を取り囲み、さいなむ者が群がって私を囲み・・・骨が数えられる程になった私のからだを、彼らはさらしものにして眺め、私の着物を分け、衣を取ろうとしてくじを引く」。

**2. イエスの死**
・イエスが十字架に付けられたのは朝の九時ごろだった（マルコ 15：25）。十二時を過ぎると天地が暗くなり、三時ごろイエスは大声で叫んだ。マタイはイエスが「わが神（エリ）、わが神（エリ）、なぜ（レマ）、私をお見捨てになったのですか（サバクタニ）」と叫んだと記述する。「エリ、エリ」というイエスの叫びを、兵士たちはイエスが「預言者エリヤを呼んでいる」と誤解した。
ーマタイ 27：45－47「さて、昼の十二時に、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』。これは、『わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか』という意味である。そこに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、『この人はエリヤを呼んでいる』と言う者もいた。」
・兵士の一人が海綿に含ませた酸いぶどう酒をイエスに差し出そうしたが、他の兵士たちが「エリヤが助けに来るかどうか、少し待て」と制止した。
ーマタイ 27：48－50「そのうちの一人が、すぐに走り寄り、海綿を取って酸いぶどう酒を含ませ、葦の棒に付けてイエスに飲ませようとした。ほかの人々は、『待て、エリヤが彼を救いに来るかどうか、見てみよう』と言った。しかし、イエスは再び大声で叫び、息を引き取られた。」
・神はイエスと共におられた。マタイは詩篇 22 編を引用することによってそれを主張する。
—詩篇 22:1-5「わが神、わが神、なにゆえ私を捨てられるのですか。なにゆえ遠く離れて私を助けず、私の嘆きの言葉を聞かれないのですか。わが神よ、私が昼呼ばわっても、あなたは答えられず、夜呼ばわっても平安を得ません。しかしイスラエルの讃美の上に座しておられるあなたは聖なるお方です・・・ 彼らはあなたに呼ばわって救われ、あなたに信頼して恥をうけなかったのです」。

**3. イエスの死の後で**
・マタイは、イエスが息を引き取った時、三つの出来事が起こったと記している。最初は「神殿の垂れ幕が二つに裂けた」ことである。神殿の垂れ幕は至聖所において聖界と俗界を隔てた幕であるが、イエスの犠牲の死で神殿犠牲が無意味になったことを象徴している。二番目の「地震」は神の裁きを意味する。三番目の「聖徒の復活」は終末の到来を象徴している。いずれも実際に起きた史実ではなく、マタイ独特のイエスの死に対する象徴的解釈とされる。
ーマタイ 27：51－53「そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。そしてイエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、多くの人々に現れた。」
・弟子たちは逃げ去っていた。神は何の救済行為をもされなかった。イエスは神と人の見捨ての中で死んでいかれた。しかし処刑を指揮したローマの百卒長は、「この人は神の子であった」と告白する。
ーマタイ 27：54「百人隊長や一緒にイエスの見張りをしていた人たちは、地震やいろいろの出来事を見て、非常に恐れ、『本当にこの人々は神の子だった』と言った。」
・大勢の女性たちがイエスの処刑を遠くから見守った。イエスが逮捕され、男の弟子たちが逃げ去った後も彼女たちはイエスを見守り、この婦人たちが復活の証人となる。闇の中にわずかな光が残されていた。
ーマタイ 27：55－56「またそこでは、大勢の婦人たちが遠くから見守っていた。この婦人たちは、ガリラヤからイエスに従って来て世話をしていた人々である。その中には、マグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベダイの子らの母がいた。」
・当時のユダヤでは毎日のように十字架の処刑が為されていた。イエスの死も数多い処刑の一つであり、それが歴史を変える出来事になるとは誰も思わなかった。無意味な、惨めな死であった。その意味が変わった

のはイエスの復活の後であった。初代教会は、イザヤ書「苦難の僕」の中に、イエスを見出した。
ーイザヤ 53:4-5「彼が担ったのは私たちの病、彼が負ったのは私たちの痛みであったのに、私たちは思っていた。神の手にかかり、打たれたから、彼は苦しんでいるのだ、と。彼が刺し貫かれたのは私たちの背きのためであり、彼が打ち砕かれたのは私たちの咎のためであった」。
・聖書学者大貫隆は、弟子たちがイエスの死の意味をイザヤ 53 章「苦難の僕」の中に見出したと述べる。
ー大貫隆「イエスという経験」「イエス処刑後に残された者たちは必死でイエスの残酷な刑死の意味を問い続けていたに違いない。その導きの糸になり得たのは聖書（旧約）であった。聖書の光を照らされて、今や謎と見えたイエスの刑死が、実は神の永遠の救済計画の中に初めから含まれ、聖書で預言されていた出来事として了解し直されるのである。彼らはイザヤ 53 章を『イエスの刑死をあらかじめ指し示していた預言』として読み直し、イエスの死を贖罪死として受け取り直した」。

## 59. マタイ 27：57－28：20、イエスの埋葬と復活

### 1. 墓に葬られる

・イエス時代、十字架刑に処された罪人の遺体は、十字架上に放置されて曝しものにされるか、共同墓地に葬られるか、いずれにしても罪人の遺体は粗末な扱いを受けていた。しかし、イエスの遺体は、アリマタヤのヨセフに引き取られ、新しい墓に葬られた。男の弟子たちは逃走していなかったが、婦人たちが、埋葬を見守った。野獣の侵入を防ぐために、墓の入り口は丸石を転がして閉じられた。
ーマタイ 27：57－61「夕方になると、アリマタヤ出身の金持ちでヨセフという人が来た。この人もイエスの弟子であった。この人がピラトのところに行って、イエスの遺体を渡してくれるようにと願い出た。そこでピラトは、渡すようにと命じた。ヨセフはイエスの遺体を受け取ると、きれいな亜麻布に包み、岩に掘った自分の新しい墓に納め、墓の入り口には大きな石を転がしておいて立ち去った。マグダラのマリアともう一人のマリアとはそこに残り、墓の方を向いて座っていた。」
・イエス処刑日は金曜日であり、日没から安息日（土曜日）が始まる。祭司長たちは、イエスの墓を警備するようピラトに願い出た。「三日後に復活する」とのイエスの言葉が彼らの脳裏にあり、弟子たちがイエスの遺体を奪い、復活したと言いふらしかねない。彼らはイエスの墓を封印し、番兵に見張らせた。
ーマタイ 27：62－66「明くる日、すなわち準備の日の翌日、祭司長たちとファリサイ派の人々は、ピラトのところに集まって、こう言った。『閣下、人を惑わすあの者がまだ生きていた時、「自分は三日後に復活する」と言っていたのを思い出しました。ですから、三日後まで墓を見張るよう命令してください。そうでないと、弟子たちが来て死体を盗み出し、「イエスは死者の中から復活した」などと民衆に言いふらすかもしれません。そうなると、人々は前よりもひどく惑わされることになります。』ピラトは言った。『あなたたちには、番兵がいるはずだ。行って、しっかりと見張らせるがよい。』そこで、彼らは行って墓に封印をし、番兵をおいた。」
・聖書学者の佐藤研は、初代教会の復活信仰形成について、「イエスの墓が空であった」という事実が基礎になったと想定する。日曜日の朝、イエスの死体が葬られたはずの墓から消失してしまっていたのであり、その事態が当所を訪れた女たちにまず明らかになったのである。このことの史実性だけはカンペンハウゼンの言うとおり、ほとんど否定できない。そしてそのことは、その報を受けた弟子たちを甚だしい混乱に陥れたことであろう」。

### 2. 復活する

・安息日が終わった週の初めの日（日曜日）の明け方に、マグダラのマリアたちが墓へ行くと、地震が起こり、墓を封印した石は脇へ転がされて墓は開かれていた。そして、まっ白に輝く衣の天使が石の上に座っていた。番兵たちは、目の前に起こったことの驚きと恐れで、死人のように青ざめ、震えていた。
ーマタイ 28：1－4「さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った。すると、大きな地震が起こった。主の天使が天から降って近寄り、石をわきへ転がし、その上に座ったのである。その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった。番兵たちは、恐ろしさのあまり震え上り、死人のようになった」。
・天使は婦人たちに、「イエスは復活された。もうこの墓にはいない。弟子たちとガリラヤで再会するであろう」と告げた。
ーマタイ 28：5－8「天使は婦人たちに言った。『恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方はここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体

の置いてあった場所を見なさい。それから、急いで行って弟子たちにこう告げなさい。「あの方は死者の中から復活された。そして、あなた方より先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。」確かにあなたがたに伝えました。』」
・天使からイエスの復活を告げられた二人の女性は、弟子たちに知らせようと駈けだした。ところがイエスが彼女らの前方に立ち、迎えた。二人はイエスの前にひれ伏した。
ーマタイ 28：9ー10「婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。すると、イエスが行く手に立っていて、『おはよう』と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。イエスは言われた。『恐れることはない。行って、私の兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこで私に会うことになる。』」
・番兵から「イエスの遺体が無くなった」と報告され、祭司長たちは狼狽した。彼らはイエスの弟子たちが、イエスの遺体を盗んだという虚偽の情報を流し、番兵に口止めした。マタイ独自の記事である。
ーマタイ 28：11ー15「婦人たちが行き着かないうちに、数人の番兵は都に帰り、この出来事をすべて祭司長たちに報告した。そこで、祭司長たちは長老たちと集まって相談し、兵士たちに多額の金を与えて言った。『「弟子たちが夜中にやって来て、我々の寝ている間に死体を盗んで行った」と言いなさい。もし、このことが総督の耳に入っても、うまく総督を説得して、あなたがたには心配をかけないようにしょう』。兵士たちは金を受け取って、教えられた通りにした。この話は今日に至るまでユダヤ人の間に広まっている。」
・復活伝承はパウロの手紙の中で、初代教会の言い伝えが文言として残されている。
ー第一コリント 15:3-5「最も大切なこととして私があなたがたに伝えたのは、私も受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおり私たちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと、ケファに現れ、その後十二人に現れたことです」。
・カトリックの聖書学者・百瀬文晃は述べる「イエスの復活と呼ばれる出来事も、ユダヤ教黙示文学の中で流布していた『終末時の死者の復活』という概念抜きには理解出来ない。無類の出来事を経験したイエスの弟子たちは、これを黙示文学の概念に則って、終末に起こる『死者の復活』という出来事が、イエスにおいて先取られたものと理解し、これを『イエスの復活』と呼んだのである」（「イエス・キリストを学ぶ、下からのキリスト論」）。

**3. 弟子たちへの派遣命令**
・イエスを裏切って逃げた弟子たちに「イエスはガリラヤで待っておられる」との使信が届いた。弟子たちはそこに赦しの言葉を聞き、半信半疑でガリラヤに戻り、そこで復活されたイエスと出会う。マタイはその記事を復活物語の締めくくりとして書く。この出会いを通して、弟子たちは「イエスは神の子であった」と言う信仰を与えられ、新しく生きる者になる。
・弟子たちはガリラヤでイエスに再会し、その地で世界伝道への宣教命令が弟子たちに下される。弟子たちはこの命令を受けて、ユダヤ人社会の枠を越えて異邦人世界へ向かって宣教した。
ーマタイ 28：16ー20「さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。そして、イエスに会い。ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。イエスは近寄って来て言われた。『私は天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民を私の弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るよう教えなさい。私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。』」
・社会学者ロドニー・スターク「キリスト教とローマ帝国」によれば、福音書が書かれた紀元 100 年当時のキリスト教徒は数千人という小さな集団であり、紀元 200 年においても数十万人に満たない少数であった。その彼らが紀元 300 年には 600 万人を超え、キリスト教が国教となる紀元 350 年頃には 3 千万人、人口の 50%を超えたとされる。スタークは「キリスト教の中心教義が人を惹き付け、自由にし、効果的な社会関係と組織を生み出していった」からだとする。ローマ時代には疫病が繰り返し発生し、時には人口の相当数を失わせるほどの猛威を振るった。人々は感染を恐れて避難したが、キリスト教徒たちは病人を訪問し、死にゆく人々を看取り、死者を埋葬したと伝えられている。何故ならば聖書がそうせよと命じ、教会もそれを勧めたからだ（紀元 251 年司教ディオニシウスの手紙、エウセビオス「教会史 7. 22. 7-8」）。イエスは弟子たちを通して、生きておられたのである。
・マルコム・ルテはイースター2020 年という詩を書いた。「イエスはどこにおられるのか、閉鎖した我らの教会で行く場を失ったわけでもなく、暗き墓場に封印されているのでもない。鍵は解かれ、石は転がされ、彼は起き上がり、よみがえった・・・彼は今、リネンの帯を解き、看護師と一緒の看護用エプロンをつけ、

ストレッチャーをつかみ、引上げ、死にゆく人々の弱々しい肉体をやさしい手で撫で、希望を与え、息苦しい人に呼吸を、それに耐える力を、彼らに与えた・・・彼はわれらの病室にモップをかけ、コロナの痕跡をふき取った。それは彼にとって死を意味した。聖金曜日の十字架は千ものの場所で起こった。そこで、なすすべのない者をイエスは抱き、彼らと共に死んだ。それこそ、それを必要とする人とイースターを分かち合うために。今や彼らは彼と共によみがえった。実によみがえったのだ」(N.T.ライト「神とパンデミック」から)。

**60.マタイ福音書の学び（補足）～イエスはいかにしてキリストになったのか　佐藤研「悲劇と福音」から**

**1.最初の福音書としてマルコが書かれた**

1.1　マルコにおける悲劇的逆転

1.1.1 イエスの運命の逆転

・マルコでは 12 章以降には奇跡・治癒物語はなくなり、無力なものとして十字架につくイエスを描く。マルコの中核は 14 章から始める受難物語である。そこには、社会的に差別された者たちと連帯し、救済したイエスが、逆に「アウトロー」として命を奪われるという逆転(アイロニー)がある。そのイエスが復活という再逆転により非悲劇化される。しかし復活のイエスの顕現物語はない。著者マルコはおそらく顕現物語を知っていたが、用いなかったのではないかと思われる。

1.1.2 弟子たちの運命の逆転

・十二弟子は死にいたるまでイエスに信従する事を誓う（14：31）が、ゲッセマネでは眠りこむ。イエスの逮捕の場面ではすべての弟子が逃げて行く（14：50)。弟子の筆頭者ペテロは三度に渡ってイエスを否認する（14：62-63)。しかし、弟子たちは「復活のイエスにガリラヤで会える」と約束されて（16：7)、ガリラヤに行き、そこで復活のイエスと出会い、再逆転される。

1.2「認知」の作業

1.2.1 イエスの認知

・受難以前に受難復活予告が三度語られる（8：31、9：31、10：33-34)。また受難の直前にも予告がある（14：７、14：21、14：25、14：27)、このような予告は悲劇性を薄める効果を持つ要素に思える。ゲッセマネでの回避を求める祈り（14：33-36)、十字架上の叫び（15：34）は認知-逆転-再認知ではないか。

1.2.2 弟子たちの認知

・弟子たちの方向から見ると弟子たちの悲劇性は浮き彫りになっている（14：27、14：29－31)。「ペトロが泣き崩れた」(14：71）は逆転のあとの認知の極みである。「復活のイエスとガリラヤで会える」(16：7）は再逆転とも言える。

1.3「苦難」

1.3.1 イエスの苦難

・「私の魂は死ぬほど悲しい」(14：34)、「どうかこの杯を取り去って下さい」(14：36）はイエスの内的な苦難を最もよく示す。イエスは十字架に架かる前にも殴打（14：65)、茨の冠と嘲笑（15：17)、酢による虐待（15：36）を受ける。その苦しみの極みで「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」の叫びが放たれる。認知と逆転の果ての究極の叫びである。

1.3.2）弟子たちの苦難

・「人の子を裏切るその人は禍だ。そのものは生まれて来なかったほうが良かったであろう」(14：21）はユダに対する呪いの言葉ではない。「禍だ」と言う表現類型は旧約以来の話者の深い嘆きを表す。ここでは裏切りの淵に沈む弟子たちすべての苦難が憐憫の痛みに中で見通されている。ペトロの最終句「そして彼はどっと泣き崩れた」(14：72)、この声はその後も幾時も疼いて響く。

**2.マルコには復活顕現物語が欠如している**

2.1 何故マルコには復活顕現物語がないのか

・マルコ福音書には、復活宣言の記事はあってもイエスの顕現物語がない。マルコは十字架の悲劇的ヌミノーゼ（秘跡）に核を見ている。十字架を補填する「復活顕現物語」がなくても、マルコの描きたいものは頂点に達したのである。

2.2 受容的考察、悲劇的物語との一体化のメッセージ

・マルコ福音書は紀元 70 年、ローマ軍によって首都エルサレムが破壊された後、キリスト教がユダヤ教と

袂を分かった頃にユダヤ教徒と異教徒の混在する地方にて書かれた。つまり、当時のキリスト者はユダヤ教徒と異教徒の双方から迫害されていた。マルコが福音書を執筆した最大の関心事は、読者たちに迫害の危険を乗り越えるすべを与えることであった。

**3. 前マルコ受難物語**

3.1 前マルコ受難物語はより古い受難物語

・マルコ 15 章では、詩篇 22 編『苦難の義人』をもとに、イエスを描写する句が集中している。

−マルコ 15：24a「そして彼らは、彼を十字架に付ける」/詩篇 22：17「さいなむ者が・・獅子のように私の手足を砕く」

−マルコ 15：24b「そして、誰が何を取るか籤を引きながら、彼の衣服を分ける」/詩篇 22：19「彼らは、・・私の着物を分け、衣を取ろうとして籤をひく」。

−マルコ 15：34「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのか」/詩篇 22：2 の直接引用。

・マルコ 15 章の背後には、受難死を遂げるイエスの姿を、「苦難の義人の死」と解する古い伝承が潜んでいる。マルコ 16 章「復活宣言」は、おそらく最古伝承層には存在しなかったと思われる。前マルコ受難物語は、より古い段階では、イエス復活の宣言もなく、また、その埋葬の場面で終結していたという可能性である。

・前マルコ受難物語の作者たちは、いわば「復活顕現」も「復活宣言」もない物語がもたらす悲劇的衝撃の中にこそ、「復活」の事柄のヌミノーゼ的核心がより強く再現されると直感していたのではないか。

**4. イエスの十字架事件**

4.1 イエスの生涯の概略

・イエスは、当時の社会・宗教観念からは没落者であり被差別者でしかなかった人々、いわゆる「罪人」と積極的に交わり、お互いが裸の心で飲み食いし、交流できる一種の「祝祭」空間を恒常的に造っていた。これは良識ある人々から見ればスキャンダル的行為であった。当の没落者たちは彼を「メシア期待」で受け入れた。同じ宣教活動に出る者が現れ、直弟子たちと呼ばれた。イエス運動は当時の社会体制の頂点であるエルサレム神殿への批判行動となった。

4.2 悲劇的事件としての十字架事件

・当初は、民衆や弟子たちに熱狂的に迎えられたイエスが、最後には一人で惨死していくという悲劇的「逆転」は、誰の目にも明らかである。加えて弟子たちは、おのおのイエスを裏切って逃げたことで第二の悲劇を演ずる。ペトロに代表される直弟子たちはイエスの「悲劇の「観客」であり、同時に自らイエスを失い、またそのイエスを裏切ったことにより、彼ら自身が第二の「悲劇」の主役となる深刻な「悲劇の二重化」の実例である。

**5. イースター事件**

5.1 弟子たちの負い目

・十字架にかかったイエスを前に逃亡した弟子たちは、イエスを裏切ったことによる巨大な負い目を負い、パニック同然の罪悪感を持ったものと推察される。また彼らには、イエスを葬ることも許されなかったことによる屈辱感もあったであろう。

5.2 遺体消失

・ところが葬られたはずのイエスの遺体が消失した。ユダヤ人たちは、弟子たちがイエスの遺体を盗んだとした（マタイ 28:11-15）。他方弟子たちはイエスの敵対者がイエスの遺体を拉致した（ヨハネ 20:2, 13, 15）と考えた。弟子たちにパニックが再び起こった。

5.3「絶対」の体験とその表象化

・その絶望のどん底にいる弟子たちはイエスの復活を見る。彼らはそれを「イエスが顕れた」（Ⅰコリント 15:5）と表現した。それはイエスの死体がそれ以前に消失している事実が前提となり、「消えてしまった」「死者」のイエスが、新たないのちの姿で「顕現」した体験を弟子たちはした。

5.4「赦し」の体験

・弟子たちは、イエスの復活を自分たちの罪悪へのイエスの赦しとして体験した。ごく少数の弟子がイエスの復活を体験し、その話が説得力を持って伝えられたため、他の多数の弟子に受容されたと考えられる。

・その後、イエスは神によって「天に挙げられた」、「神がイエスを死者たちの中から起こした」として、イ

エスの復活が人々の間に広まっていった。イエスの復活は、弟子たちに生への新たな勇気を与えた。当事者である弟子たちにとっては、それを本当に受け入れるまでには相当の時間がかかったのではないか。

## 6.「喪の作業」としての原始キリスト教の成立

6.1.悲哀ゆえの集結

・ペトロ等イエスを直接裏切った弟子たちはイースター体験によって立ち直るきっかけを得る。互いの悲哀を支え合うために、弟子たちが再集結した。

6.2 償いの業

・イエスの惨死への罪悪感、復活のイエスとの出会いが、「キリスト」、救世主というユダヤの最高の称号をイエスに与えた。弟子たちは、自分たちの「罪」を告白する。それが教団の贖罪信仰のはじめであり、弟子たちは自分たちの払拭できない罪を文字化する。それがケリュグマである。

－Ⅰコリント 15:3-5「私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと、また、ケパに現れ、それから十二弟子に現れたことです」。

・「私たちの罪」とは直弟子たちのイエスの死に対する罪責意識を指すのであろう。イエスに従いきれずイエスを裏切るに至り殺してしまった心の痛み、それを弟子たちは元の生活には戻らないことで負い目を償うとした。

6.3 イエスとの一体性の追求

・イエスを回想し、そうすることによってイエスを再度記憶し、イエスの像に不断に現在に向かって語ってもらう。それが原福音書として伝承された記憶である。彼らは集会の中で、聖餐の儀式を執り行う。これはイエス再会への望みを儀式化したものであり、この世が間もなく終わる時、イエスは十字架死の恥辱から回復され、まことの栄光の中に再び現れるという再臨信仰に発展していく。

## 7.喪の作業の失敗ーイスカリオテのユダの謎

7.1 弟子と対照的なユダの描き方

・マタイ福音書によると、ユダはイエスを裏切り、イエスの復活前に自死したとされる（27：5）。使途行伝ではユダはイエスを売った金で「血の地所」購入したとする（使徒1：18）。

・最初期の原始キリスト教では、イエスが姿を現した 12 人の弟子たちの中にユダを含めていた可能性がある。しかし「裏切り者」となり、キリスト教の救済プログラムからは外され、悪しき背信、神罰の典型、不信仰の代表的見本となっていく。

・ユダは「影」の存在となった。彼の行為はイエスを3回否んだペトロと差はないのに、ユダは「悪魔」とされた。つまり「キリスト者の隠れた自己の姿」、「イエスへの秘められた反抗と憎しみと暴虐の実相を対象化したもの」であり、キリスト教徒はユダを自分と重ねることなしに、彼にすべての罪を負わせた。

## 8.パウロの登場

8.1 パウロの登場

・12 弟子たちはユダヤ教の枠内でイエスを理解するが、ヘレニストたちはイエスを、ユダヤ教を克服した人物（神殿や律法を廃止した）と見た。この急進派の弟子たちが宣教を始めると、パウロは「迫害」を始めたが、紀元33年ごろ、「回心」する。このパウロの「回心＝イスラエルの神による生けるイエスの啓示」はユダヤ教内部での動きであり、パウロはあくまでもユダヤ教徒だった。

・「パウロの会ったイエス」と、弟子たちの会ったイエス」とは異なる。パウロは「イエスの悲劇的十字架」の姿の衝動に、心を開かされた。ファリサイ派的なユダヤの神からの啓示ではなく、それがイエスだと分かったこと、十字架の悲劇に出会い、「受容論的」にその衝動にとらわれた。死を超えて偏在する復活のイエスと出会い、カサルシスを得た。

・キリスト者たちを迫害していたパウロは、イエスの十字架の出来事に間接的に「裏切り者」として関わった。そのため、「キリストは私たちの罪のために死んだ」というケリュグマ文を受容、追体験することができた。

・パウロは自分が迫害してきた人たちが「異邦人伝道」をしていたために、それを熱心に行った。

8.2「十字架の神学」

・十字架の悲劇を神の救いの業としたパウロはそれを言語化し、意識化した。彼は「敗北のうちに勝利を見出した」。悲劇的切迫力、それが生む新しい直観力を「神の知恵」と受け入れた。彼が唱えたのは、「贖罪の神学」と「十字架の神学」である。
・贖罪の神学とは「喪の作業」、十字架悲劇に巻き込まれた者たちの自己認知である。十字架の神学は悲劇の逆転性と苦難性、その屈辱と呪いの側面を正面から見据え、それゆえに与えられる不可解な「力」を言葉にしたものである。

## 9. パウロからマルコへ、さらには第二パウロ書簡へ

9.1 福音書の登場
・マルコはパウロの「十字架の神学」を深く受容し、発展させた。パウロの「力は弱さにおいて完全なものとなる」を具体的に悲劇ドラマ化した。ケリュグマを見る（聞く）だけでは人は悲劇的十字架の本質に出会えない。生き生きとした悲劇物語にして、それぞれが自分で悲劇的カサルシスを追体験してもらうことが重要と考えた。
9.2「パウロの名による書簡」の中の非悲劇化
・「パウロの名に拠る書簡」（あるいは第二パウロ書簡）とは、パウロの直筆ではなく、パウロの流れを汲む弟子たちが紀元 80 年代から２世紀の前半にかけて執筆したと考えられる文書を指す。「コロサイ人への手紙」「エフェソ人への手紙」「テサロニケ人への第二の手紙」「テモテへの第一の手紙と第二の手紙」「テトスへの手紙」の六つを指す。これらの手紙には、真正のパウロ書簡に見られた、十字架の「愚かさ」「弱さ」といった弱さや、それゆえの「力」「救い」という逆説的直観の在り方は受け継がれていいない。
・「十字架」「十字架に付ける」という言葉は真正パウロ書簡 15 回であるが、非真正書簡では 3 回しか出ない（コロサイ人への手紙 2 回、エペソへの手紙 1 回）。
9.3 コロサイ書、エペソ書
・非真正書簡中の十字架への言及の一つは、コロサイ人書の作者が受容した「キリスト賛歌」（1：15～20）の中にある（コロサイ 1：20「神は、御子を通して、御子に向けて、万物を和解させることをよしとされた。地上のものであれ、天上のものであれ、御子の十字架の血を通して平和に至らしめることによって」）。十字架の悲劇性を抉るよりも、作りなされた「平和」に主力がある。
・コロサイ書の他例コロサイ人 2：14（「神は、私たちのためにすべての過ちを赦し、もろもろの戒律によって私たちの債務を定めた証文、を抹消し、これを十字架に釘付けして除去してしまった」）では、十字架が神学的・象徴的に解釈され、罪の赦しをもたらすものと等置されている。この考え方は、真正パウロ書簡には見出されない。
・エペソ書 2：16 は、コロサイ 1：20 をエペソ書の著者が書き換えたもの（「二人の者を自らにおいて一つの新しき人に造り上げて平和を創出し、両者を一つの体において十字架を通して神と和解させ、こうして自らにおいて敵意を抹殺するためであった」）である。エペソ書に置いては「十字架」は、異邦人とユダヤ人の両者間に「平和」を造りなす場であり、コロサイ書にあった「血」という言葉は削除。悲劇的要素がいっそう後退している。
9.4 その他の「パウロの名による書簡」
・第二テサロニケ書、第一・第二テモテ書、テトス書には「十字架」の語が無く、「悲劇」的感性の明らかな後退がある。十字架の悲劇的問題性は抹消せられ、神の直接的な栄光顕現として次のような神話的プロセスのうちに理解される。
–テモテへの第一の手紙 3：16「その者は肉において顕にされ、霊において義とされ、御使いたちに現れ、諸民族に述べ伝えられ、世界中で信じられ、栄光の中に天に挙げられた」。
・「パウロの名による書簡」の「十字架の神学」の非悲劇化が、牧会書簡において完了する。パウロの名によって書かれているが、大きく性格の異なった「パウロ主義的キリスト教」が現れている。

## 10. 福音書の変遷

10.1 福音書の変化
・マルコ福音書が紀元 70 年代に悲劇性の高い物語（イエスの受難物語）を、福音書という独自の器に盛って書き上げられた。この福音書はその後マタイとルカの福音書の第一次資料となった（マタイルカの両福音書はマルコ福音書の改定増補版である）。一方でヨハネは、共観福音書の伝承と間接的な接触を示唆しながら、独自の道をたどって成立した。

・マタイによる福音書においては、「非悲劇化」（悲劇的なるものの後退化）が確認される。マルコには無かった「復活者の顕現物語」が付け加えられた。マタイにおいてイエスは、受難の運命を避けようと思えば避ける力を持っていたが、聖書（旧約の預言）が成就するために無力さという姿を引き受けたに過ぎない。
・ルカによる福音書では、「非悲劇化」（悲劇的なるものの後退化）がいっそう進む。有名な「エマオ途上の顕現」の長いエピソードなどがあり、復活者の栄光が重大で、受難はその前提条件でしか無い。マルコの「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」の叫びが削除され、「父よ、御手に我が魂を委ねます」という言葉でイエスは息を引き取る。また、弟子達に厳しいマルコの記述と比べ、注意深く保護されている。そして、十字架から弟子達が逃避してしまったと言うマルコの記述を書き換えて、目撃者とし、弟子達の「逆転」は、無意味化された。ルカにおいては、ようやく不動になってきた教会制度にとって、悲劇的・没落的感覚は無用の躓きでしかなかったのである。
・ヨハネによる福音書に至っては、「非悲劇化」はある徹底化を達成する。イエスの最後の言葉は「これで完了した」（19：30）である。悲劇的な場面や彼を嘲弄する者すら 1 人もいない。これに見合って、弟子が逃げたと言う記事も何処にもない。イエスは、「告別説教」のなかで、「元気を出せ、私は既に世に勝ったのだ」（16：33）と宣言し、弟子たちはイエスの守りによって安泰であった。「悲劇」が存在しないかを証明する物語に見える。
10.2 非悲劇化され得ぬもの
・ヨハネ福音書で受難の記述が消えるのは時間の問題のように感じられた。実際、ヨハネが影響を受けた「グノーシス主義」的なキリスト教は、その方向に歩んでいた。しかし、ヨハネ共同体では、イエスが死後に「パラクレートス」（弁護者）を派遣する、つまり「イエスの霊が現存する」という認識からすべてが始まっている。そうであるならば、イエスが十字架上の死からよみがえったということに戻らなければならない。いかに「非悲劇化」しようとも、十字架に回帰する。
・マタイ、ルカでも同じことが言える。4 世紀に成立した「ニケア・コンスタンティノポリス信条」（これ以降のキリスト教の基礎となった）の中心部分には、「我々のためポンティオ・ピラトのもとで十字架に付けられ、苦しみ、葬られた」の一句が有る。イエスの神格化と思弁化の中にあっても、十字架の悲劇を示唆する文言を埋没させえぬものであった。キリスト教は、その悲劇性が拒否されるか忘却されるか棚上げされる時、本質的に「似て非なるもの」に変質してしまう。キリスト教徒にとっては、まさに「悲劇の中に」こそ「本質的なものが現れる」と言わねばならない。
10.3 悲劇的なるものは残った
・「悲劇的なるもの」は、キリスト教的福音の発生と展開を担った本質的要素であった。キリスト教はイエスの十字架の「悲劇」に始まり、それに巻き込まれた直弟子たちの悲劇的事柄把握から発生した。その後、パウロはイエスの十字架の悲劇性を再度えぐる形で言語化した。パウロの十字架の神学を継承しつつ、イエスの物語全体を悲劇的観点から再現したのがマルコであった。十字架の記憶に基づく悲劇的感性は、福音の観念化・図式化・固定化に対する最終的な是正力として、今に至るまで働き続けている。
・キリスト教は、いまや現代人に訴える力を失ったように思われるが、現代のように、大小の悲劇がとめどなく起る時代であれば、キリスト教の悲劇性による衝迫性はなお存在している。悲劇への目は、何よりも、否定的な苦難の現象を前にして目を覆うのではなく、それを中和化するものでもなく、それを真正面から凝視することによって、不条理な中にも生きていく新たな豊かな勇気が与えられるかも知れないからである。